

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

We

ウイ

新しい家庭科

逐次刊行物

1990年11.20

国立婦人教育会館

婦人教育情報センター



12

1990

特集 マス・メディアは何処へ

季節のうた

仙田敬子



つお
石落の花

陽の幅に
月日動きて
冬ふかし

マス・メディアは何処へ

特集	●インタビュー 新井直之さん (インタビューア・稲島恭子)	2
	—情報を選択できる力を—	
	●マス・メディアの構造	
	—おしゃべりの世界が消えた?— ・中野 収	8
	●プライバシーも写ルンです	
	—メディアとくらしの共生のために— ・津田正夫	13
	●市民としてテレビメディアにどう関わるか ・竹内希衣子	18
	●人間の歩む道	
	—径書房の十年の仕事の中から— ・原田奈翁雄	22
	●テレビ番組に「女の視点」を ・早川与志子	26
発言	●日本のジャーナリズム考 ・アルベルト・ノヴィック	28
	●いま、なぜミニコミか ・公庄れい	30
	■学習の主人公たち■	
どんな番組をみて (きいて) いますか	32	
横浜市立下田小学校/熊本県宇土郡三角中学校/山形県酒田市酒田北高校		

新しい家庭科を創るために	(小学校) 宣伝と子どもたち	
	—子どもの消費者教育を考える— ・池田雅江	38
	(中学校) 家庭科の中で	
	マス・メディアに迫るこころみ ・足立幸代	44
(高等学校) 情報を意識的に見る		
授業のヒント ・蔵本佳子	49	

連載	荒野のバラ/「第九」の季節 —歌に心を—	田中裕一	56
	家族と家庭科/職業・家庭科がもたらした新傾向	酒井はるみ	60
	大学生たちと歩く/なぜ、そんなに値ぶみされたいの?	小沢牧子	62
	男性学への契機—魔男の宅急便/暗い悩み相談室	諸橋泰樹	64
	私の朝鮮史/アリラン	岡百合子	66
	食べもの文化史/食器と食具	石川尚子	67
	KNOW HOW 共学家庭科/'82年の教育課程改訂にむけて(その4)	湯沢静江	69
	19歳の日記/給料日	金森土岐	70
	広がる運動、広がる人の輪/反天皇制からフェミニズムへ(1)	中村英之	71
	波/たくさんの「ありがとう」	半田たつ子	72

○ひと 金森土岐さん 55

- 情報 男女必修家庭科に向けて都各団体の要請行動と都教委の回答 54 ■こだま「親業訓練をめぐって」 74
- 今月の読書から 53 ●イキイキぐるうぶ 68 ●Weになんでも言おう なんでも聞こう 78
 - 編集室からあなたに 79 ●わたくしからあなたに 80 ●Weの読者会だより 81 ●泉 83
 - 十字路 84 ●アンテナ 86 ●編集後記 88

インタビュー

新井直之さん

・インタビュアー 稲邑恭子

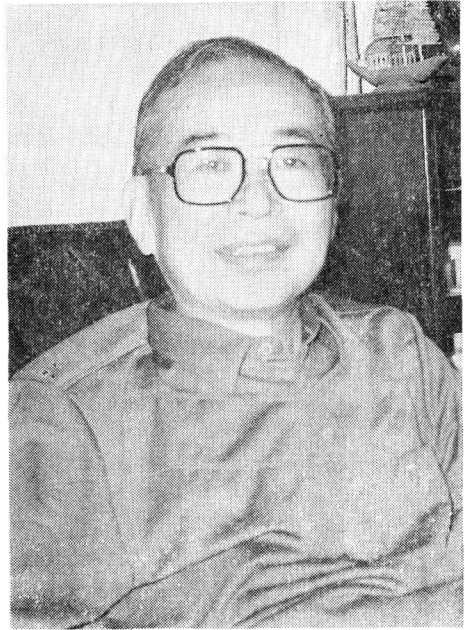
情報を 選択できる力を

現代ジャーナリズムへの批評を様々な角度から精力的に展開し続けていらっしゃる新井直之さんをお訪ねする。

前月号でインタビューをした樋口恵子さんのおつれあい。8月初旬に倒れて入院。2ヵ月近くの入院生活を経て、退院なさった直後に無理をお願いしたインタビュー。

「ほんとうは、お受けできる状態ではないのですが、樋口がOKしてしまったもので……」と苦笑なさるのにひたすら恐縮しつつ、お話をうかがう。

愛猫を膝の上に乗せながら、「家庭科でとりあげるこの意味」に沿って、テーマを再構成して、わかりやすく話してくださったことに感謝。



■プロフィール

1929年、岩手県盛岡市生まれ。東京大学文学部独文科卒業後、共同通信社に入社。退社後、'76年から創価大学教授（ジャーナリズム論）〈著書〉『新聞戦後史』『戦後ジャーナリズムの断面』（双柿社）『メディアの昭和史』（岩波ブックレット）他多数。
〈共著書〉『新聞学』（日本評論社）『日本のジャーナリズム』（有斐閣）など。

新聞は読まれているか

新井 郵政省が、毎年、「情報流通センサス」という調査をやっています。その指標のとりかたは研究者の間でも批判がないわけでないが、何年もにわたって郵政省が調査しているものだから、流れを見るには役に立ちます。

それによれば、私たちに伝えられる情報の99%は電気通信系によって伝えられる情報で、たとえば、テレビ、ラジオ、それから、いわゆるニューメディアといわれるものは、このなかにはいりません。

それから、0.5%が輸送系、つまり、人手によって運ばれることによって伝えられる情報。新聞、本、雑誌がそうですね。あとの0.5%が空間系で、空間に伝えられることによって運ばれるもの、これは映画などです。

この数字が正確かどうかわかりませんが、流れをみていくと、新しいメディアの手段は全部電気通信系ですから、これから五年、十年とたてばもう99%どころではなくなります。

NHKが5年おきにやっている国民生活時間調査をみると、いま出ているのは85年の、5年前の数字ですが、成人で、一日、新聞をまったく読まないで暮らしている人が52・8%、主婦を対象にすると、6割います。

日本新聞協会などの読者の調査を見ると、一番読まれているのがTVの番組欄、これが過半数。次に社会面、政治面の順で、国際面となると、あまり目を通しませんね。

国連の統計を見ると、新聞の購読率では、世界で香港が一番で、その次が日本。他の国に較べて、段違いの購読率なのですが、それはあくまで、「買われ」ているだけであって、「読まれ」てはいない。

同じNHKの調査では、日本人は平均一日3時間テレビを観て、一日全く観ないひとは、6%となっている。病人や旅行中で観られない人を駆り集めれば、すぐに、そのくらいの数字になります。

一方、新聞は、半分以上の人が読まないで暮らし、読んだとしても平均一人20分。つまり、朝刊10分、夕刊10分。

日本人の情報摂取のあり方これでいいのか、と思いますね。

——日本で新聞の購読者が多いというのは、自宅に配達されるシステムになっているせいもあるでしょうね。

新井 そうですね、つまり、買うことが習慣、あるいは見栄みたいなになっている。

——それと、日本では、欧米のように「高級紙」と「大衆紙」の区別がはっきりとせず、前者が後者を兼ねているせいで購読者数が多いのではありませんか？

新井 よくそう言われるのですが、いまは事情が少し違って

きて、スポーツ紙が欧米の大衆紙の役割を果たしているんですね。

スポーツ紙はいままで、総合レジャー紙だった。それが、数年前から社会部種を進んで載せるようになってきて、いまや国際ニュース、政治、経済も載せる。セックス記事で売るのはなく、スポーツ紙ひとつ買えば一般紙を買わなくてすむというのを売り物にするようになってきて、部数をとばしてきた。スポーツ紙が自宅に配達されれば、一般紙をとらなくてすむという状況になってきて、その意味では、欧米の事情に似てきましたね。

何を必要な情報と考えるか

——このままでは新聞の役割というのは、どんどん縮小していかざるをえないということですか？

新井 それは、つまり、読者がどのようなものを必要な情報と考えるか、ということだと思っただけですね。われわれ日本人は自分ではっきりした考えを持たないから、そのときそのときの情勢で変動しやすい。ある時期、写真週刊誌がブームになり、五誌合わせて五百万部に達するといわれた時代があったが、「ビートたけし事件」がおきて、そのありかたが問題にされるとバタバタ休刊、廃刊し、今や落ち目です。自分で

情報の選択についてはっきりとしたフィロソフィを持っていない、そこが非常に気になります。

同じ郵政省の調査によると、いま、日本では、いろいろな手段で情報が降り注いでいて、その総量は日本のGNPの年率をはるかに上回る率で増え続けている。高度情報化社会というのには、私たちに降り注ぐ情報の量が飛躍的に増えていく社会のことです。

この十年間をとってみると供給される情報量は2倍にふえているけど、情報を受けとる量はそんなに増やすことはできない。睡眠時間を減らすか、でなければ、電車に乗りながら聴くとか、食事をしながら観るとか、「ながら」でやるしかない。増やそうたって、受け取る量は増えにくいですから、この十年間で送られて来るのは2倍に増えているのに、受け取る量は1.2倍にしかなっていない。したがって、その格差がすごくなる。

二十年くらい前は伝えられる情報の20%は受け取っていたのが、いまはわずかに4%で、残りの96%は虚空に消える。折角のお金、時間を費やしながらか、実にくだらない情報を4%集めてしまうかもしれない、ということなんです。

消費的信息よりも生産的信息を

——その、情報を選ぶ力をどうやってつけていくかが大事なのでしょね。

新井 そうですね、そういうことを考えなければならぬ。たとえば、電化製品などについては消費者運動はさかんだが、こと、情報に関しては、消費者運動は起きない。どうして考えないのか不思議ですね。

——「FCT 市民のテレビの会」や、「ロマーシャルの中の男女役割を問い直す会」などの活動はありますね。
新井 そうですね、ああいうことが必要なんです。

情報は大きく分けて、消費的な情報と生産的情報とに分けられる。消費的な情報とは、受け取っているときだけ楽しい。たとえば、プロ野球の試合とか子どもの好きなアニメやお笑い番組なんかそうですね。

生産的な情報というのは、そのときすぐ役に立たないかも知れないが、何か行動しようとするとき役立つ情報のことです。同じ天気予報でも、出かける予定があるかないかで、消費的な情報にすぎなくなる。そのひとつが行動する意志を持っているかないかで違ってくる。

自分が何か行動する意志を持っている人にとっては、いろいろな情報が生産的になります。ただ、漫然として生きていくと、あらゆる情報が消費的な情報になっていってしまう。行動への意欲を持っていると情報は有意義になる。マス・メ

ディアの側に希望したいことは、タレントのゴシップなどの消費的な情報はやめて、生きていくに必要な情報を積極的に提供して欲しいということです。

犯罪報道は必要なのか

新井 そういう意味で言うと、犯罪報道は減らすべきですね。現にアメリカでは、単純な犯罪報道を取り上げなくなっている。ハイジャックなどの社会的背景のある事件以外はとりあげない。これは犯罪報道が人権侵害で裁判の種になり、莫大な支払いを命じられるから、それを避けたいという消極的な面もあるが、もっと積極的に、殺人事件や強盗事件をいちいち細かく報道していることにどういう社会的意味があるのか、という反省が起こってきたことにもよります。

——それは一流紙の場合ですか？

新井 アメリカの普通の新聞ですね。まあ、一流紙と言っている。大衆紙はあいかわらずですが。

——もちろん担当の記者も少ない？

新井 そういう、ニューヨークタイムスやワシントンポストでは、警察担当の記者はせいぜい一人いるかないかですね。日本では、東京、大阪などでは、社会部記者の三分の一以上でしょうね、犯罪報道にかかわっている人は。そういう

人たちの人数を減らして他のほうに回す。犯罪報道などは、消費的な情報にすぎないから、もっと生産的な情報のほうに力を入れて欲しい。

もちろん、受け手も問題です。朝のワイドショーも犯罪報道とスキャンダルで、相変わらずひどい。試しにやめたら、視聴率がた落ちしたという。でも一方で、そういうのをいっさい取り上げない「おはようジャーナル」などは非常に評判がいい。だからぼくは、マスコミは主婦をばかにしているんじゃないか、と思いますね。

——作っているのは男性ですしね。

情報を批判的に受け取る力を

——学校の授業で、マス・メディアを教材にしていくには、どんなやり方があるのでしょうか。

新井 これも、スウェーデンから始まったのですが、「NIE(教育の中に新聞を)」という運動があります。社会科教育をヴィヴィッドに教えていくためにとか、国語教育でスベリングを教えるためにとか、20年もたちますか、現場の教師の間から出て、それに、新聞界も協力してきました。日本新聞協会も三年ぐらい前に真似をして始めましたが、どうもうまくいかない。一つは欧米のように現場の先生から出てきた運動

ではなく、新聞界主導型で、まず、新聞を売りたいというのが先にある。

しかし一番のネックは、学習指導要領にがんじがらめになっている教育のあり方です。

——情報を批判的に受け取れる力をつけるにはどうしたらいいのでしょうか。

新井 まず、自分の専門を持つこと。その窓から社会を見る。たとえば、学校給食ならその専門家になる。それをきっかけに、いろいろなことに批判を持てるようになりますね。

二つ目は、大マスコミに頼らず、ミニコミ、機関誌のような多様なメディアに幅広く接して、少数意見、異論を知っていくことは必要ですね。

三つ目は、他の新聞を読み比べ、テレビの番組を見比べること。新聞を交換しあって読み、読み終わった後で話し合う、そういうサークルを続けてみてはどうでしょうか。

報道評議会をつくる

——報道評議会をつくるということを提唱されているのですが、どういふかたちのものでしょうか。

新井 これもスウェーデンからなんですけれど、スウェーデンは小さな国なので、全国的な機関一つですんでるが、日本

では、地方別にあったほうがいいでしょう。たとえば、犯罪報道が誤報であり訂正したいとき、その地域の全部の新聞社、放送局を回り訂正を要求するのは大変、弁護士を雇ってもお金もかかります。どこか一か所に駆け込めばできる、ということにしなければ。

都道府県ごとに評議会が設けられていて、過半数の都道府県で評議会が出来た上に全国レベルの評議会をつくる。いきなり全国レベルで、と思うと、法律的な裏付けが必要になりかねない。マスコミになるべく法律を介入させたくない。法の介入は権力の介入だから、さけたほうがいいのです。

——具体的にはどういうふうにするんでしょうか。

新井 本当はむずかしい。その県にあるすべてのマスコミが参加しないと実現しない。放送、新聞などはそうでもないが、出版界などで反対の声が強い。マスコミは、報道内容や編集方針を、自分のところ以外から批判されるのを好まない。防ごうとします。これは、16世紀くらいからの「言論の自由」のできてきた結果ではあるんですね。自分の言論について誰からも口をさしはさませない、という歴史だったので。

遅れている情報公開

——日本では、情報公開が遅れていて、記者クラブなどでの

発表を右から左へと伝える「発表ジャーナリズム」がはびこるのは、そのせいもあると聞いています。

新井 ええ、情報公開は非常に遅れています。行政改革のとき、最初その中に情報公開があったのに、中曽根さんがやると、結局、民間活力の導入というだけで、情報公開は国レベルでは進まなかった。地方自治体では、行政公開条例をあれこちでつくったが、それも文書の公開だけ。委員会、審議会の公開は含まれていない。

アメリカでは、高級官僚や、特別公務員の財産、収入、退職後の就職など、汚職につながりそうなものを洗いざらい、毎年毎年報告しなければならぬ、そういうものを全部含めて情報公開といいます。日本では情報公開というと文書の公開しかない。

もう、市民運動しか手が無いですね。アメリカでは情報公開が急速に進んだのは、40年代の後半からで、運動の中心となったのはジャーナリストです。市民運動がまずあって、州ごとにいろいろな動きがあり、州の過半数で法律が制定され、連邦法がつくられ、というかたちになっている。私が報道評議会をまず地方でつくり、過半数になったら全国レベルでというのは、そういうことがあって言っているのです。

マス・メディアの

構造



—おしゃべりの世界が

消えた?—

●中野 収

1

ウィークデイの午前に、民放各局は同一時間帯にワイドショーなる番組を並べている。中東問題からタレントの私事、そして犯罪事件や奇妙な社会的事件まで、およそ人々の日常生活の話の話題になりうるものならすべて取り上げてしまう。

視聴された方なら経験があるはずと思うが、「なんでこんなこと、テレビが取り上げなきゃいけないのよ」と憤慨しな

に、てきめんに視聴率が下落する。そういうことがしょっちゅう起こる。

他方、その視聴率を支えているはずの視聴者自身がまた、指摘したごとく、同様にバカバカしいと思っている。双方がバカバカしいと思っているのに、ワイドショーは、タレントのゴシップ・スキャンダルの放映を続けて倦まない。「なんかヘンだよ」とみんなが思っている。

ところが、ここに、ぼくらの日常の会話の世界というのがある。家族や近所の親しい人々と目的もなく話す場面、友人

がら、結構面白がって最後までつき合ってしまう、最後には「またみちゃった、時間のムダだったかも」といくらか不愉快な気分になる——ところでぼくは、これは、テレビワイドショー、いやテレビ番組の多くについての反応として、ごく自然だと思っている……。

タレント同士で結婚していて一方の不倫が発覚し、他方がレポーターの前で涙ながらに心境を語る。これがそのまま番組になる。番組制作のスタッフ連中は、例外なくそのバカバカしさがいい加減ウンザリしている。しかし、そのネタを省略したばかり

と仕事や生活を離れてのおしゃべり(喫茶店や酒場で)、会社の昼食時の同僚とのムダ話、通勤・通学時の友達とのおしゃべり等々。そのとき、ぼくらはどんな話題で話しているのか。半分以上が他人の噂話のはずである。

噂など誰も重要とは思っていない。まともに考えれば、すべてクダラナイ。そしていくばくかうしろめたい。しかし、面白いからやっていて、これさえやっていれば、おしゃべりはとめどもなく続く。と同時に、自分が話題になったときのことを考え自制しようと心に決めても、何時のまにかまたやっている——という日常の会話(おしゃべり)の世界が確実に存在する。

茶の間や居間に入り込み、次には個室に入り込んでしまったテレビ、誰かに強制されたからではなくぼくらの意思で招き入れたテレビ、日常化し生活の中に入り込んでしまったテレビ。このテレビが個人的・生活的・日常的なコミュニケーションの世界を形作るのは、当然の帰結であったと、ぼくは考える。このテレビがらみのコミュニケーションの世界が、あのおしゃべりの世界と酷似してしまうのも、あまりに日常的で生活的であるが故に、必然であった。

テレビがぼくらの生活の中の対話を奪ってしまった、とよくいわれる。しかし、ぼくらは、テレビが日常化・生活化し始めた前後、本当にまともに対話していただろうか。

ぼくの憶測なのだけれど、あの頃、ぼくらは、たとえば家族との対話や隣り近所の人々との対話やおしゃべりを嫌い回避し始めていたし、そういう習慣を失いつつあった。そこへ、実にタイミングよくテレビが登場した。気のおけない、気づまりでない、恰好の話し相手として。

もちろん、おしゃべりの世界を全部やめたわけではないけれど、テレビを日常の話相手とする習慣の方が確実に定着していた。中には、話し相手を失った老人、両親の不在がちな子どもたち、親にテレビの前に押しやられた子どもたち、もいたのだけれど。

その話し相手になったテレビが、例のおしゃべりの話題を取り上げて、これまた当然だろう。人権意識と個人主義の着実な定着(ブライバシーの尊重)で、人々が噂話のネタを失い、噂話の習慣を放棄し始めたという条件もある。そこで新たに対象となったのが、私事を商品化しうる、商品化を覚悟し同意したタレントだった、というのも理屈に合っているとすべきだろう。タレントとはぼくらにとって新しい隣人たちであり、そのゴシップ・スキャンダルを楽しむ「噂の人」なのである。

テレビカメラは、人々のおしゃべりの論理、いや「権利」を大義名分として、私事や事件や現場に入り込もうとする。背負っている受け手の「権利」が、対象の権利を傍に押しや

り、しばしば否定する。

これが、今、ぼくらが眼前にしているテレビジャーナリズムの実態である。「こんなものジャーナリズムといえるか」という根本的な疑問があるのだが。

2

ジャーナリズムは、新聞という形で、近代社会の形成期に出現する。近代民主主義の形成期（市民革命期）に言論戦の有力な道具であった政治的パンフレットが、新聞の源流のひとつである。

市場経済とは、生産者は自由、商品を生産する。消費者は自発的な意思で自由、商品を購入する。両者の自由、端的に言えば無政府性を媒介・調整するが市場——というメカニズムを基本にしている。

実際にはメカニズムどおりにいかないのだけれど、市場のフィードバック機能の働きには、常にタイムラグがあるから、市場経済の動きに波動が生まれる。その振幅が大きすぎると経済システムがこわれてしまう。そこで各種の情報のデータに依って生産・消費・市場の運動をコントロールせざるをえない。その情報活動の有力なひとつに広告がある。

広告は、第一に商品の所在を告知する（現代の広告には、

さらに「高次」の機能が付与されているが）。市場経済の買手は不特定多数であることがのぞましいから、広告は、不特定多数Ⅱ大衆を相手にするという宿命を負っている。そこで、十六世紀頃、商品の所在を告知する印刷物が発行されるようになった。これが新聞のもうひとつの源である。

十七世紀から十八世紀にかけて、都市社会を作っていたパリとロンドンには、自由を求めてさまざまな人が集まっていた。彼らは、居酒屋やコーヒーハウスでのおしゃべりが大変に好きだった。そこへ、貴族社会やサロンの中のゴシップ・スキャンダル・あることないことがもれてきて、人々の興味をいやが上にもかきたてた。そのゴシップ・スキャンダルを印刷して売る——とは誰しも考えることらしい。サロンを情報源にした刊行物、コーヒーハウスのゴシップ好きのための印刷物（識字率が低く、字を読める者はごく限られていた）が登場する。これが三つめ。

いわゆる近代型新聞は、この政治的情報、経済的情報、文的情報の三つを含むものとして出現する。

十八世紀から十九世紀にかけての政治・経済的激動の中で、新聞は重要な役割を負うようになる。力を持ったのである。その力を有効にするためには、スキャンダルにうつつをぬかしていたのではマズイ、となって記事内容が政治・経済中心に傾いて行く。その典型が『ロンドンタイムズ』であ

り、クオリティペーパー（高級紙）といわれ、近代ジャーナリズムの象徴的存在といわれている。

新聞は、真面目に社会や政治や経済のことを考えるようになった。つまり、ゴシップ・スキャンダル、面白おかしい話、市井の出来事、ヒューマンインタレストに訴える話題が、新聞から消えてしまった。三つの源流をもつのが近代ジャーナリズムであるとするれば、これは、ジャーナリズムの主要な役割のひとつの放棄を意味している。かくして、ごく自然に、大衆・庶民の大好きな面白おかしい話題を中心に取扱う、もうひとつの新聞が登場する。十九世紀半ば頃のことである。

この新聞は、政治や経済の堅い記事も掲載したけれど、中心は市井の出来事、そして娯楽記事や広告であり、当然のことながら、欧米で形成されつつあった大衆という社会層に、一挙に浸透し、高級紙時代には考えられなかった発行部数を実現する。名称は、ペニーペーパー、イエロージャーナリズムであるが、いわゆるマスペーパー（大衆紙）である。

大衆新聞は、十九世紀の末には、発行部数が百万部を超える。高級紙の読者層のことをパブリック（公衆）ということがある。社会的エリートという意味である。これに対して、大衆新聞の読者は大衆、つまりマスである。発行部数の大量化、読者層としての大衆が、この時に実現し現出する。したがって、十九世紀のこの時点をもって、マスコミュニケーション

の始まりとする、有力な、そしておそらくは正しい学説がある。

今、ぼくらの周辺にある新聞、特にぼくらの社会に固有の大新聞は、この大衆新聞の発展したものである。ジャーナリズムの機能を、「毎日刊行、政治・経済的な堅い記事、政治的意見の積極的な主張、世論の形成・誘導、そして反映」と定義すると、大衆新聞は、定義からいくらか、いや相当にずれている。そこで、大衆新聞はもはやジャーナリズムではなく、マスコミの機関・メディアとする考え方もある。

前項でふれたテレビ、中でもワイドショーは、大衆新聞の延長線上に位置づけられる。テレビ全体を鳥瞰すると、明らかにジャーナリズムの面もある。他方で純粹にマスコミのメディア（事実を伝えるだけ）という面もあり、日常的・生活のおしゃべりの場という面もある。テレビがこの三つの働きをしていることは、事実である。しかし、その支配的なところはどこにあるか、といわれれば、やはりおしゃべりの世界とするのが常識であろう。

とにかく、テレビ番組の有力なジャンルとしてワイドショーがあり、確実に現実的な機能を果たしていることには、近代新聞の成立からマスコミにいたる歴史的経緯がある。

ワイドショーは、誰かさんの思い付きで突如出現し、人々の品のよくない好奇心や放送局の商業主義のせいで肥大して

しまったわけではないのである。

3

一昔前、親たちは、昔嘶やおとぎ嘶を子どもに語り、絵本や児童書を与えた。お嘶を聞く、絵本を読む子どもの行為には、常に親の人格・人となりがかかわっていた。

ところが、今、親たちは子どもをテレビにあずけっぱなし、テレビと子どもとの間に入り媒介者としての役割を果たす——なんてことはしていない。そして困っていると、テレビ(番組・内容)の悪口をいってすまそうとする。

昔嘶には、よくいえばファンタジックなのだろうが、残酷で理不尽で非合理的なものが多い。けれども、子どもの心と精神の形成に寄与しえたのは、親の人格が介在していたからである。

テレビ視聴が本当に子どもの精神形成に影響を与えているというのなら、何故、介在、介入、干渉しようとならないのか。悪口をいいながら介在しないのは、自己矛盾もいいたこ、である。テレビ批判の多くが、この親の身勝手さを共有している。ダメならスイッチを入れなければいい。四六時中オンになっているのは、ダメではないからだろう……。

ジャーナリズムやマスコミの欠陥、不備、不正などいくら

でもあげつらうことができる。あげつらうためには、それらをどう位置づけるか、手段・道具であるはずのそれらに対してどう主体的・積極的に対処するか、ぐらいはおさえておかねばならない。こっちが主体的に利用する方法を身につけ、たとえ子どもとテレビの間で広い意味の教育者の役割を演じることができれば、欠陥・不備の多くは解消するはずである。テレビだって、マスコミだって、所詮は、ぼくらが生活を享受するための道具・手段であり、かつまたは、そのための場のひとつにすぎないのである。

重ねていうが、あのクダラナイとされるワイドショーの存在には、確固とした歴史的背景、現実的根拠がある。クダラナイという前に、たとえぼくらの日常のおしゃべりの世界の実態ぐらいは知っておくべきだろう。

問題は、「社会の公器」であるテレビで、スキャンダルにあるのではなく、ぼくらがいわゆるおしゃべりの世界を失おうとしていること、あるいは文明の現在が、ある人々からおしゃべりを奪おうとしていること、そこにあるはずだ。

(なかの・おさむ・法政大学)

マス・メディアは
何処へ

プライバシーも

写ルンです

—メディアとくらしの

共生のために—

●津田 正夫



は離れてゆく。だから、マス・メディアで働くとかマス・メディア相手に行動することさえ、相当のいかがわしさを逃れられないのに、マス・メディアを「論ずる」ということは二重にいかがわしいことだと思える。マス・メディアに対する働きかけは数えるほどしかないのに、論じたものは万巻を数える。編集部の意図がよく理解できないままに、テレビ制作の現場の一端で感じていることを断片的に記してみる。

打算的で卑怯な夫イアソンの心変りを嘆いて、夫との間にできた二人の子どもをわが手で殺して報復し、炎の車を駆って虚空へ消えさるギリシャ悲劇の女王「メディア」は、人間の感情や本質的な属性の一部を、極めて直接的に体現した存在だった。その本能的で直接的な表現は、犯罪かどうかを考える前に、私たちの感性を揺さぶる。他方、現代社会に君臨するかのように見える大量伝達のための「メディア」は、その間接性・媒介性によって、最初からいかがわしいものであり、発達・肥大すればするほど、私たちの実生活や感性から

番組の企画を決める時に、大体は提案会議というものがある。私が若かった頃、Hさんという勘の鋭い「鬼デスク」のような人がいた。私が何かの問題について苦労してリサーチし、ようやく書いた提案でも「それがどうかしたかい? どこがオモシロイの?」「俺たちの生活にちっとは関係あんの?」と容赦なく突っこまれ、たちまちボツとなる。「ホントの所、どういうコトになってんだ? 反対側は何て言ってるの? どこに問題があるの? これからどうなるの? それで世の中なんとかなるの?」と矢継ぎ早やに飛んでくる質問に汗をふきふき答えなければならぬ。誰か「助け舟」を出してくれたり、活発な反

対論が出たりして大きな議論になればしめたものだ。だんだん活性的なテーマになって、いくつも注文がつけられても正式取材の許可が出る。Hさんはそういうある種の選球眼に秀れた人であり、当時の先輩たちも概ねそうだった。

二言目には必ず言われる「俺たちの生活に関係あるの？ 金持ちや幸せなヤツの遊びじゃないの？」という少々乱暴な言い方でも、何となく「庶民の生活感・公平感」みたいな雰囲気を表していたし、「ウラはどうなってるの？ 反対側の言い分は？」という言い方にも、「事実」への疑いと接近の粘り強い努力といったふうな姿勢を求められたように思う。私が今も後輩に、口ぐせとして「どこがおモシロイわけ？」と不遜にきくのも、取材者や問題に関わろうとする者が、今、何故、どういう姿勢でそのテーマに近づくのか、の問題意識をはっきりさせ、本来「媒介物」でしかないメディアの限定的な役割を有効に働かせようという習慣的作業なのだろう。

かつては、番組作りの「基準」のようなものがそのように働いていた。私たちがムカシ作っていたローカル番組というのは、総じて「身の丈サイズ」であり、『きょうのリポート』だとか『テレビリポート』だとか名乗って取材に行けば、誰でもタイトルくらいは知っていてくれて、話は通じたのだ。

いつの頃からか、テレビやマス・メディアが「身の丈サイズ」でなくなり、くらしから離れてへいかがわしさそのもの

のようになってしまった。橋本治氏の表現を借りれば、世のメディアには「売れるマイナー、売れないメジャー、相変らずのマイナー、死にぞこないのメジャー」の四つしかないのだと思うだが、「売れる」というのを「面白い」とか「リアリティがある、インパクトがある」というふうに読みかえると、「売れないメジャー」であるマス・メディアからは、リアリティというものが失われていこうとしているのだ。

詳述する余裕はないが、マス・メディアがそれぞれの生き残りをかけて激しく変貌していったのは、八〇年代に入ってからだ。企業としての利益率が下降線をたどる中で、新しいテレビ局の開局が続ぎ、CATVや文字放送・衛星放送などニューメディアが登場し、VTRの簡易化・デジタル化・映像伝送の飛躍的技術革新が続いた。激しい生存競争の中で、組織や設備の合理化が進められ、ものの考え方や処理の仕方が、パターンので扱いやすいヘシステムになっていった。

情報の内容は「フロー」だと考えられるようになり、また同じ情報を映像にも活字にも展示品にもレコードにもしてゆくことで幾倍かの利益をあげられる（メディアミックス）の手法が開発されていった。総じてこの十年、ハードがソフトを牽引する形で、マス・メディアは生き残りをかけてきた。センセーショナルで視聴率がとれ、視聴者読者との相乗効果のある「劇場的報道」や、大規模で機動的な報道システム

ムの効果が発揮されるニュースが求められた。それらを満たした『歴史的な報道』が、一九八四年の「ロス疑惑事件報道」と「グリコ森永事件報道」だった。この両事件報道を通じてマス・メディアは、それまで細々と維持してきた「事実に基づく客観報道」、争点のある事柄に対しての「公平な報道」などの倫理綱領を捨ててしまった（『総合ジャーナリズム研究』八五年夏季号「マス・メディアはどこへゆく」参照）。

その後、「やらせリンチ事件」（テレビ朝日、一九八五年）や「豊田商会長刺殺事件」（一九八五年）、「日航機墜落事故」（一九八五年）などの興味本位の「報道」で世論の強い批判をあびたものの、ソウルオリンピック（一九八八年）の前年「大韓航空機事件」に始まる一連のソウルシフト報道、百十一日間の長きにわたった「天皇病状・代替り報道」（一九八八～九年）、二週間もマス・メディアを独占し続けた「連続幼女誘拐殺人事件報道」（一九八九年）など、事件報道は以前より一層集中的で大規模に、イベント的に行なわれるようになった。そしてこれらのイベントを支えたのは、メディアや市民の自前の倫理ではなくて、世界秩序のための「アメリカの正義」であったり、企業社会全体の調整をはかる大手広告代理店がリードする「自衛」であったり、「オトコ社会と警察の正義」であったりしたのは、記憶に新しいところである。

それでは「生活の論理」〈市民的な倫理〉といったものは無力になってしまったのだろうか？

上述のように報道のイベント化が進行する中で、「天安門事件」をめぐる市民情報の力や、一連の東欧民主化の過程で、市民が情報を駆使した例があったし、国内でもリクルート事件解明に働いた世論の力、参院選挙など、一連の選挙で、マス・メディアを計算した市民の知恵などに目をみはるものがあったのも事実だ。

かつて佐藤栄作元首相が、引退間際の記者会見で「新聞は嘘を言うからキライだ。テレビはどこだ、NHKはどこだ」と放言したのはあまりにも有名だし、田中角栄元首相も、ロッキード裁判一審判決が出た直後、総選挙を控えて「テレビは三日、新聞は一週間！」と周囲を叱咤し、それだけがまんすれば世間は収まるとなかなかリアルな「名言」を吐いた（一九七八年）。事実、マス・メディアはそのように収束しかかったのだが、選挙向け世論調査から、ロッキード事件批判が非常に根強いことがわかって、新聞もテレビも態勢をたて直してロッキード事件報道を続けて、結局、年末の総選挙で自民党は大敗してしまった。リクルート事件報道またしかり。

このことは、権力とマス・メディアの関係を表しているようにうでいて、実は権力と市民の関係を表しているのではないだろうか。メディアは文字通り媒介にすぎない。いつもメディア

アはいいかげんでうさんくさく、世論のおもむく方へ身を寄せ、世論がなければ力のある方へ向きがちである。しかし「信念を持ったマス・メディア」というものを想像すると不気味なものだし、マス・メディアの唯一の取柄は、そのいかげんさにあるといえなくもない。そのマス・メディアが近頃面白くなってきたのは、身の丈サイズを超えた大がかりなイベント的正義、メディアの正義を振り回しはじめたからかもしれない。

頻発する人権侵害問題も含め、ともかくマス・メディアと市民の関係がこのままでは離れるばかりだ、民主主義にふさわしくない、という声は多い。ただ、様々な社会関係がかつてより国際的に広がり、それぞれの固有の在り様を尊重し合う時代に、ムカシの正義の倫理綱領を持ち出すだけでは解決しない。

私はテレビの一端で働いていることから、他のメディアのことにについてはうといが、とりあえずテレビ局、テレビや映像に関わる人、関心のある人は、こういうことも考えてみたり、現行の倫理綱領・番組基準を再検討してはどうかと思う。

一つは、〈テレビに対する民意〉の調査と公表のやり方の改革である。視聴者・国民の意向調査は、現在、二つの会社が大都市の少数のサンプルで行なう視聴率調査で行なわれて

いるにすぎない。この毎日の数字がスポンサーや代理店を動かす、NHKも含めたテレビ局の方針をほぼ決めてゆく。しかし、「テレビをつけていること」と「番組を支持・共感していること」は全く異質のことだ。官僚制国家・軍事国家の現実をみれば明らかだ。民主主義の初歩的なあり方からも、健全な市場原理の上からも、もっと有効適切な「支持率調査・公表制度」が市民主導で考えられてもいいと思う。メディアに対してだけでなく臓器移植や税制を対象にしてもいいのだが、NTTなど情報会社と組めば充分可能だ。

二つめは、〈メディア教育〉の必要性である。メディアの技術・システムは加速度的に発達していて、今や誰にも全体をコントロールすることはできない。この高度なテクニクを使って、意図的にある特定の情報・考え方を浸透させて、商品売ったり政治的な目的を達しようとする人たちは多い。ある飲料水会社が、一連の映像の中に普通の目にみえないスピードでくり返し同じ映像を挿入することで、見ている人には自覚させない渴望感を与えていった例はあまりに有名である。また「やらせリベンジ事件」「ギミアぶれいく事件」はいうまでもなく、「豊田商事会長刺殺事件報道」「連続幼女誘拐事件報道」「コンクリート詰め高校生殺人事件報道」など、報道現場で働く人の無自覚や「善意」、未必の故意等々によって、甚だしい人権侵害が多発しているが、現在のテレ

ビ制作現場は素人(同然)が少なくないし、経験をつんだ人でも新しい技術の効能を知らない。プロだけではなく、普通の市民が「写ルンです」といわれてカメラを持つと、禁止された場所へ入ったり、素手ではやらない・やれない大胆な行動をする。「人権侵害雑誌」とでもいへば盗み撮り投稿誌が何種も発行され、伝言電話で売春が成立する。新しい道具や技術・間接性・システム性などを通過すると、私たちの普通の感覚がマヒし、他人を侵すことに無自覚になる。メディアを職業にする人には勿論、子どもにも普通の人にも、メディアや関連技術の基礎的な仕組み、危険性や副作用をきっちりと教えるべきだし、すべてのカメラのポデーには「有害作用あり、使いすぎに注意しましょう」と書かれるべきだろう。

三つめには、医者と患者・消費者の関係として近年強調される「インフォームド・コンセント」が、マス・メディアと市民の間に、倫理としても、制度・組織としても成立すべきではないか、ということだ。日本語で「説明と同意」というふうに訳されるが、取材と放送・出版に対して、メディア側はきちんとした説明と同意とりつけを義務づけられるべきだし、説明できないような取材は原則としてするべきではない。これを保障するために、報道に対する異議申し立てや苦情処理の機関も当然必要であると思う。

そして何よりも、すべての異なった人の共生のためには、メディアは媒介性・間接性の代名詞としてではなく、王女メディアのように、人間関係の直接性へ向けて再編されるべきではないだろうか。まず、あなたがテレビ局や新聞社へ電話したり話し合ってみると、多くの風景が変わると思う。

この断章は、マス・メディアの中でも、国際関係・政治・経済・社会・くらしといった様々な分野の中の、一部の事例について、しかもテレビ番組に携った狭い経験で書いているにすぎない。あまりに断片的なので、もう少し視野を広げて考えないと、議論に現実性がなくなると思われるので、興味のある方に、二、三の本をおすすめしたい。

テレビというもののナイーブで古典的なものとして、『お前はただの現在にすぎない』(今野勉他・田畑書店)、『テレビジャーナリズムの世界』(共著 日本放送出版協会)、人権問題とメディアの入門書として『犯罪報道の犯罪』(浅野健一 学陽書房)、『マスコミと人権』(清水英夫編 三省堂)、メディアにおける技術進歩の現況・功罪について『マス・メディア産業の転換』(石坂悦男編 有斐閣)、『テレビ・危険なメディア』(ジュリー・マンダー 時事通信社)、私のも恥ずかしながら『社会病理学を学ぶ人のために』(世界思想社)。

(つだ・まさお NHKチーフディレクター)

市民として

テレビメディアに

どう関わるか

● 竹内 希衣子



先日、「テレビ東京」と大きな赤い字の入った書籍小包が

送られてきた。あけてみると、「C・W・ニコルのおいしい
博物誌」という、テレビ東京で放映された番組を活字化した
本で、「先日の番組への御支援に対して感謝の気持ち」とも
に」と、Mさんのメッセージが添えられていた。

八月一日にテレビ東京で放映した「C・W・ニコル白夜の
北極探険八〇〇キロ」は二時間枠の夏休みスペシャル番組。

ナチュラリストのC・W・ニコルと、カナヌイストの野田
知佑が犬ぞりに乗って一カ月近く、カナダの狩猟民族イヌイ

て、よい番組であったことを伝えようとした。

あまりにも目に余る番組に出会うと葉書を一枚書くという
行動は、これまでも何度かしたことがあるが、そのときはい
つも匿名だった。評価するのだからと、なにげなく住所氏名
を書いて投函したら、数日してMさんから、葉書がうれしか
ったので、と返事をいただいで、ずいぶん珍しいことがある
ものだとびっくりしてしまった。テレビ局というところは、
何を言っても行こうがほとんどの梨のつぶて、とりつくしまのな
い処、と長年にわたる経験から思いこんでいたからだ。そし

ットと生活をともにしたドキュメントであ
る。うるさいナレーションや音楽を入れ
ず、風の音や氷の割れる音が聞こえてくる
ような静かさの中で、時折二人のつぶやき
ともとれる言葉が聞こえてくる、そんな作
り方だった。お祭り騒ぎの北極旅行や、感
傷的な自然保護屋さんたちの声高な番組が
多い中で、この番組は、自然の中で生きる
人間のありようを静かにありのままにとら
えていて、珍しく感動してしまった。番組
のあとのテロップで、プロデューサーが女
性であることを知って更にうれしくなり、
私は葉書を一枚、その女性Mさん宛に書い

て先日の書籍の到来。小さなことかもしれないが、やわらかい心をもった人がテレビ局にもいることがわかって、単純な私は早速考え方を少し改めた。

テレビ屋さんも人の子なのだ。北風よりは太陽の立場で発言する方が、より確実にマントをぬがせることができるのかもしれない、と。そして、発言するからには、記名という責任をとることも大切なのかもしれない、と。世の中、そう単純ではないと知りつつ、氷山の一角に手がかりを見つけた、という気がしている。

市民の立場、視聴者の立場からテレビに発言していく、という活動（FCT子どものテレビの会・市民のテレビの会）をはじめ十二年めになる。テレビ番組の内容を分析して報告書にまとめ、制作に関わる人たちと話しあいの場をもち、テレビ局へ要請書を提出し、社会教育の場などで、意図的にテレビを見ることをすすめる、といったことを、ともかくも続けてきた。

「太陽の立場」に少し身を寄せて考えてみると、今まで私たちがしてきたことは、やはり「北風の」であったと思える。いま市民の名のもとに活動している多くの意志表示も、傾向としては、圧力団体に近い、北風の発想なのではないか。嵐をまきおこして目的をとげるといふやり方が効果を奏することも

確かにある。問題CMをやヤリ玉にあげて引っこめさせたり、地下鉄の広告をとり去げさせたりするゲリラ的な戦法も、一時的には、成果をあげた、という達成感を得ることがができる。

でも、多くは、嵐が去るとまたぞろ同じようなものが登場して、モグラ叩きは際限もなく続けなくてはならない。そこから市民意識がゆたかに育つ、とも思えない。市民活動が、何らかの要求をもって目的達成のために展開されるという側面ではかなり機能しがちな現状からは、真の意味の市民意識が育ちにくいのではないかと危惧するようになった。

テレビについて、よりよいテレビを送り手に望むのなら、同時に、よりよい受け手になることにもっと真剣にとり組まなくてはならない。太陽をめざすならば、自らが発光することができなくては、である。

たれ流しのテレビを何の期待もなくぼんやり眺め、まあこんなものよと達観してしまふ受け手には、「どうせこれくらいで丁度いい」という、送り手のニヒルな態度しか引き出せない。そして、行きつく先は、と考えれば、不毛の荒野が想定されるばかりだ。（既にしてその兆候は見えている）

国民の「民度」を知る最もわかりやすい物指し、とも言われるテレビについて、あらためて眺めてみると、この国のテレビ、我々のテレビは相当恥ずかしい。商業主義に汚染され、一人の女性の結婚に常軌を逸し、女性を差別的に扱う番組、

低次元の笑いが横行する番組が高視聴率をあげ、ひとにぎりのテレビ芸能人、テレビ文化人が各局を席捲してまわっている。送り手とか受け手といった立場をこえて、ともに市民として、両サイドから、よりよいテレビを持ちたいと願う行動することが大切なのではないかという前提をおいて、まず受け手として、何を始めなければならぬのか、考えてみた。

上等な受け手になるために

①しっかりと見る——友人知人たちと見た番組について話あってみるとよくわかる。番組名、設定、出演者その他、実に不確かな見方しかしていなくて、「あれ」「何だっけ」といった言葉がやたらに行き交う。何人もの記憶をよせ集めてやっと、何を見たかが浮かんでくる有様なのだ。それが感想文を書くとか、論じるという下心があつて見た時には、メモをとったりしながらきちんと見る。同じ時間をテレビの前で過ごすのなら、意図的にしっかりと見ることが、がんばって作った人たちへの礼儀でもあろう。いい加減に作ったものをいい加減に見る、テレビの娯楽性を全面否定するわけではないが、少なくともどちらの見方をするのか、自己確認するクセをつけておきたい。

②反応する——テレビの伝える情報に、私たちはナイーブで

あり過ぎる。テレビが言ったから、テレビでやっていたからと、テレビに出た人を信用したり、出た店をもてはやしたりして、テレビを付加価値にしたものを呑みこんでしまいがちだ。テレビが伝える情報に対して、斜にかまえる、自分はどう思うのか考えてみる、変だと思ったらすぐ周りの人にどう受けとめたか聞いてみる、議論してみる、といった対応する姿勢をもつこと。例えば、ドラマの中で日航のマークを見せつけて飛行機が飛び立ったら、多くの視聴者は、即、これは協力↓タイアップ、と連想が働くくらい知識はもっている。現実には想像以上に多くの「事情」があることを察知できるように、アンテナをしっかりと張りめぐらして、「目くじらをとって見る」ことも必要だと思う。

③批判する——適正な批判力が作動しないマス・メディアは危険この上もない。ラジカルな意見をもつジャーナリストが減り、政府の審議会の委員になったり、政治家に横すべりを目ざす人が増えたり、事実として、マス・メディアの批判力はかなり低下している。企業に身を置く男たちは、ひたすら保身をはかって口を閉ざしている。いま自由にもが言える立場にあるのは、組織されていない女性を中心とした「とりこまれなかった市民」だけではないか。その市民が、チェック能力を発揮しないとしたら、この国のマス・メディア状況はほとんど救いようがないことになりそうだ。メディアのありよ

うに対して建設的な批判を出来る市民は、日本の社会のあるべき状況についても自主的な展望と判断力をもつことができらるだろう。八十一億円の予算でも言われている今秋の皇室行事について、無批判にイベント志向で総ジャーナリズム化しようとするテレビに、しっかりと意志表示することは、社会に対する、政治に対する表明でもあり得る。そういうことができる人を、市民と言ひ、市民意識をもった人、と認めたい。

こうした市民に育つために、メディアの仕組みを知り、テレビを批判的に視聴する能力を開発する「メディア教育」の普及を、この四、五年のテーマとして、活動しはじめている。例えば大田区では、社会教育講座の中に息の長い企画が盛りこまれて、テレビについて意欲的に学んでいるグループが育ちつつある。いくつかの点が、いくつか線になり、波になって、受け身一方ではないテレビへの関心が持たれるようになっていくだろう。

④表現する——何が見たいか、何が見たくないか、どう関わりたいのか、意志表示をすることも大切だ。テレビの送り手が用意する参加の場、例えば「街の声」や、スタジオの「壁の花」「拍手係」「笑いものにされ役」「電話参加、といったところにとりこまれて、ぶりっこの意見をのべる、という参加のしかたは、断固拒否、という対応だっであり得るだろう。マイクを向けられると、ついニヤニヤしてお望みのコメント

をひとことの役は、テレビ局御用達文化人にまかせておこう。私たち市民は、辛口の御意見番として、テレビメディアに参加したい。自分の作品をテレビドラマ化するにあたって、まったく意味の違う結末にされてしまい、妥協せずに法廷にもちこんで闘っている人がいる。昨年、FCTでは、NHKと民放各局に、テレビの女性の描き方についてもっと配慮を、そして制作の場にもっと女性の登用を、という要請書を提出している。

放送の現場に働く女性たちの中でも、横に手をつないだ会が発足し、活動をはじめている。声をあげ続けること、仲間を増やすこと、自らの責任を悟った上で要求すること、そして同じ市民としての意識を企業の論理に押し潰されてしまわないように、送り手を励ますこと……受け手としての私たちがいまできること、いましてはいけないことだ。活字メディアと違ってテレビは、国民の電波を使っているのだから、「文句があるなら見なければよい」は送り手の禁句であり、「テレビは見ない」は受け手の無責任、と認識したい。「テレビを見るヒマがない」と忙しいことを吹聴する人、「テレビはくだらない」と見ていないフリをするインテリさんたちにぜひ望みたい。「市民として、もっとテレビを見て、きちんとテレビに発言する責任はあなたにもありますよ」と。

たけうち・きえこ（フリーランス・ライター）

人間の歩む道

— 径書房の十年の

仕事の中から —

● 原田 奈翁雄



人間の歩む道は、果てしない広がりを持っていると思えます。左右にも、上下にも、青空と地平線を望みながら、たった二本の足をふみしめて一步一步を歩むのは、素敵なことだと思いませんか。そのような所を、そのように歩みたいですね。自由と希望が、私たちの足どりを、まるで雲の上を行くような軽さにくれます。丈低い草が、小さな白い花を咲かせています。足をとめて腰をかがめ、花びら、小さな雌しべや雄しべに目をこらせば、何という美しさでしょう。この可憐な生きものは、小さいなりに、この地上に生命をいと

む機能を十全に備えて、身いっぱいのみずからを開かせているのです。思わず唇を寄せます。さわやかないのちの精が、私たちの体に、そうっと流れこんでくるようではありませんか。

私たちは自由を求めます。生きてあることを喜び、共にあるいのちたちと深く愛を交わしたいと願います。しかし私たちは、この世に生まれ出でたらそれほどの時も経ずに知らなければなりません。私たちは否応なしに狭く険しい道を辿り、苦しい葛藤を重ね、にがい水も飲まねばならぬことを。

子どもたちのことを思います。赤ちゃん
の瞳は、深い深い泉のように澄んで、のぞき込む私たちは、その中に吸い込まれるような気になります。だがその瞳は、残念ながら程なく光を失い、猜疑と排他のにこりにおおわれていきます。大人たちが彼らのために用意したはずの場所です。私は学校のことを言っているのです。

子どもたちはそこで、多くの場合、愛や心のぬくもりよりは、差別と排除の手だてを学ばされていきます。点とり競争、劣位から優位へとよじ登ること。その道に遅れたり外れたりしようものなら、教師や親たちから尻を叩かれ、級友た

ちから嘲笑われ、無視されていきます。それどころか、教師たちになぐられ、蹴られ、砂に埋められ、鉄の門扉で頭をくだかれて殺されていきます。

みんなみんな、いまをここに生きている私たち大人が選んでつくり出している、これが光景なのです。私たちの前に広がるのは、決して青い空でも、地平線につづくふくよかな草でもみどりの木々でもないのだと、胸のつぶれる思いで確認しないわけにはいきません。

径書房を創めて十年が過ぎました。創業のあいさつに私は書きました。

「細い道です。……昔はけもの道だったかも知れません。けものたち、そして人間たちの足が、永い時をかけて踏み分け、踏みかためた道、それが径（こみち）です。……私たちがもまたその道を歩みつぎます。歩んで、先人、同時代の人びとの、すぐれた仕事に出会いたい。生きる知恵と勇気を分ち与えられ、狭いとらわれから、みずからのたましいを解き放ちたい。その仕事にたしかな形を与えて、読者、あなたに手渡したい。」

言うまでもなく、人間の事業は、生きつぎ生きつぎする人間たち総体によって、果てることなくなわれていきます。人間が、人間を侵すあらゆるものとたたかい、それにうちか

って人間として生きつづけていく。それが人間の事業です。時と所をへだてた人と人を結び、心と心を通わせる書物。それが書かれ、読まれるのも、この悠久の事業の一部、欠くことのできないとなみでしょう。……」

径書房を創めたのは、それまで三十年近く働いてきた出版社が倒産し、本来そこで私が手がけるはずであった山代巴さんの著作集を刊行するためでした。山代さんは、あの戦争中、反戦活動のかどで刑を受けて獄中にありました。彼女の文業は、敗戦と共に始まったのですが、その求めたところは、ひとりひとりの私たちが、自分自身の主人公となって生きることだと言ってもよいと私は思っています。戦争への道をひた走る大多数の人びとを押しとどめることのできなかつた痛切な反省が、山代さんの仕事を導きつづけ、そしてその仕事か、かつて天皇のために殺し、死ぬことを願っていた私自身の戦後を開き、導き支えてくれました。

私は山代さんのお仕事を、同時代を生きるたくさんのあなたにとどけたいと、心から願ったのでした。その最初の一群が、全十巻の『囚われの女たち』として三年前に完結して、たくさんの方々の胸深くに、たしかにとどきました。そしていま、次の一群、やはり全十巻の第二期「山代巴文庫」をおとどけしつづあります。

私が導かれた他の方々、上野英信や、林竹二先生のお仕事

なども、創業のごく初期に、皆さんにおとどけすることができまされた。そして、すぐれた仕事をしっかりと受けとめてくださる読者の方々に私はお会いすることになります。それぞれにご自分の場所で、たしかなど自分を生きておられる方々です。さあ、今度はあなたの番ですよと、私はみなさんに声をかけずにはいられないのです。

たとえば一冊の本のことをお話ししましょうか。『負けるな！子どもたち』、昨年、径書房で刊行させていただいた本です。著者は渡辺容子さん、いま都内の学童保育の指導員をなさっておられる方です。小学校一年生から三年生までを放課後に預って、彼らを見守り世話をするのがその仕事です。

子どもたちは、通信簿も内申書も、がんじがらめの校則も罰則もない場所に解き放たれて、体じゅうにうっ積しているものを、ここに来て思う存分に吐き出します。学校で抑えつけられてきた反動が、子どもたちと同じ目の高さで接しようとする渡辺さんに集中します。あらん限りの悪罵が投げつけられ、時には渡辺さんに対して暴力までふるいます。

渡辺さんはずっと径の本を読んでこられた読者です。私は雑誌で読み、また直接にお話をききつづけてきて、ぜひひと望んで書いていただいたのが、『負けるな！子どもたち』

なのです。

彼女が、荒れてねじくれた子どもたちに寄り添い、徹底的に格闘し、その子どもたちから受けとっていくものは実に豊かで美しく、それがまた子どもたちに照り返されて、思いもかけぬ光が、かくされていた光が子どもたちの内部から引き出されます。いまの学校風景に押しつぶされる私の胸に、それはかすかだけれども確かな灯をともします。エライ人が偉いのではない。どこにでもいる無名の、誠実に自分自身を生きる人が、私にとっては偉いのです。偉いというのはちがいますね、ありがたいのです。

昨年径書房は、『長崎市長への七三〇〇通の手紙』という本を出しました。天皇の戦争責任にふれた市長の発言に寄せられた、無名の民たちの深い思いがここにあふれています。老いも若きも、それぞれにこれまで生きてきた自分自身の歩みや現在をふまえて、戦争を考え、人倫を考え、この世界に生きる自分の責任を問うています。私はこれらの手紙にふれて、改めて自分を開かれたように思います。この日本について、なご希望を抱きつづけることは、決して虚妄のことではないのだと。

新聞やテレビなどの大マスコミ、そして一流出版社が競っ

て出すエライ方々の立派な本からは、そのような人びとの姿はほとんど見えてきません。見えてきませんが、そのような人びとがたくさんたくさんおられることを、私はこの十年にわたる仕事のサイクル——すぐれた仕事を受けとめてくださることで、その受け手の存在が見えてくるという関係——の中で、教えられつづけてきたように思います。他人に頭を、つまり自分の生き方を委ねることを決してよしとしない、たくさんの人びとの存在が、日本の救いがたい風景の前に立ちすくんで、それこそみずから頭をぶち割ってしまいたくなるような怒りと絶望の思いから、辛うじて私を引きあげてくれます。ありがたいことだと言う以外に、私はことばを知らないのです。

こんなことをここで申してはいけないのかも知れませんが、お許しを乞うて書いてしまいます。

半田たつ子さんが、文部省と、それにへいこらする学校有力者たち、そしてそのお情けにすがって商売をしようとする出版社長とたたかっておられるお姿に、遠くからながら深い共感と敬意を覚えておりました。その社を見限っておやめになったと風の便りにおききして、初めてお目にかかせていただきました。たまたま創業しようとしていた径書房で、一緒に仕事ができたらどんなにすばらしいだろうかと願っ

て、その話をさせていただきました。しかしその時すでに『We』のご構想があつて、ひとりのたたかいたかいつづけられるご覚悟をうかがい、いっそうの敬意と勝手な残念を抱いたものでした。

それからのお互いの十年余です。半田さんの、決して決して安楽ではないはずの歩みは、また私自身のものでもありません。相変らず遠くからながら、共労共苦の思いをひそかに抱いて仰ぎつづけてきました。『We』の目ざすお仕事は、また私の願っているものと別のものではないなどと申し上げては、いっそう失礼になるかも知れませんが。

どうぞ『We』の共同の仕事仲間のみなさん方、そして読者のみなさん方、半田さんのお仕事を、しっかりと共にになりめぐって私や径書房の仕事を支えてくださるのだ、いえ、この日本にしかも最も大事な教育の場にあつて、たしかな灯となつてたくさんたくさんの心を支えてくださるのだと、私は思っているのです。

(はらだ・なおお 編集者)

発

言

テレビ番組に「女の視点」を

早川与志子

80年代は「女の時代」と言われた。「女の時代」という流行語そのものが、実は、男性が創り出した宣伝文句であったけれど、女性の知恵がそれを利用し、あらゆる分野に女性が進出するきっかけとした。男女雇用機会均等法の施行も一層の拍車をかけた。時代の先取りを自負するテレビは、その流れの中で、遅まきの女性登用を余儀なくされ、また、半ば恐れながらも、その現象を巧みに商品化している。

テレビの世界は伝統的に男社会である。画面に登場する女性の数に誤魔化されなくて頂きたい。番組の最後に流されるスタッフクレジットをよく観ていれば気が付くと思うが、女性は非常に少ない。派遣やアルバイトの若い女性、フリーやプロダクションで働く女性は別にして、カメラの裏側で制作に関わっている社員のプロデューサー、ディレクターの女性はまだまだほんの一握りでしかなく、ましてやチーフという肩書きのある人などは稀有であるのが現実である。

一方、この十年間で、女性の活躍の場は増え、役割は多様化しているのも事実である。かつて、ニュース番組で殺しの現場や国会からの記者のレポートは例外なく男性であったし、キャスターと言っても、天気や軟らかいネタを読むだけのアシスタントが精一杯であった。それが今や、女性海外特派員が登場し、メインキャスターという地位に昇格もしている。

ドラマも然り。優しくて、逞しくて、夫に忠実で、子供第一主義の肝っ玉母さんは、美人で有能な中年キャリアウーマンや、仕事と家庭をそつなくこなす働く母親に転身して、変化を見せている。職業も、家族ぐるみで切り盛りする自営業から、弁護士や医者などの専門職、経営者に至るまで多彩になった。

現象的には、テレビで活躍する女性は確かに変化を見せている。もちろん、この変化は社会の変化と無関係ではない。

では、テレビは本当に女の時代になりつつあるのか。個人的な見解で申し訳ないが、残念ながら答えは否である。悲観的になりがちなのは、相も変わらず、男の視点やフィールドを通した番組が茶の間に送り出されている現実を、テレビ局の中で、毎日目の当りにしているからである。

'88年の統計では、民放全体(テレビ・ラジオ)に働く女性従業員は20%(NHKは6%弱)に満たない。その内、アナウンサーは40%強で女性の比率が最も高いが、制作部門は約16%、報道は8%位である。それでも、女性記者約2%の新聞と較べればまだまだかもしれないが、海の内こうのアメリカでは、制作に約26%、報道33%の女性がいるわけだから、その不均衡たるや恥ずかしい限りである。

'80年代最後を飾った宇野元首相の愛人問題はまだ記憶に新しい事件だが、あの女性の独占インタビューを放送したある民放番組で、男性キャスターの最後をしめくった言葉に、女性視聴者はびっくりした。

「やっぱり女性を怒らせては恐いですね。確かこのような意味のことを言ったと思う。芸者の風上にも置けぬ、手切金が少なかつたから暴露した、などといった筋違いの議論が飛び交う中、このなまの証言が与えた影響は小さくなかつたはずだ。だからこそ、この最後の不用意な発言は残念なのである。この女性の言動に関して賛否両論あつたけれど、キャス

ターが女性であつたら、別のコメントを捧げていたろう。

また、テレビドラマは、職場で奮闘努力する女性の姿をどれだけ描いているだろうか。共働きとは言いながら、家事、育児の負担が依然として妻の双肩にかかっている現実を、そして、働く母親の問題を、どれだけ真剣に問うているだろうか。

美しく着飾る独身のキャリアウーマンの悩みは、仕事よりも恋愛に力点が置かれ、働く母親に「お母さん、仕事を辞めて」と子供に叫ばせている背景には、男社会の都合と価値観を維持しようとする目論見があるのである。「女の時代」は、男の本音を隠すアクセサリーでしかないように思う。

テレビは一瞬にして消えて行く宿命を持つているから、よほど注意していなければ見逃してしまふ、聞き逃してしまふことがたくさんある。女性のビキニ姿のアップで始まる海開き、ロマンスグレイのキャスターには若い女性アシスタント、嫁にもらう、家(籍)に入る……。テレビの世界では、これらの映像や表現が、何気なく、当たり前のこととして創り出され、男性主導型の構造が、無抵抗にそれを受け入れている。その偏向したメッセージを変えていくには、女性の数を増やすしかないのだ。作り手側が圧倒的に男性という状況は、不健全、不自然である。なぜなら、社会の半分、視聴者の半分は確実に女性なのだから。

(テレビ局勤務・「放送を創る女性の会」世話人)

発言

日本のジャーナリズム考

アルベルト・ノヴィック談

文責 安達 倭雅子

六〇年代、アメリカの大統領任命の、テレビについての審議会の結論が「テレビは大いなる荒地である」であったことはご存知のとおりである。つまり、テレビの薄い内容と大き過ぎる影響力は、もうここですでに問題になっていたわけである。

私はあるとき、放送衛星を通して行われた日米の教育問題のトップ討論会のテープ起こしの作業をしたことがある。ここで極めて印象的であったと言わなければならないことは、討論を活字にしようとする、日本人がテニオハの整った簡潔な文体で話をしているのに対して、アメリカ人の場合、名門大学の教授レベルの人の話が、ほぼ完全な文体として喋られてはいないということであった。私はこれを、本を読まないとテレビ文化の中の活字離れの結果であると考えた。

私がアメリカで生まれた頃と、アメリカのテレビの普及時期は一致するから、私は日本の「テレビっ子」より一足早い

「テレビっ子」として育ったことになる。私はアメリカにいて、中学生の頃、それまでのテレビ視聴の習慣を捨てた。この「主義」は来日してからも続けられたことになる。なぜなら、私も「テレビは大いなる荒地」だと思っただけだ。

ところが、こんな私が、最近、日本にいて外国向けのテレビの仕事をするようになった。依然としてテレビを持たない見ないままの私だが、実は見なくて十分仕事になる。仕事はニュース関係だ。私は新聞と独自の取材でそれを十分に果たしている。もちろん、日本のテレビ番組に優れたものが一つもないとは言わないが、テレビの仕事はテレビを見なくてもできると私は深く信じている。

一緒にこの仕事をしているイギリス人のプロに、私は、日本のテレビについてたずねられたとき、こう答えた。

「日本のスチル写真は抜群だが、動画の構成はおしなべてダランナイよ」と。イギリスの映画やビデオの編集には、「文

法」に当たるはつきりしたルールがあるのだ。それから、もう一つ、「日本のテレビには、やたらに思春期の女の子が出てくるよ」と。

日本の新聞、特に三大新聞と呼ばれるもののレベルは高いと私は考えている。しかし、その論調には、確固たる主張や価値観を徹しく感じると言うよりは、あらゆる場合、それぞれの立場や言い分を忠実に並べて伝えるという傾向があり、私にしてみれば、「結局だから何なんだ」とものたりない思いをすることが多い。

日本のマスコミの根本には、二つの大きな問題がある。その一つは、日本のジャーナリズムが男性に支配されているということだ。これは日本の経済的文化的な女性の立場の反映で、何もマスコミに限ったことではない。

日本の社会はあらゆるところで女性の進出の乏しい国には違いないのだが、その極端な例は、女性向けの雑誌でさえ、少数の女性と多数の男性によって創られており、内容的な決定権は男性にあるということだ。その「雑誌」が直接女性に大きな影響を与えていることは見逃せないし、またその構造を唯々諾々として許し続けているのは、女性たち自身だということとは重大だ。女性週刊誌のライターの男性が言った。

「私たちは女たちの一番読みたいことを一番気に入るようにな

書いているのだ。つまり、女のことばを私たち男性は女より上手に書けることが経験的にわかっているのだ」と。これがよい状態と言えるはずはない。

もう一つは、日本のジャーナリズムが政府や権力のある機関から十分な距離をおいていないという問題だ。これは日本の伝統とも言うべきことだが、日本の場合、政府要人や高級官僚たちが、国民の価値観やあらゆる基準を設定する。こうした日本の政治のパワールの中心は東大の法学部を卒業した者によると言われるが、ジャーナリズム、つまり新聞社なども同系のエリートによって形成されている。優秀な人材なのだから最善の政策がわかっているに違いないとして、その見解や価値観を鵜のみにしてしまいうことは、単純過ぎて民主主義とは、およそ程遠い。ここに根深い日本の「お上志向」を感じざるを得ない。

同じ根に原因を持つものだと考えるが、犯罪報道などが、警察発表を右から左に伝えるだけであることが象徴するようには、日本の新聞などが警察や警察的機能に対して批判的なチェック能力と機能を積極的に持とうとしていないこと、これこそが日本の民主主義にとって、極めて危いことだと私は考えている。実はここが最大の問題点なのだと思うのだが……。

(ジャーナリスト)

発

言

いま、なぜミニコミか

公庄れい

「いまなぜミニコミか」という題をいただいているが、いま、特にマスコミが駄目になり、ミニコミが必要なきにたぎっているとは思っていない。マスコミは何時の時代もマスコミでしかあり得ないしミニコミもまたそうであろう。ただ、新聞紙面に占める広告量の増加に比例して、企業活動への批判が鈍る可能性が高まっていることは事実であろう。

農薬多用農業への警鐘を鳴らした故有吉佐和子氏の『複合汚染』が朝日新聞に連載されていた時のことである。連載が進むにつれて読者の関心も高まり、いよいよ面白くなるかと思われた頃のこと、当時私は神戸YWCAのマザースカレッジの企画委員をしていたが、次期講座の講師としてお願いした作家の陳舜臣さんからお断りがあった。理由は、有吉さんの小説がすぐ終わることになったので、その後を引き受けていた陳さんが急に忙しくなったからという事であった。

それから暫くして小説は唐突に終わった。その後、また同

カレッジの講師にお迎えした朝日新聞資料室の方（お名前を失念）にうかがうと、「薬屋さんから横槍が入って止めざるを得なかったんです」と言われた。その当時、新聞広告は薬屋さんが多かったのである。朝日新聞の方は、「私が入社した頃は新聞社の会計は広告代四分、販売利益六分だったが、今はそれが逆になっています」と言っておられたが、一九九〇年十月一日の朝日新聞三十二ページ、全面広告十ページ、求人広告等の案内欄が四ページ、その他の広告も入れると記事は半分以下である。つまり、読者は企業活動に配慮しながら書かれた記事と共に、企業の主張する価値観を目にし続けているのである。そういう状況の中で、幼稚園からの進学競争に打ち勝って一流大学を出て、高い競争率の中から選ばれて記者になったエリートサラリーマンたちに、時代の本質が捉えられるのだろうか。

次に、私の住んでいる町、神戸での問題と、それに対するマスコミの対応を書いてみたい。

神戸市は77年から毎年秋、消費者問題神戸会議を開いている。この会は、高度経済成長の歪みを鋭く追求する日本消費者連盟に代表されるような、企業告発型の消費者運動を押えるために、企業・行政・消費者が相互の立場を認めた信頼の絆によって結ばれるべきだという理念に貫かれた「三者合意システム」をモットーにしている。企業主導の消費者教育の枠の中に消費者の意識を閉じ込めようとする巧妙なワナのようなこの会を神戸市と共催するのは、神戸市消費者協会である。神戸市消費者協会は神戸市婦人団体協議会（婦人会）の一実行委員会であり、神戸市からの委託事業以外の消費者運動は一切しない。また、会幹部と神戸市幹部との金銭授受、企業と会との金銭授受が問題になったこともあり、89年度には二千七百七十万円余の市の委託事業を行い、婦人会と合せて一億六千四百二十万円余の委託事業をしている。勿論これは昨年度だけの問題でなく、この状態が毎年続いており、婦人会は会員に委託事業報告も会計報告もしていない。

こうした消費者団体の名だけ騙った団体の活動を、新聞は毎度麗々しく書き立てており、特に消費者問題神戸会議は、全国から行政の消費者問題担当者や企業の消費者対策関係者、主として行政が育てた消費者団体等が集まり、神戸の婦

人会も動員をかけ、二千人もの全体会が開かれるので、例年大きく取り上げられる。が、この会が現在の社会に対して持っている犯罪的ともいえる意図にふれることなく、無邪気に主催者側の言い分のみを報じている。神戸市の各種審議会委員中、婦人会専務理事が二十一、会長が十九を兼務し、専務理事は消費者協会の専務理事を兼ね、ダイエーの経営する流通科学大学の教師でもある。これだけの事実の中から何も汲みとれない記者の資質は一体どうなっているんだらうと思ってしまう。

金満日本の中流家庭は、今後もこうした記者を産み出し続けるであろうし、新聞社が、アイヌや在日朝鮮人、差別される側の人を優先的に記者として採用する決意でもしない限り、状況は悪くはなっても良くはならないものと私たちは覚悟しなければならぬだろう。

で、何かに関心を持ってそのことを知ろうと思うときは、ミニコミに頼らざるを得ない。ミニコミは何らかの目的があって出されているからその筋をたどっていけば相当深い知識を得ることが出来る。しかしミニコミの真骨頂はそれを出している人の生きざまにじかに触れうることにある。人との真の触れ合いが難しくなってきた世の中で、人が、人に本当の意味で心を通わせることのできるミニコミは、これから益々増えるのではないかと考えている。

(ミニコミ主宰)

◆学習の主人公たち

「どんな番組を

みて(きいて)いますか」

〈横浜市立下田小学校三年〉

●好きなテレビ番組を三つ教えて下さい
●一番目だけ好きな理由を教えてください
の設問の回答を集計し、多い順に、感想と共に並べてみました。(35名)

①ちびまる子ちゃん(25名)

(中谷 衣里)

まるちゃんがかわいい。いろいろな顔になったりするからかわいい。かおがぼうせんになったところもかわいい。

(西橋 奈未)

かわいくて、しゃべり方がおもしろいし、たまちゃんとかはまじとか、あだながついているからよびやすい。

(さとうことみ)

かわいくっていろいろなひょうじょうをし

ておもしろい。

(伊豫田真由美)

ナレーター言葉とか、まるちゃんがガンとしたところが、おもしろい。

(中川 美郷)

ナレーターが「:である」というところがとてもおもしろい。それに、まるちゃんも、とてもおもしろくて、たのしい。

(榎本 雅子)

かみのけが、かたまっているのがおもしろいし、まえがみのとげとげがおもしろい。

(新井明日香)

たのしくて、おっちょこちょいで、ないたところや、ガンとくるところが、おもしろい。

(中里めぐみ)

ナレーターの言葉がおもしろい。マンガでも見ているし、家ぞく、ぜんたいで見ている。まるちゃんの顔に線がでる顔がすぎです。

(小川久美子)

まるちゃんがとてもかわいい。顔がよくわかるのもかわいいけど、え顔が一番かわいい。

(大久保 翠)

まるちゃんのあたまがかわいかったよ。

(久保寺あんな)

ちよつととぼけていて、かわいいから。

(ふかつゆみ)

おもしろくて、ドジでかわいい。

(あい川ふみえ)

まるちゃんが考えることがおもしろい。

(小林美奈子)

かわいくて、しゃべりかたもおもしろいし、はなわくんとかまるおくんとかもおもしろいし、たまちゃんもたまちゃんもおもしろい。

(森田 峰仁)

ねつたいぎよがはいっている水そうの中にザリガニを入れたり、そういうバカなところが、すごくおもしろい。

②ドラゴンボールZ(16名)

(あかしこうき)

たたかったり、いろんなことがあるからおもしろい。

(はたのせいち)

たたかうところが、かっこいい。

(三石陽一郎)

ギャグやシャレがおもしろく、登場人物が
かっこいいし、わざも、かっこいいし、はく
りよくがあるから、いつも楽しく見ている。

(ふじわらもとき)

わざをつかって、ギニューとくせんたいの
ポーズがかっこいい。

(ながしまひろあき)

わざがかっこよくて、おわりそうになるの
にどんだんはながなくなって、スリルが
あってももしろい。

(渡辺謙太郎)

かっこいいところは、登場人物で「悟空」
という人物がいて、わざをつかうところがす。
おもしろいところは、ギニューとくせんたい
のポーズです。

(村上 亮司)

うたがスリルがある。「ギニューとくせん
たい」が、おもしろい。悟空の「かいおうけ
ん」がかっこいい。「おしい／＼」ってとこ
ろがたのしい。

(松崎よしかず)

わざがつかえて、ギニューとくせんたいや
そんごくうなどいて、かおやかだつきが
かっこいい。

(ほりよしみつ)

ごくうが、かっこよくて、どんだんパワ
アップしていくところ。

③ドラエモン (8名)

(松本 理)

いろいろな、ひみつどうぐがでてくるから。
④ドラゴンクエスト (6名)

(浜岡 仁)

たたかいのときとか、ぼうけんとか、いろ
いろな町に行っていることをおしえても
らって、いろんなところに行くところがおも
しろい。

(たき本青じ)

しゅじんこうが、カッコよくて、ファミコ
ンのドラゴンクエストⅡⅢⅣのじゅも
んや、ファミコンにでないじゅもんがあつて
おもしろい。

⑤まじかるタルのトクトくん (6名)

(上村 文人)

みんなのきもちがよくわかって、おもしろ
い人もひとりいるし。

⑥サザエさん (5名)

⑧おぼっちゃまくん (4名)

(久保田 光)

ちゃま語がでておもしろいから

⑧らんま (4名)

⑧ふしぎの海のナディア (4名)

⑪シートン動物記 (3名)

(石橋真理子)

しぜんの中でくらすのは、楽しいときもあ
るけど、きびしいときもあるんだなと思って、
とてもおもしろい。

⑫かりあげくん (2名)

⑬スケールウォーズ2 (1名)

⑬スケールウォーズ2 (1名)

(建部 登)

ぼくは、ドラマが大好きです。ほんとうに
あったことのドラマもあるから大好きです。
⑬とぶがごとく (1名)

(小林 節宏)

社会が大好きだし、江戸時代の人はどうい
う生活をしているかなどしらべたいから。

⑬わたしの足ながおじさん

(鎌田 美子)

のはらにいくところがおもしろい。

(山本 静)

テレビは、おとうさんのへやにしまってい
て、いえの人は、だれもみない。夏休みしか
出ません。

熊本県宇土郡

三角中学校二・三年

中野 寿子

◆私は、テレビを見るのはとても好きで、とくに見るのは、アニメでは「ドラゴンボールZ」などで、ドラマ、外国の映画などもよく見ます。お笑いの番組なども、家族みんなで見ています。なぜこんな番組が好きかという点、私の好きなタレントが出てたりするからです。歌番組も好きだったけどこのごろ少なくなりました。

井芹 雅浩

◆ぼくは「サザエさん」が好きだ。なぜなら、あのキャラクターが、気に入っているからだ。サザエさんのそりこみ。波平さんの横と一本しかない髪の毛。家の間取りの不思議。年をとらない家族。数かぎりない謎。それなのに、近所にいなような家族。けど、小さい子から大人まで、気に入られているのはなぜだろうか。そういうことをふくめて、僕は、波平さんをはじめ、なんのとリエもないカツッ、それに、さりげなくサザエさんにくるタラちゃん。パンツがみえるわかめちゃんや、ンチャ、ハ

ーイ、バブーしかいえないイクラちゃんらを使ういういしく思い、そして、親戚になくてもよかったとほっとしながら、みています。

高田 圭子

◆私はいつも毎週日曜日にある「ちびまる子ちゃん」を見ています。「まる子」は私達がふつうやっているような事をやります。「まる子」は私達子供に一番近いという点で人気があるんだと思います。「まる子」のかわいさはお金持ちの人とかえらい人には絶対分かります。私達ふつうの庶民にしか分からない、ほのぼのとした、温かい、やさしさの人間です。私のお父さんもまる子ファンです。

相川 章吾

◆「テレビ探偵団」がまず好きだ。それは昔のテレビ番組についてくわしく放送してくれからだ。次に特別に好きというわけではないが、つい見てしまうのが「サザエさん」である。これといったギャグもスリルもサスペンスもないが、見るのが習慣になっいて、いえば、不思議なおもしろみがあるのだと思う。また「筑紫哲也ニュース23」も、内容からいうと「スーパータイム」ともたいしてかわらないが、特集や筑紫哲也のしぶみのある声にひかれるところがある。「ドラゴンボー

ルZ」も、アドベンチャーと現実ばなれとがからんでとても楽しい。「ギミア・ぶれいく」も2時間という長時間番組ながら、内容も濃くバラエティーに富み、ジャンルも豊富でおもしろい。中の「笑わせえるすまん」が特別おもしろい。

田中はじめ

◆私の好きな番組はTVのアニメだったら「ワタル」で、ドラマはなんでも好き。あと歌番組は必ず見るし、見れない時はビデオにとる。夏しかないけどF1も大好きで、夜はズーッと終るまで見えます。ラジオも土曜日の夜は夜明けちかくまでズーッと聞いてます。べつにTVやラジオはためになるってわけじゃないけど、私にとって大人の酒のようなものです。大人は酒で一日のつかれをいやしたりします。その酒のかわりが、TVやラジオです。もしTVやラジオがなかったら、私の生きがいはないなんにもないだろうし、友達の会話もきつとおもしろくないだろうし、毎日同じようなコトばかりだろうナ……。

国本 弥生

◆テレビを見るといのが習慣になっている

私の生活の中で、選んでみれば、今や、大ブームとなっている「ちびまる子ちゃん」は、やっぱり、おもしろい！ あの、まるちゃんのおとぼけがいい！ それに、私達庶民の日常生活が舞台となって、あくわかるわかる、と思ってしまう。大人や先生達も、このテレビを見て、子供心を研究してほしいです。

斎藤 千紗

◆「ちびまる子ちゃん」や、「ドラゴンボールZ」などは、必ず見ています。「笑っていいとも」なんかも見たいけど、祭りぐらいいから見れません。別に、テレビを見る理由はとくにないけど、なんか見ると、おもしろいし、たいくつしないから見えます。別に見なくても平気ですが、何かしらないけれど、見たい、という気がわいてきてテレビにひきつけられます。(特にアニメ)

井場 友和

◆「はいすくーる落書」が好きです。なんでかと言うと、たいした事じゃないけど、ふりふりがすぎて、強いやつを見ると、なんか、おもしろくて、それを見るのが、やみつきになっってしまうからです。

前川由理加

◆私がよくみるのは、好きなのはゆうなどが

出る番組です。いくら、内容がおもしろくても、きらいな人がでてたりしたらみません。まんがでは、ちびまる子なんです。小さいころの自分をみてるようで、まるちゃんのかおにたてのくろいせんが出るのがすぎだからです。まるちゃんの顔も美人ではないし、ぶすでもない、ふつうの家族で、どこの家でもありそうなけんかや、勉強のことなどです。そういうのが好きです。なにか、ほのぼのしていて、友達たまちゃんも、どこにでもいそうでいい人です。男の子も、おもしろく、かわいいです。こういうまんがが好きで、用事があるとき以外は、ほとんどみえます。

沖田ももこ

◆私が一番好きな番組は、「ちびまる子ちゃん」です。この番組の主人公のまるちゃんが大好きで、ふつうのアニメとは、どこかちがう所があるのが好きです。ちびまる子ちゃんが好きなのは、子供ながらに、ませてる所があること、まるちゃんのまわりの物がみんな楽しいことです。私は、番組がおわるまでちびまる子ちゃんを見続けたいと思います。

中尾奈都子

◆あたり前だけど、おもしろいのが好きです。「おはようナイスデイ」とか「3時にあいま

しょう」とかは、あまり好きではありません。NHKの番組は難しいのが多いけど、前に聞いたのとちがう意味でおもしろいのがある時は見ます。ラジオは特に聞きません。

嶋田 広美

◆私がおっとも時間をとって見てしまうテレビはほとんどバラエティー番組にかぎられてしまう。やっぱり、笑って気分をすっきり、さっぱりしてしまいたい。つい数年前は歌番組ばかりだったが、最近では歌番組も減って、見る番組がさがられてしまう。土曜日なんかは、夜ふかししても見たい番組が集中しているが、次の日は部活だ。日曜日だったたくさん見たいテレビがあるのに……。

坂本 節男

◆「知っているつもり」はいままで知らなかった、人が何をしたかとか何を発明したのかをくわしくしてあるので、おもしろい。ほかに好きな番組は「やまだかつてないテレビ」

内田 理代

◆今一番好きなテレビ番組はアニメです。宮崎さんが描く「となりのトトロ」や「風の谷のナウシカ」などとても大好きですが、このような番組は、金曜日ドドンショーなどでしか見られないのを非常に残念に思います。

△山形県酒田市

酒田北高校二・三年△

金野 和人

◆テレビは、気が向いた時しか見ませんが、今の情報社会がクレージーというのはどうゆうことでしょうか。それは今の世代の頭のかわたいじいさんばあさんが、時代の流れについていけずに、せまい見聞でしか物事を見れないからだと思います。

阿部 敦子

◆私は、「はいすくーる落書2」という番組を、一時間がとても短く感じるくらいおもしろくて、毎週かかさず見ていました。

私達と同年代の話なので、共感することがたくさんあって、時には感動したり、また大笑いしたり、私達をドキドキさせてくれました。このごろつまらなくなってきたテレビ番組が多くなってきましたが、この番組だけは、楽しく見ることができました。

池田 直樹

◆特に見るのは、木曜スペシャルの「決定的瞬間」です。特にハラハラ、ドキドキするのが好きだ。人間が命かけて、この仕事にがんば

っているのを見ると、人間の誇りを感じる。

金野真由美

◆私はよく、若者が活動するのを見ます。番組名をあげれば「地球ジグザグ」「土曜くらぶ」などです。世紀末だクレージーだと言われる時代で、近い年代の人達が一生懸命やっている姿を見ると、なにか感動するものがあります。自分も何かやってみたいという気持ちになるのです。

後藤 清明

◆自分の好きな番組は、「知ってるつもり」です。あの番組はハッキリ言って感動します。もう番組が始まった時点でジーンと来るものがあります。歴史的人物の波乱にとんだ運命やその人物の生き方などですばらしいです。番組の最後に出て来るテーマソングがまた心に響くような感動する唄で、もう最高!!

石黒 正人

◆私は特別よく見るといことはありませんが、「ギミア・ぶれいく」を見ます。あの番組を見てみると日本というせまい国だけではなく、外国という広い世界が手にとるように分かるので良い。

石黒 剛

◆自分ではよくクイズ番組を見ます。その中でもよく見る番組では、20世紀のことをくわしく教えています。その当時には何があったのかとか、その当時は物がいくらだったとかよく分かり、本当によい番組だと思います。

佐藤 理香

◆私がよくみるのは、プロ野球ニュースです。他のスポーツニュースとは違ってどの球団もしっかりと放送してくれます。そこが他のスポーツニュースとは違う魅力なので、とても気に入っています。野球以外の情報も教えてくれるのでいい番組だと思います。

斎藤千代子

◆私は、土曜日の夜にやっている「夢で逢えたら」をよく見えています。くだらないギャグばかりなのだけれども、そのギャグがたまらなく笑え、いやなことなんかがあったときなんか、それをふきとばしてくれます。

中塚 忍

◆私の良く見る番組は、主に、バラエティー番組です。やはり、笑うことは良いことですし、何より楽しい気持ちになれるからです。ドラマや映画などは、途中を見のがすと、ストーリーがわからなくなるし、疲れます。や

っぱり、バラエティーが一番だと思えます。

池田 睦

◆僕は時代劇が好きです。「暴れん坊将軍」なんかはとてもおもしろいと思っていたのに、終ってしまった残念でした。年寄くさいけど時代劇をみて日本だなあーと思っていたい。

五十嵐恵美

◆私のよく見る番組は、音楽関係が多いです。最近なくなってきたつあるけど、大好きなアーティストが出るとなるともたつてもいられなくなつて、ビデオを用意してまわす。でも今、どんどん音楽番組は真夜中にまわされたり、最後にはなくなつてしまつて、テレビがあんまりおもしろくありません。もう少し音楽番組をふやしてほしいと思います。

本間 総

◆私がふだん見ている番組は、映画です。お笑い番組などは、うるさくてあまり見ません。映画の中でも洋画が好きです。ドラマ、中世紀ものや、戦争映画、コメディにホラーなんでも見ます。近頃のテレビでの映画は、ほとんどが吹き替えになつていてあまりおもしろくありません。字幕のほうが、役者たちの本当の声が開けるのでいいと思います。どういふ映画でも、「おもしろかった」という

充実感があじわえる映画が好きです。

渡部 まり

◆私がよく見るテレビ番組は、「天気予報」です。あんまりテレビは見ないのですが、天気予報は、かかさず見ます。なぜかかざす見るかというところ、家から学校までとても遠いのに自転車を通っている私にとって、明日の天気ほど気になることはありませんから。

斎藤 修

◆私の、良く見る番組は、夜の9時から始まる、洋画です。その中でも好んで見るのが、戦争物です。戦争映画を見てみると、血が騒いできて、自分も戦争に行きたくなります。あの興奮度はたまりません。

佐藤 智昭

◆自分が最近、興味を持っている番組は、ニュースです。そして、ニュースの中でいいと思うのは、「ニュース23」。特にいいと思うのは、ニュースキャスターが、ニュースに対して、自分の意見を言う所です。

鈴木 明

◆よく見る番組としては、クイズ番組が主体です。アニメ番組では、「ちびまる子ちゃん」などよく見ます。前までニュース番組、特に中東情勢に興味があつて見ていたのですが、

最近ではあまり見なくなりました。初めのうちは、戦争が起きなければいいと思つていましたが、もうどうでもよくなつてきました。

高橋 弘美

◆私は、家などであまりテレビなどは見ない方です。テレビを見る時間があるなら、毎月発売する小説を読んでいたいです。

推理ものやアクションは、スリルがあり、いっしょに推理していったりで楽しくなつてくるので、ひまな時によく見たりします。

高橋 美樹

◆最近、毎週見る番組というのが私の中で少なくなつてきています。時間がないというわけではなく、特別毎週見る必要がある番組がないからだと思つています。私が見ていないだけかもしれませんが、最近の番組に、あっさりしたものも多く、連続したものが少ないように思つています。もっと多様な番組を見せてほしい。

斎藤 春美

◆高校一年の夏頃から見たい番組はなくなつたと思う。今年の三月頃までは金曜日の夜九時からの「卒業」はかかさず見ていたが、そのあと面白い番組が特になく、暇な時は自分の部屋に入って音楽を聴いたり、小説を読んだりしながら時間つぶしをしている。

新しい 家庭科を 創るために

小学校では

宣伝と子どもたち

— 子どもの消費者教育を考える —

● 狛江市立狛江第五小学校

池田雅江

あくまで一般的な傾向としてはあるが、現在子どもたちは金持ちである。かなり高額の商品を自由に購入するだけのお金を与えられている。一九八六年四月、東海銀行が東京・名古屋・大阪の小学生から高校生を持つ主婦八二〇余名を対象に実施した「現代っ子の持ち物と貯蓄」アンケート調査によれば、その一年間の子どもたちの「平均収入」は小学生三万七千円、中学生六万二千元、高校生十五万八千元、また八割の子どもが貯蓄をし、その額は小学生十二万七千円、中学生十三万六千元、高校生十五万九千元という。ただしこの金額はお年玉なども含めた額である（研究集団・コミュニケーション90編『広告産業・現代の演出者』一九八六年）。だがこうした子どもたちが無防備のまま、様々な形態をもって展

開するコマースリズムの格好の標的とされてしまっているのである。この問題を私達は看過してはならないであろう。消費者としての子どもの消費行動は、現在、企業にとつて大きな市場を占めている。子どもの言うがままにものを買って与え、自分よりも高価なものを身に付けさせる傾向にある親、小づかいの額やお年玉の額など的高額化など、このような中で、将来の有力な得意先として、企業は子供を対象とした商品の開発、情報の分析に力を入れている。大人と同様に子どもをその商品販売の対象としているのである。ところが子どもには、生活者としての自覚が大人ほどは発達していない。物の価値や品質を見極める能力が十分備わっていない。つまり、宣伝にだまされやすく左右されやすいのである。

八・九月号では消費の最終場面であるごみ処理について考えてみた。今回は不十分なが消費活動の初発にあたる物を選ぶことそれ自体を取り上げ、子どもたちと考えてみた。教材研究も、また私自身の授業実践の蓄積もない、未だ暗黒模索の領域であるが、何らかの問題提起になれば幸いである。

一、事前調査

(対象 五年生一クラス28名 九〇年九月実施)
①子どもたちの自由になる金額

一か月当たりの小遣いの量	10・2%
もらっていない	27・4%
五〇〇円	57・5%
一〇〇〇円	3・8%
一五〇〇円	1・2%
二〇〇〇円以上	

②物を買うとき参考にする事(表1参照)

この購入項目は、雑誌「モノグラフ小学生ナウ」第44号(一九八五年)で紹介された、子どもが自分の小遣いでよく購入するもので上位を占めるものである。また、テレビをはじめとする四項目の情報媒体は、私が立てたものである。

この事前調査の結果、子どもたちの消費行動は、対象人数が少ないため必ずしも一般化することはできないが、購買行

表1 物を買うとき参考にする事(1990年9月実施)

購入項目	TVのコマーシャル		本・雑誌の宣伝		友人の意見		親の意見	
	参考する	しない	参考する	しない	参考する	しない	参考する	しない
ノート・鉛筆などの文具	6	22	3	25	13	15	14	14
おやつ・飲み物	8	20	4	24	12	16	17	11
まんがの本	8	20	15	13	16	12	8	20
自分の趣味のもの	8	20	13	15	14	14	10	18
物語の本	4	24	6	22	11	17	12	16
おもちゃ・ゲーム	10	18	13	15	15	13	11	17
参考書・ドリル	4	24	6	22	5	23	17	11
自分の着るもの	4	26	4	24	3	25	16	12
合計	50	174	64	160	89	135	105	119
%	22	73	29	71	40	60	47	53

動は概して平均的なものといえそうである。マス・メディアを通しての宣伝が趣味のものやゲーム類の購買に関しては、かなりの影響を与えていることをここからもうかがうことができよう。現在のコミンヤリズムが子どもたちにどのような影響を与えているか、授業の中で探ってみた。

二、「おやつ」の授業を通して

「いつ・誰と・どこで・準備した人・何を」の内容で一週間のおやつ調べをし、菓子・飲料類のパッケージや缶を持ち寄った。

① パッケージ・缶を見ながらどうしてこれを選んだのか？

- ・ 中身が多い
- ・ 以前買っておいしかった
- ・ 書かなくてはならないので注意して選んだ
- ・ 中が見えてわかりやすかった
- ・ おいしそうだった
- ・ 安かった
- ・ おなががすいていた
- ・ 家にあった
- ・ おまけを集めているし、おいしいから

② パッケージ・缶を見てどう感じたのか？

- ・ はで
- ・ まだたべていない
- ・ 写真がのってるのでわかりやすい
- ・ おいしそう
- ・ 中が見えるのでいい
- ・ いろいろなことが書いてある

③ どうしたらたくさん売れるか、工夫するとしたら

- ・ あたりつきにする。おまけをつける。はずれが出ても何枚か集めるといいことがある。あたらなくても、あたるまで頑張りとうと書いて売る
- ・ シリーズにする
- ・ 試食させる
- ・ 変わった形にする
- ・ みかけをおいしそうにする
- ・ 値段を安くする
- ・ テレビや新聞で宣伝する。楽しい宣伝をする

・ 中を見せる

- ・ 好みそうな味を研究する
- ・ 食品添加物を使わない。身体にいい天然のものを作る
- ・ 店の目立つところに置く。置く場所を工夫する
- ・ パッケージをきれいなものにする。イラストにキャラクターを付ける。実物よりおいしそうに写真をはる。色をきれいにし、合着色料と書かない

④ どのところに注意して買うのが賢い買い方と思うか

- ・ 食品添加物をあまり使っていないもの
- ・ 栄養のあるものにする
- ・ 味の濃いものはやめる
- ・ 色のすごいものはやめる
- ・ おまけにまでわざれない
- ・ なんて書いてあるのかよく見る

以上は子どもたちが日常飲食している商品について、どのように対処しているかを発表させたものである。

さらに、仮に売るための商品としてだんごを作らせてみた。そして子どもたちが売るといふ行為を前提としたときに、どのようなことを考えて作り、また売ろうとしたかを話し合させた。以下はその結果である。

⑤ だんごを作り、売る工夫

- ・ 電気やガス・水道の値段や材料の値段を調べて、手伝ってくれた人の料金やもうけもいれる

- ・子どもが買える値段にする
- ・まわりにつけるものは栄養のあるものにする。あんどきなこにする
- ・変わった色にする。赤と緑の色をつけてイチゴとメロンのようにする

- ・意外なものをつける。ジャムをつける。チョコをつける
- ・一個ずつラップに包む。リボンでむすぶ
- ・変わった形にする。三角とひも型
- ・棒にさす。二個は違う味にして、楽しめるようにする
- ・中にいれるものを考える。ミカンなどの缶詰

⑥買おうと思い、選んだ理由

- ・ふつうなのでよいと思う
- ・かわいかった
- ・値段が一番やすかった
- ・変わっていたので食べてみる
- ・一番大きかった
- ・たかった
- ・一番へんだった

子どもたちは売り手がどんな工夫をしたものを売ろうとしているか理解しているようだ。特に③の意見には現代のコマーシャルリズムの問題点がそのまま映しだされているといえよう。また、どんな買い方をしたらよいのかにも気がついてい

る。
しかし、実際はやはり見た目や、宣伝に流されている。どこかで歯止めが必要であり、物を選ぶ際の正しい知識や惑わさ

れない自立性を子どもたちに教えていかなければならない。

三、コマーシャルリズムと子どもたち

〔教材研究のために〕

子どもの肥大化した金銭感覚は、たとえば、前掲「モノグラフ小学生ナウ」第44号（一九八五年）や同誌第51号（一九八五年）にも端的に現れている。そのような状況と現在の情報過多の社会状態とを絡み合わせて考えた場合、今日の宣伝の問題点について充分に考えなくてはならない。企業が子どもを目標に据えて活動している現在、子どももまた消費者としての権利、すなわち、かつてアメリカの大統領ケネディが掲げた消費者の四つの権利（知る権利・選ぶ権利・参加する権利・意見を言う権利）を享受する資格を与えられるべきである。少なくとも、子どもたちが自覚的にそのような権利を行使することができるような方向に導いていくことが重要であると考える。だが、コマーシャルリズムと子どもの関係をどう認識しておけばよいのだろうか。

FCT子どもとテレビの会編『テレビコマーシャルが子供に与える影響とその克服』（一九八一年）は子ども番組をはざんでその前後に、また中間に挿入されるCMについて調べた結果であるが、子ども番組にもかかわらず大人向けの商品宣伝が流されている（表2参照）。そのことについて、子どもはい

表2 子ども番組のCM—業種別本数・時間量
(1週間合計) —1981—

	CMの業種	本数	%	時間(秒)
1位	おやつ・菓子	311	22.2	5902
2位	家電・精密機器	187	13.3	3145
3位	番組宣伝・映画・出版物	148	10.5	2691
4位	日曜雑貨	119	8.5	2190
5位	ファーストフード	100	7.1	1875
6位	金融・サービス・レジャー・娯楽	99	7.1	2115
7位	玩具	91	6.4	1785
8位	その他の食品*	89	6.3	1635
9位	医薬品・美容商品	69	4.9	1110
10位	住宅・車・家具	33	2.4	630
11位	アルコール飲料	20	1.4	330

FCT子どもとテレビの会編『テレビコマercialが子どもに与える影響とその克服』(1981年)所収の表2「子ども番組のCM—業種別・業種別本数・時間量(1週間合計)」より作成
*は食品の中から「おやつ・菓子・ファーストフード・アルコール飲料」を除いたもの

%。コマercialはちよつと大げさに感じる47%。コマercialを見ていないと、友達の話についていけないことがある28%であった。これは、コマercialに対する子どもたちの受け止め方に関する一つの集約の仕方であるが、こうした子どもたちの受け止め方をより深く追求するとどんな問題が浮かびあがるのか。

みじくも「自分たちが大人になったら買ってくれると思っているんじゃないの」と言う。NHK『放送研究と調査』(一九八八年五月号)「小学生の生活とテレビ」調査によれば「コマercialにはかわいいのやおもしろいがある80%。コマercialを見てみるとそれが欲しくなる2

FCT子どもとテレビの会編の前掲書によれば、医薬品CMが子どもに与えている影響につき米国でおこなわれた研究では「おおむね、医薬品CMを見る頻度の高い子どもほど、①医薬品に対する信頼感が強く、②医薬品の効力を信じやすく、③薬を飲めば直る、あるいは直ったと感じ、④実際、薬を飲む率が高く、⑤人は一段と病気になるやすく、薬をよく使用するものと考えやすい、といった傾向を示す」という。

また、ゴールデンタイム五時〜八時までに流されたCMの一週間の主要四局の総本数は三〇八八本十六時間三八分二秒となっており、この時間帯の週間CM放送量は民放連放送基準の一八%を大きく上回っているという。

おびただしく流されるテレビコマercialのなかで無防備のまま押し流されている子どもたちの姿がみえてくる。こうした状況の中にある子どもたちを守るための動きとして、最近のアメリカの例を紹介してみたい。

アメリカの消費者を対象とした著名な雑誌『Consumer Reports』を発行しているConsumer Unionは、この十年來刊行してきた子ども向けの消費者雑誌『Penny Power』を子どもたちの購買力が近年大幅に上昇したことを理由に廃刊し、新たに『Zillions』を創刊した。八歳〜十四歳までを対象とした少年少女向け「暮らしの手帳」ともいえるべきものである。

今年八月号『Consumer Reports』の読者向けの常設欄で編集部は次のようにその創刊の意図とねらいを述べている。少し長いがその大意を紹介してみたい。

「子どもたちが、誘惑に満ちた嘘の多い広告、学校の授業の中にはいりこんだ宣伝、テレビのショウや映画と抱き合わせにされた商品、有名人のおすみつき商品、一時的な流行にすぎない商品などにうまく対処することを援助する。

子どもたちは大人の言うことは正しいと信じて疑わない。子どもたちは大人の経験を欠いており、かれらを市場としかみなさないごまかしに満ちた仕事をする広告主たちにとつて、いともしやすい目標となっている。

子どもたちは、賢明な消費者として責任ある自立的な市民に成長するために援助を必要としている。親がその鍵を握っている。本誌の読者が、特に優れた自覚を持っており、子どもたちに降りかかる攻撃を打ち負かす非常によい立場にいることは確信できるが、しかし、子どもたちは外部からさまざまな影響を受けるのである。それが次のような学校を必要とする一つの理由なのである。市場がどのように動くものかについて、子どもたちが自立的・批判的に考えることを、適切で公平な教材を用いて教える学校がそれである。

大人もまた、広告主に翻弄される子どもに対して、心を新たににより大きな責任感を持たなければならない。大人は、企

業が学校やその他で洪水のように子どもたちに襲いかかり、しばしば不必要で、長持ちせず、不当に高く、また価値もない商品に対する需要を作り出すことを制限する必要がある。

『Zillions』は楽しい方法で子どもたちに情報を提供するだろう。子どもたちが多くの圧力に対処し、選択をするために必要な情報を提供するだろう。そしてまた、お金をどうやって手にいれるのか、どう使えば賢いのか、などお金の扱い方を今風の言葉で子どもたちに示すだろう。また、子どもに関わる実生活上の問題に取り組み、子どもが評価した品についても報告するつもりである。子どもが責任ある市民たりうするための方法を示すことができるとおもう」云々。

私はこの『Zillions』の提供する情報がどのようなものになるのか注目していきたいと考えている。家庭科における消費者教育の在り方を考えていくうえで、多くの示唆に富む情報が得られそうな気がするからである。

また、このなかでは明らかにされていないが、この雑誌が、学校教材の中に入り込んでいるコマーションリズムに着目しているからである。マクドナルドやニュートラスイート、ポラドイロなどがさまざまな方法で教室に入り込み、極めて巧みに子どもたちにその企業名を意識させ、商品売り込んでいるアメリカの憂うべき現状にメスを入れようとしているのである。

新しい 家庭科を 創るために

中学校では

家庭科の中で マス・メディアに迫る「こころみ

●浜松市立湖東中学校

足立幸代

一、事実を伝えないマス・メディア

一九八八年九月十八日、東京で消費税反対の集会が行われた。参加した友人は「あまりの人出で会場の中へ入れなかった」と言う。しかし、十七万人の参加したこの集会を、私の購読している新聞は、一行も報道しなかった。「天皇陛下ご平癒祈願の記帳に七万人」は第一面に大きく、カラー写真入りで報じられたのに、生活に関わる大問題に対して記帳の二倍以上の有権者が行動したことは無視されたのだ。私は、情報を伝えるはずの新聞が（おそらくその存在が当たり前になっているから、なおさら）、特定の情報を伝達しないために存在することもできる、ということを感じ知らされた。

このことを、授業の終わりに雑談風に話してみたが、ほとんど反応がない。ある一人の生徒は、

「それが私たちとどう関係があるんですか」と言った。中立の立場で事実を伝えるためにある、と思われる新聞が、重大な（誰にとっても重大かという問題はある）できごとを載せないこともある、というのだから、生徒も驚きや関心を示すだろうと何となく思っていたのだが…。

しかし、指摘されてみれば確かに、授業で新聞を始めとするマス・メディアそのものを問題にしたことはなかった。マス・メディアの話は家庭科と関係ない、と思われたのも無理はない。生徒に、授業で習ったことが不変と思わず卒業後も必要な情報を取り入れて自分の家庭生活を築いてもらいた

い、と願ってはいたが、願うだけで、その方法を教えるには至っていないかった。今までにマス・メディアの情報を資料として使っていた授業で、ついでに「情報を受け取る場合注意すべきこと」にもふれていくことから始めよう、と思った。

二、情報はみな事実の一部

次に、私なりに問題点を整理してみる。根本は「マス・メディアによる情報は事実の一部しか伝えられない」ということに思えた。活字にしても放送にしても、紙面や時間は限られているのだから、全てを伝えられないのは宿命のようなものだ。写真ひとつとってみても、前から、横から、上からなど、さまざまに撮ることができ、そしてそれぞれが違う印象を与える④のである。しかし、それが十分理解されておらず、情報と事実を受け手が混同する場合が多い。

この、「一部しか伝えられない」という制約が商業主義に結びつくと、現在多数派になっている価値観への迎合という形で現れる。おしゃれと家事が中心の女性雑誌や、性的なシートの多いテレビドラマのように。また、権力と結びついた極端な例が、戦時中の報道であろう。しかし、良心的な報道姿勢のもとでは、陰になりがちな存在をクローズアップし、真実に迫るものとなる。「一部しか伝えられない」のは、マス・メディアに限らず口コミなどでも同様だ。ただマス・メ

ディアは情報の受け手が多く影響が大きいので利用されやすい。マス・メディア自体もその存続上有利な経済力（一時間のドキュメンタリー製作に二〇〇万〜二〇〇万円かかる⑤）なり権力なりと結びつきやすいのだと思う。

つまり、マス・メディア特有の問題点を暗記させるより、「一般的に間接情報は、事実の一部しか伝えていない」という認識を持たせると同時に、商業主義や権力と結びついた情報に気づくことができる力を身につけさせることが重要だと思われる。そこで、授業の中に、情報が事実の一部しか伝えていないことに気づかせる場面を設けることにした。

たとえば、保育領域では、「子どもを責任持って育てるには、その前の性関係にも責任を持たなければ」ということで、性について考えさせているが、「愛し合っていれば何をしてもいいという考え方についてどう思いますか」とアンケートをとると、「個人の自由だからなんとも言えない」「迷惑をかけなければいいかもしれない」といった答えがかなり出る。「何をしてもいい」という答えはほとんどない。ビデオ⑥で、「中高生がセックスをしてもいいと思いますか?」という問いに、中学生の四八パーセントがイエスと答えているという結果を見せて、感想を聞いた後でこの結果を見せると、

「都会はすすんでる」

「自分はそうしたくなくても、いいか悪いかと言われれば、

学習内容と扱えそうなマス・メディア情報のメモ

領域	学 習 内 容	マス・メディア情報や問題点	気づかせる方法
家庭 生活	家族の生活 家庭の経済	「女性は家事」を前提とした女性誌 不都合なことは知らせない広告 何回も宣伝されるとほしくなる 広告のイメージが商品のイメージになる 宣伝費は消費者が負担している	家事分担の例をあげる 商品を選ぶ観点をまとめ あと広告を調べる 購入動機のアンケート 宣伝にかかる費用について まとめた表
	家庭の仕事	宣伝と知らずに宣伝していることもある	実験で広告どおりか見る
食 物	食品の性質と選択	農家の立場でなく政治家や消費者の 立場からのものが多い これがおいしいというところにふり まわされる	ちがう立場の人の論説を 読み比べる 実際に味わって比べる
	食事作法	西洋中心になりやすい グルメ番組はマナーがいいかげん	他の地域のマナーも紹介 導入に反面教師として使 う
被 服	生活と被服	不都合なことは知らせない広告 カタログでは着心地まではわからない 流行はつくられる	観点をまとめ広告を調べ る くつの傷みの実物を見せて 考えさせる 記事の日付に注目させる
	被服製作	つくる順序など、一つのやり方しか 伝えない	フローチャートで製作さ せる
住 居	住空間の計画	住宅広告に家具を小さくかくことな どがある 住宅も流行がある 実物でないとわからないこともある	家具の大きさを調べる 建売住宅の広告を時代を 追って見る 予想図を比べるロールプ レイ
	資源の使い方	BOD と COD では汚水源の統計も 違う メーカーの立場に立った電気利用廣 告	両方を比べる、分解され ないものはどう表される か考える 「深夜電力」を利用する会 社の労働条件をみる 昔のくらしをふり返り、 電気でなければだめかを 考える
	心身の発達 幼児の生活 発達と環境	「こういうものだ」と思わせる 「母親の責任」と扱いがち テレビが子守りをした場合の傾向	複数の発達記録を比べる 児童憲章などで学ぶ ケーススタディ

いけないとは言えないと思います」

アンケート対象や質問の表現、答え方などで結果は違うことを確認できる。違う立場の情報を示すほかに、体験と比べる、他の時代や地域での様子を調べさせるなどの方法が考えられる(別表)。また、時間があれば、生徒自身に壁新聞などつくらせるとよいと思う。(私の四年前の取り組みの反省。

情報に対する認識を意識した授業をしていなかったため、教師の用意した資料以外で作成した班には、一つの記事なりパンフレットの要約になってしまった所が多かった)。自分が情報を伝える側に立つことで、「一部しか伝えられない」「何を伝えるか、伝えないうかに送り手の考え方が反映される」ことを体験できるだろう。

三、「個人の自由」が社会をつくる

マス・メディア側の殺し文句に、「大衆がそれを望んでいる」というのがある。この論理で視聴率や売り上げが伸びるような情報が肥大し、情報選択のはばが狭められつつある。マスメディアが本来の、情報を伝える役割を果たし続けるためには、情報の受け手自身が、与えられる情報を選ぶという範囲で自由であることに気づき、情報が選択できることの重要性を自覚しなければなるまい。「いやなら見なければいい」「選ぶのは個人の自由」だが、それは解決でなく始まりである。

マス・メディアに限らず、「個人の自由」による行動の集積が社会をつくるのだ。

一番はじめの、「家庭科を学ぶ意義」の授業から、社会とのかかわりを強調することにした。本校の家庭科履修は男女別。「男は学ぶ必要はないと思う」という考えの者が九割以上のところもある。そこを、「家事ができないから結婚しないと暮らせないと、家事ができて一人でも暮らせるけど結婚しようというのとどちらが自由か」などと助言しながら、四〜五人で話し合わせるのだ。さらに、教育基本法の「個人の尊厳」や「真理と平和」と家庭科とのつながりを考えさせる。「個人の尊厳」はわかったが、どうして平和につながるかがわからない、と生徒は言う。

「日本が中国を侵略した時、中国人は劣等民族だから優秀な日本人が支配してあげるんだ、と違ってたらしいよ。ナチスのユダヤ人虐殺にしても、おおよそ民族とか性別みたいな努力しようのないもので人間に上下をつけると、ろくなことにならない。料理や洗濯は、誰かがやらないと生活できないでしょう。家事をするのがダメな奴だと思つてると、絶対みんな平等にはならないよ。それが平和だと思つる?」

こんな話をする、自分の考えは変わらないまでも、納得する。マス・メディアの話も授業の一部として聞けるようだ。今や、マス・メディアと無関係に生活することはほとんど

不可能に近い。現在のマス・メディアには確かに問題点も多いが、否定や「気をつけよう」ではマス・メディアを含む社会の主体としては不十分に思われる。情報を減らさせるのではなく、比較する、立場を変えて考えてみる、といった体験を通して、マス・メディアにふり回されない方法を身につけさせたい。

注①「田原総一郎のニュースの読み方」『面白生活』創刊号カタログハウス 一九九〇年十一月

②志賀信夫『放送』(日本経済新聞社 一九九〇年四月)

③青生舎、ドキュメンタリージャパン制作『性——いま「性」生——を考える』二五分(労働教育センター)

◆参考文献

。佐藤毅『テレビとわたしたち』岩崎書店 一九八六年四月

。井上宏『テレビの社会学』世界思想社 一九七八年十二月

。井上輝子・女性雑誌研究会『女性雑誌を解読する』垣内出版 一九八九年九月

。柿原昌代・児玉篤尚「消費者の購買意識と広告の影響」(愛知教育大学家政学教室研究紀要第二一号) 一九九〇年

。後藤文康『誤報と虚報』岩波ブックレット一九九〇年四月

。藤原彰『戦争の真実を授業に』あゆみ出版一九八八年十一月
。ばばこういち『テレビはこれでよいのか』岩波ブックレット

一九八五年一二月

★'90年Weの会総会と100号記念パーティ

'90年も、残り少なくなりました。振り返れば、いろいろなことがありました。例年のように、Weの会総会を開きます。

Weの会は、We誌と読者の方たちをつなぐ会です。夏にはウイ書房と共催で、夏のフォーラムを企画、開催したり、通信を発行し、各地に読書会もあります。会員の方はもちろん読者の方々、是非Weの会の会員になって、Weの輪を広げましょう。

今年はWeが100号を突破した記念に、総会后、望年会を兼ねて、「We100号記念パーティ」を予定しております。

◆総会 12月8日(土) PM2:00~5:00

於 赤城社会教育会館 2F 教養室A ☎269-2400
東西線神楽坂駅(神楽坂口)下車3分 飯田橋駅下車10分(赤城神社隣り)

◆100号記念パーティ PM6:00~9:00

於 神楽坂エミール(上記会場隣り) ☎260-3251

会費 4000円

尚、「100号記念パーティ」に参加ご希望の方は、11月26日までに下記までお申し込み下さい。

問い合わせ先 鈴木昭彦 ☎03-756-4551・FAX03-756-0014
ウイ書房 ☎・FAX03-326-1380

新しい 家庭科を 創るために

高等学校では

情報を意識的に見る

授業のヒント

●東京都立稻城高等学校

蔵本佳子

情報に対する判断力を持つことが重要だと叫ばれる。本来に必要な情報をその人の価値観で選びとっていく力は、ニューメディア時代に突入しようとする中で特に大切になってくるだろう。

高校の新学習指導要領でも、男女共修家庭科の内容に、「高度情報化社会にむけ適切に対応する能力の育成」として、情報処理や生活情報の活用などが新しく入った。家庭一般では消費者教育の一環として位置づけられるが、「生活情報の現状と望ましい方向について考えさせる」ことをねらいとしている。「マス・メディアの構造」について家庭科教師として理解を深めていくことは今後の必修課題だと思う。

この領域はまだまだ未開拓で、私自身、授業としての実践例にまだ多く出会ったことがないのだが、アメリカにみられるように、商品を選択する際の基準を疑似体験したり、テレビ番組を批判してみたり、広告を実際に作ってみる授業などは、今後家庭科でも取りあげると相当おもしろいことがやれるのではないかと期待している。

メディアのあり方については、さまざまな問題が山積し、一般市民としては、その内部にある実態を知るには難しい状況にあるのだが、表面からだけながめていても眉をしかめることはいくらでもある。そうした表面に出てきたものの報道や情報が、意識する市民の目を通してどう批判されているの

か。これがマス・メディアの構造にメスを入れるための授業の導入になるのではないかと思った。

実は、このとてつもないテーマの実践を書く実力など私にはあるはずもないのだが、ウイ書房のお力添えで各方面での評論や意見、会報などを送っていただき、ない知恵をしぼってどう実践していけるか、そのヒントだけでも書いてみようと思った次第である。そうした資料や本などに目を通し、メディアの持つ力は思った以上に巨大で恐ろしいものであることを実感した。

情報操作や世論操作など国家そのものを動かす武器になることや、言論の弾圧など大きな問題を見逃すこともできないが、家庭科では草の根の批判力を育てるものとして、①人権を配慮しない報道、②無意識のうちに男女差別を温存するもの、③広告など商品やサービスの情報について、どういう判断をしていくか教材研究をしていくと、より具体的に身近な材料からアプローチできると思う。

人権については共に生きるというテーマで、性差別は保育で、広告は消費者教育で、というようにメディア批判はどのような領域でもとり入れられるはずだ。しかもビデオ編集が可能で、視聴覚をとり入れながらの授業はきつと活気づいたものになるだろう。

FCT（子どものテレビの会・市民のテレビの会）の会報「ガゼット」に、NHK番組「おかあさんといっしょ」の中に見る性差別」という特集があった。これは生徒が乗ってきそうな教材だ。人形劇「にこにこ・ぶん」の三人のキャラクターが性別役割意識を見事に演じる様子が細かく指摘されている。

子供番組を批判する視点は、大人の番組よりも客観的に生徒に入っていくのではないか。良識的と思われるNHK番組にも、こうした問題があることを知るのには意義がある。男の子に生活的自立が求められていないストーリーや、決して「わんぱく」にならない女の子のイメージは、幼児番組だからこそ、笑ってはいられない。また民放の子供番組にもしつかりと商業主義が貫かれ、基調となる価値観を親がよほど意識していないと困るものが多い。海外には優れた幼児番組もあるようなので、それらを手できたらさらに生きた授業が展開できそうだ。

性差別ということできらに加えると、四月号に「松田聖子論」を使った実践を書いたが、週刊誌の見出しが山口百恵、松田聖子、さらには二谷友里恵などの人々をどう見ているか調べても興味深い。高く評価される女性と、攻撃の対象とされる女性のはっきり出てくる。その結果、具体例を通じて社会的な価値意識がしっかり定着していくことの危険性を確認

していけるのではないか。

最近、私の中で授業の導入のしかたについて意識革命があり、生徒の目の高さに関りなく近づく作業がまだまだ不十分であるということを感じている。興味関心を何とか引き出す工夫と言っても、やはり講義くさがりが残ってしまったては既成の価値意識をうち破ることはなかなかできない。

生徒から学ぶことはそうたやすいことではないが、彼女たちの日常を意識的に観察することでヒントが得られるように思う。すると、今彼女たちが欲求することとメディアが、実に大きな比重で関わっていることが明らかになってくる。その形成過程を一つ一つ確かめられたら、それを教育の場で行うことは大変意義があると考える。

例えば彼女たちがどんな若者になろうとしているのか、そのために何を欲求しているのか、具体的にどんなモノを選択すればそれが実現されていくのかをながめてみる。要するに流行に対しアンテナをもつことになると思うのだが、そうした行動の基準となる価値は、メディアによってかなりの部分がつくられている。今や清潔であるということが異常なほど求められているが、シャンプー、洗顔料、香料など、明らかに女子高校生がターゲットになっている宣伝は、調査してみればその意図がおのずと理解できよう。

CMについて「ありうる関係のある関係にするために働きかけるもの」と言う人がいたけれど、その商品を購入することで得られるトクをどう表現しているか、またはほまないことで生じる損をどう描いているかを調査するのも興味深い。私の田舎に住んでいた五歳の男の子が、東京に行って「セブン・イレブン」でアイスクリームを買うことを自慢気に話していた顔を思い出す。イメージCMの中から作り出された一つのブランドなのだろう。

特に彼女たちの年代に何を欲求させようとしているのか、若者に人気の高い番組に流れるCMや雑誌の広告から、種類やテーマをピックアップし、購買欲につながるようなものを選び出し、なぜ広告としてそれが優れていたかを分析してみる。必ず企業側が意図する若者像——彼女らの価値観にもなってしまうような人間像——を描いていると思うのだ。そんなものを生徒に引き出させる作業ができれば……。だがメディアは必ずしもかまえて見てばかりいられないので、それを楽しむ面と批判できる面を最初におさえておきたい。

FCTの会報に、ここまでできたらすごい、と思った取り組み、加藤春恵子さんの「ビデオ教育の試み」があった。ゼミでの学生の活動なのだが、男性中心のマス・メディアに欠落していることを番組の会話などから検討し、その結果を生

かした番組づくりに進むものである。

若い女性ばかりの出演者による、ニューステーション番組を作成するその過程で、学生自身が見られる自分と見る自分の中からつくられる「自我」を育て、力をつけていく媒体として、ビデオはとても有効だったと言っている。

高校生にはここまで要求できないと思うが、批判力がどう育ったかをたしかめるために、さらに創作ができるとうい。たとえば企業の価値観をそのままうけついでものではない広告づくりや、多様な個性を追求した高校生向け雑誌づくりや幼児向け番組の脚本など。Weの高齢化社会の特集でマンガを書く実践もあったが、こうした生徒の得意とする分野をフルに生かせる教材も念頭におきたい。文化祭や部活動などの対象にしてもおもしろい。

しかしここまで書いてきた当の私が実際生徒をどこまでひきつけられるか。一番不安なところは、メディアの威力を強調するあまり価値観の押し売りになりかねない点だ。小倉千加子さんの「松田聖子論」を読んでいて感じたのだが、メディアの内側で働く人たちも、プロとして最大限時代を読みとる努力をしている。私たちの気づかない欲望を先どりして、それを最も魅力的に表現しようとする。

私たちは大げさな売り込みに応じるほど単純ではないはず

で、それが時代のトレンドになるには、もともと私たちの中におこりかけた欲望を引き出されることにある。その意味で情報はあらゆる知恵を傾けて提供され、いつでも私達に対し挑戦的だ。松田聖子を売り出すにあたり、あれほどまでに計算して、一つのイメージをつくり出していくとは……。

私は、情報をよむ時、その驚きのワン・クッションがぜひ欲しいと思う。それほど私たちの意識はすでに計算され操作されているということを知った上で、私たちの生活を総合的にとらえた価値判断という方向にもっていったらよいと思う。なぜなら利那主義的であるほど、情報に踊らされやすいからだ。

これは消費者教育の大事な視点にもなるが、「だまされない」を一步進んで「自らの暮らしの価値観によって判断し、自らの生活を社会との関わりの中で創造していきける力」をめざしてこそ意味があると思う。メディアに対する批判力、判断力を育てるといふことは、現代の社会に浸透してしまっただ、またさらに広がりつつある日本の貧困に気づくということ。そしてできるならその貧困をうち破る未来像を描き、投書、要望書のような形で直接大人たちにはたらきかける取り組みをするのもステキだと思う。

今月の読書から

稲邑 恭子

『マスコミと人権』

清水英夫編

◆自由人権協会のジャーナリスト、法律家たちが中心になって執筆した、マスコミと人権の問題を考えるのに最適の入門書である。

まず、序章の「名譽・プライバシーと表現の自由」で、取材される側の人権擁護のための手段に訴えることが、規制による萎縮、あるいは、権力による取材・報道の抑圧を招く危険性にふれつつ、第三者的要素を含んだ調停機関の必要性を示唆する。

第一部「多様化するメディア」、第二部「報道と人権」、第三部「有名人などの名譽・プライバシー」と続き、第四部の「外国におけるマスコミと人権」では、英・米・西独・仏・北欧の、それぞれの国の実情が紹介されていて、興味深い。(三省堂 二〇六〇円)

『犯罪報道の犯罪』

浅野健一著

◆著者は共同通信の記者、「すべての犯罪者は原則として匿名で報道すべきだ」と主張したこの本は、84年に刊行されると、そのラディカルな主張と共に、マスコミの内部からの告発の書として、大きな波紋を呼んだ。

第I章「犯罪報道は私刑だ」では、マスコミの一方的犯罪報道による被害者たちへの取材。第II章「犯罪報道を考える」では、犯罪報道をめぐるこれまでの議論を批判的に検討したうえで、匿名報道主義を展開。第III章「スキャンダルに学ぶ」は、既に匿名報道が定着しているスウェーデンなど北欧のレポート。終章は、いま、何をなすべきか、の提言。

現在のマスコミの実名犯罪報道の問題点として①原理的には、近代刑事手続法の基本原理である「有罪の立証があるまでは無罪と推定」に反すること②司法による刑罰に先行する社会的制裁^{ソシヤル}私刑であること③取材エネルギーと紙面を浪費し、報道機関本来の権力チェック機能を衰退させる、などを挙げている。続編の「犯罪報道は変えられる」(日本評論社)と共に、講談社文庫に収録されている。

(学陽書房 一二三六円)

『「スキャンダル」の記号論』

中野 収著

◆著者によれば「近代の理念はしばしば両義的であった」。第一期(明治維新以降)の近代化で、近代化的な権威の階層構造を作ることに専念し、第二期(第二次大戦以後)の近代化では、「自由・平等原理にもとづいて権威を崩す作業を行なった」。新聞の大衆化と、ラジオ・テレビの日常化は、かつて知識層・支配層のものであったメディアの聖性を喪失させた。知的エリートを範とするようなメディア接触の約束事を無視し、記事の「意味」を読みかえて楽しむ大衆「メディア人間」の出現によって、ジャーナリズムの衰退は必然となった、と。

現代の文明社会は、人と人との直接的な接触の機会を減少させ、その間隙に、メディア・記号・情報を介在させる。メディアを介在させなければ、コミュニケーションできない関わり方のように、限りなく近づいている。

あるべき理想像を想定するのではなく、この現実から出発するとき、筆者の主張は、刺激的であり、さまざまな問題提起を含んでいる。

(講談社現代新書 五五〇円)

▲情報▼

男女必修家庭科に向けて 都各団体の要請行動と 都教委の回答

◆東京都公立高校校長会家庭部会・同高校家庭科教育研究会は、90年八月、次の各項を含む「男女必修家庭科推進のための要望書」を都教委に提出した。

- ・家庭科の施設を保有していない工業高校などすべての高校に、食物実習室・準備室及び被服関連実習室を最低の基準として早期に設置すること
- ・すべての高校に一人以上の家庭科専任教員を配置すること
- ・工業高校など、従来家庭科教育を行っていない高校には、教科開設の要員として、教員定数に特別枠を認め、実施前年より専任教員を配置すること
- ・現在、家庭科の専任教員のいる高校についても、(略)講師ではなく専任教員の配置を進めること
- ・現在、都立高校49校(家庭に関する学科を除く)で認められている班別学習を、さらに拡大・充実させること

◆東京都高等学校教職員組合も、九月二十八日、都教委教育長に男女必修家庭科に向けて要請行動を行った。都高教からは、家庭科、工業科、定時制、都高教男女平等教育プロジェクト、執行部が参加。要請書は次の各項を含んでいる。

- ・都立工業高校で、調理室等の家庭科特別教室を既設している学校名を明らかにすること、家庭科特別室を設置していない工業高校の施設・設備に関しての今後の計画を明らかにすること
- ・(略)一講座の生徒数が四十人というのは、安全の面からも学習の定着の面からもおぼつかない。まして家庭科の実習・実験に不慣れた男子の履修の場合、安全対策に万全を期すことは現場の願いである。そのため班別学習の制度化が切に望まれている。今後班別学習の計画はどのような状況かを明らかにすること
- ・都教委は「男女必修家庭科は四単位でいく」ことを言明しているが、それを真に現実のものとするには、家庭科教員は現在の二倍以上必要になる。家庭科教員増をどのような手立てで行うのか明らかにすること。その際、専任教員の採用計画も明らか

にすること

・新教育課程の「生活一般」の附則にある代替措置を都立高校で適用しなければいけない学校があるのかを明らかにすること。また適用する学校がない場合は、その旨を学校現場に周知徹底すること

◆右の要請に対して、都教委側からは、施設計画課、人計課、高等学校指導部、勤労課、検定課の各課長が回答した。都教委の回答でめばしいものを紹介する。

- ・都立工業高校29校中、調理室・被服室両方の特別教室を設置しているのは3校、調理室のみが6校。特別教室のない20校中、葛西工業、府中工業、荒川工業高校は、改修により、調理・被服の特別教室を設置する予定。まだ17校が未定。
- ・家庭科で二班編成の授業形態は必須である、との要請に対して、回答は「定数上の措置は、家政科等の職業課程のみ」というものだったが、現在四十数校でとっている班別学習の講師時数の措置はこれまで通り、四単位の男女必修家庭科を実現するには、家庭科教師が現在の二倍以上必要になる。平成三年度から段階的に数を増やしていく

たい。だが家庭科だけとびだして人数を配置できない。各校のカリキュラムが固まらないとできない。

・「生活一般」の附則を適用する学校は、普通高校にはない。工業高校でも施設・設備が整えば適用されない。附則の適用がないことは、いずれ出る都の「編成基準」にも明記し、校長等を通し、周知徹底していきたい。

以上

ひと

〈19歳の日記〉 の 金森土岐さん



「十九歳の日記」の金森土岐さん。

京都出身。三人姉妹の末っ子。企業の中で女性差別と闘ってきた母と、塾を主宰し、様々な市民運動を創ってきた父はよき同志で、子どもの言い分を聞いてくれた。学校では、優等生の姉と比べられることに反発し、無気力な周囲にいらだって「つっぱって」いた誇り高き少女。高校へ行きたくないという彼女

◆文部省は本年六月、国会で全国の高校の家庭科施設・設備の保有状況について答弁した。これによると、施設のない学校68校、設備のない学校70校、公私立別、学科別の内わけは下の通りである。

文部省職業教育課「高校家庭科施設設備の保有状況」
(平成2年5月1日調査)

	家庭科施設未保有校	家庭科設備未保有校
公立高校	382	394
私立高校	307	306
普通科	247	247
農業科	8	8
工業科	278	288
商業科	22	20
産業科	14	16
家庭科	0	0
看護科	0	0
その他	3	5
併設校	119	116

に、父が黙って手渡してくれた、自由の森学園校長の遠藤豊氏の本が、思わぬ転機に。

入学当初は、四六時中「自由の森」から離れぬ息苦しさから逃れたくて、外に友達をみつけて遊ぶ。が、最後の一年は、「自分を曝さなければ受け入れてもらえない」寮の生活の中、夜を徹してのミーティングを重ねながら、異なった個性をぶつけあい、関係をつくっていく醍醐味を自分のものにしてゆく。

最初の勤務先をやめたとき、大学へ行くことかと迷った。が「大学は、もう卒業したも同然だろう。それよりも企業や組織を体験するほうが、いまのお前には必要」と、父から助言を受け、現在の勤務先を選ぶ。

セントラルヒーティングの修理会社。初め

は斜に構えていたが、忙しくなって、全体の中の自分の仕事が見えてきて、納得がいく。

外から「自由の森」を見る目は、善意の思い込みと現象面をあげつらう中傷に二極分解する。その周りの目が、重圧となっていた。

いまの生活は、常に生きてゆくことの意味を問い続けていたあの頃とは全く違う。それでも、自分を支えていられるのは、自由の森で充電した三年間があるから、そこでできた友達がいるから、と。ただ、普通の中学を体験した上で、自分から必然を感じて選びとった高校でなかったら、これほどの重みはなかったかもしれない、と。自分をみつめ、考えて、ひたむきに生きる十九歳。

(稲邑)

荒野のバラ

「第九」の季節

—歌に心を—

元熊本市立中学校社会科教諭

田中裕一

1 トロイカは走らず

ある休日の朝を寝過ごした私は、夢うつつの中に突如として響き渡った「リパブリック(共和国賛歌)」の大合唱に叩き起こされた。アメリカ独立二百年祭のライブが流れていたのであった。誰知らぬ者ないこの歌は、移住・独立・南北戦争・マイノリティ問題と幾多の試練に耐えてきたアメリカ国民に歌い継がれてきた。自由と独立を守る歴史の中で生まれ、高らかに歌われ、広い共感を呼んできたのである。

ところがである。ひと度この歌が日本に入るや歌の心はメ

タメタになる。「オタマジャクシは蛙の子」に始まり、小学校教科書は、何と「ロビンフッドにトムソーヤ」とくる。あの「ゆく手はアフリカ・ポリネシア」とは何事か理解に苦しむ。野外教育レクリ用歌詞にいたっては、「タロさんの赤ちゃんがカゼひいた」に始まり、「そこであわててシッパした」とナンセンスソングに終わる。日本の子供に、あの公民権法案デモや独立記念式典で、誇り高く歌われた賛歌に胸を熱くする機会は、ついに訪れないのであろうか。

日本に歌心がないわけではない。美空ひばりの「悲しい酒」に泣いたのは小沢征爾だけではない。だが歌謡の世界でも私情が「国際化」すると怪しくなる。「ここは地の果て、アルジェリア」「あすはチュニスかモロッコか」では、第三世界が納まるまい。途上国は「流離」の地ではないのだ。

「雪の白樺並木」で始まるロシア民謡だってそうだ。愛する恋人と、「地主の横車にむごくも裂かれ」「悲しみにひしがれた馱者(こびと)は頭たれ、はやトロイカは進まず、ボルガの岸辺を」という原詞が、教科書では、トロイカは「ほがらかに」「粉雪を蹴り、「黒い瞳が待つ」「楽しいうたげ」へとひた走るのである。曲と詞が歌心で有機的に結びついてこそ歌であり、その心は確実な訳詞と演奏でのみ伝わる。おいしいメモロディだけ頂いて、詞は原型も止めぬまでに破碎して恥じないし、それが堂々と教科書に登場する時、教科書調査官の存在

は有害無益である。文化輸入は巧みでも、それを生み出すプロセスの陣痛を欠落する点では、議会制度も教育制度も例外ではない。

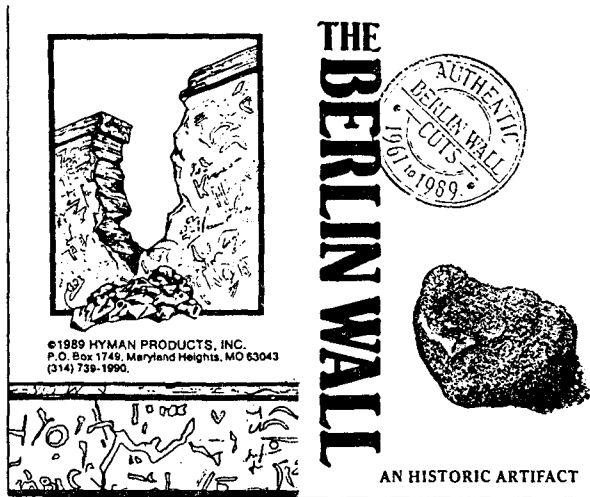
2 「プラーハの春」ふたたび

音楽室から「モルダウ」の合唱が響いてくる頃、チェコでは「プラーハの春」が再燃していた。私は社会学科で、音楽の授業をバトンタッチすることにした。「小さな谷川が合流して大きな流れとなり」とか、「二本のフルートとクラリネット」とかの説明を越える事態なのだ。生徒が、スメタナとモルダウを追跡し始めた。すると「地図帳にモルダウ川がない」「ターボル」「プラーニク」「フス教徒」って何」とたちまち疑問が続出する。学習の中で次の事が明らかになった。十七世紀、オーストリア・ハプスブルグ家のチェコ支配を実現したフス戦争では、チェコのターボル山麓に共和政府を作っていたフス教徒たち（彼等はルターより前に聖書のチェコ語訳を試み、免罪符批判で破門された）が破れ、プラーニク山地に逃れて、そこで祖国のあすへの希望を夢みることになる。以後ドイツ・オーストリア文化圏に投入されるチェコでは、今の地図のヴァルタヴァ川がドイツ語のモルダウに変わる。

一八四八年のチェコ市民革命に参加したスメタナは、「わが祖国」作曲の際、第一曲をチェコ王国最後の「高い城」で始め、二曲目をチェコの象徴「モルダウ」、三曲目に「ボヘミアの森と草原より」、五曲目に「ターボル」、終曲に「プラーニク」を配した。チェコ民族の歴史と自然への限りない愛を歌いこめたと行ってよい。スメタナ生誕（五月十二日）に始まるプラーハ音楽祭が「わが祖国」の全曲演奏で始められ、ソ連戦車が「プラーハの春」を押し潰した時も、スメタナはより深い敬愛で国民に迎えられた。復帰したドブチュク元首相が「わが祖国」と呼びかけた時も、昨年四十二年ぶりにプラーハに戻ったクーベリックが、野外コンサートでチェコフィルを指揮して「モルダウ」に民衆が熱狂した時も、歴史的東欧革命の奔流こそがそのキーワードであった。ここまで来て、生徒たちは音楽室で聴いたのがクーベリックとチェコフィルだった事を思い出し、聴き直したいと言いつ出した。強く聴く―それは新たな感動を子供たちの胸に灯すに違いない。

3 「苦悩をつきぬけて歓喜を」

思えば激動の年であった。昨年から今年への世界的展開は、ドラマティックでさえあった。私の歴史の授業は、本年三月「ベルリンの壁」の破片の回覧で終わった。幾多の人々



「ベルリンの壁」の破片

の血や無念さを吸い込んだ壁が商品化される事の不当さとも、この壁に隔てられた世界の終結を生徒は学んだ。「国境の機能が変わったという深い認識」を、ドイツ統一の式典で、ワイツゼッカー大統領が語った（朝日）九〇・一〇・四付）。国境は国を隔てるものでなく、隣人へのかけ橋となるべきだ、と彼は説く。さきだつ九月二十六日、西独ゲン

シャー外相も国連総会で、ナチスの罪過について責任を明確にし、公式謝罪した。東西両独と占領諸国の間でも、責罪は重点項目として確認されていた。コール首相は、統一後の四日の連邦議会で、ドイツが過去犯した「犯罪」と、「諸民族に与えた苦痛」に言及し、「我々の歴史の最も暗い部分をたえず記憶に止めておくことは、犠牲者に対する責任」と強調した。戦争責任を政治的理由以外に恥じも詫びもせず、満身創痍の検定教科書で消し去ろうとし、行事といえは「君が代民族主義」しか持ち出せぬ日本の政治的未熟さとの次元の違いは明白である。

今後のドイツの苦悩は察するに余りある。西独系—東独系—トルコ系—ベトナム系—ルーマニアからのジプシーと、六百万もの失業者や労働者の序列化でも頭痛の種であろう。だが、ともかくも統一は達成されたのである。

4 心に還らんことを！

一九三三年十一月九日は、ユダヤ迫害の悪夢の蘇る「水晶の夜」であった。昨年その日に、ベルリンの壁は崩壊した。その少し前の十月、東独での反体制デモは連日十万規模になり、ライプチヒ、ドレスデン、ベルリンに市民の蜂起は続いた。東独政府と党首脳は為すすべもなく、一万五千人もの

保安警察隊に実弾を配備、ライブチヒのデモ隊総本部襲撃を計画した。事態は一艘即発の危機にあった。ホーネッカーがこの時エゴン・クレンツを派遣、意見を求めたのは東独国民の信望厚い指揮者クルト・マズアだった。マズアは激怒し、この無様な襲撃計画を止めさせたという。ホーネッカー退陣はこの数日後であった。そして十一月九日、ついに壁は崩壊した。

十一月二十日に、マズアは、ベートーベンの歌劇「フィデルリオ」の上演の際、フィナーレのコーラスで貞節をたたえる部分を「おお自由よ、とうとうやって来たな、もう離さない」というフィナーレに換えて指揮した。

さて十二月は「第九」の季節。本場のドイツでドイツ語の第九を歌おうと必死の市民合唱団があった。歌詞を覚えるのに、「風呂出で詩へ寝る月照る……」とやるのだからすさまじい。

小学校の歌詞では、「花咲く岡辺にいこえる友よ」と平和な事だが、あまり喜ぶのない「喜びの歌」で、やっぱり違う。

十月三日午前零時、ドイツ大統領の統一宣言と共に、「両独」合唱団の歌うホフマン作詞ハイドン作曲のドイツ国歌が流れた。ナチス時代の「世界に冠たるドイツ」の一節を廃し、三節の「統一・人権・自由」が謳い上げられた。前夜はバッハのカンタータが花を添え、ライブチヒ・ゲバントハ

ウスを指揮したマズアが第九を振った。東独最後の惜別、統一・人権・自由への万感胸に迫る第九であった。

昨年十二月二十五日、この同じシャウシュピール劇場での第九は圧巻だった。オーケストラは東西両独、米英仏ソで編成、合唱は両独(バイエルン・ベルリン・ドレスデン)、ソリストはソプラノ(米)、アルト(英)、テノール(東独)、バス(西独)で編成された。指揮がロシア系ユダヤ人のパインスタインとあっては、世界的大逆転ブレイと言えよう。しかも指揮者はシラー原詩の“Freude (喜び)を全部“Freiheit”(自由)に読み換えて演奏した。ベートーベンの心に適う読み換えの、まさに歴史的演奏であった。今、そのCDを聴きながら、“Seid umschlungen, Millionen!”(相抱けよ、幾百万の人々よ!)というベートーベンの魂の熱気が、久々に沁み渡ってくる。ベートーベンが「ミサ・ソレムニス」に「心より出ず、再び心に還らんことを」と書き、「苦悩をつぎぬけて歓喜を」と書いた(書簡一八一五・十・十九)記憶が、今鮮烈に蘇る。

そのパインスタインも、もう今は「い。だが、今年十二月、フライブルグで、統一を記念すべき第九を指揮するのは、日本人女性天沼裕子さんである。世界の歴史は、確実に動いている。

家族と家庭科

職業・家庭科がもたらした

新傾向

酒井はるみ

一九五一年指導要領(試案)のもとで刊行された教科書は、それまでの職業科のなかの独立した一教科という家庭科ではなく、職業・家庭科という合科の形となった。職業科と結びつくことによって、従来の家庭科が変容を迫られたことは想像に難くない。

家族の分野においてもいくつかの大きな変化があった。

まず家族関係の領域に与えた内容の変化である。家族の制度や家族の関係、形態などの家族関係領域に職業(農業を含む)というものがちん入してきたのである。

中学校で強調されてきた家族会議では、従来の家事分担や家庭菜園にかわって、職業の話や将来にむけての選択などが家中で話し合われ、内容豊かな会話が展開されることとなる。就労については「一家の収入を得るためには、父ひとり

たよらず、母も子もそれぞれ働いて収入を得ることが望まし」く、「これからは、男も女も同様に職業に就き、自分の個性や能力を十分に発揮して、正当な収入を得、生活の安定を図ることに努めよう」というトーン of 教科書が少なくなる。

なかには女性の二重役割にふれたものもある。「よく女は職業と家庭とがうまく一致しないという言葉を聞く」が、ほんとうにそうだろうかと考察をすすめ、「仕事に追われていた女子にもっと余暇を与え、人として価値の高い仕事にふりむけなければなりません。私たちは衣食住のあらゆる面においてできるだけ簡単化して行かなければなりません」と解決の方法を示している。

女性の就労については、女性解放の観点から高校でとりあげられたことはあるが、ここではそれとともに両立の問題にまで踏みこんだ。女子雇用者に占める有配偶女性の比率は、六五%をこえる現状からすると、わずかに二〇・九%(55年)しかなかった時代に、先進的な内容であった。

家族の領域では、家族と社会との関係は地域社会の域を出なかつたのだが、「家族と社会」という單元になってからの視野の広がりには驚かされる。たとえば「国の政治や、地方公共団体の仕事は、家庭生活での育児や休養・栄養のためのものを豊かにし、また、毎日の生活を便利にするために行わな

ければならない。そのためにわたしたちは税金をおさめ、議員の選挙もする」と家庭生活と政治を関連づけて展開したり、イギリスなどの「ゆりかごから墓場まで」の社会保障制度や、多くの人の共同の力で営む生活共同組合などの新しい制度やシステムを紹介している。

また、家庭の機能の縮小化を論じ、「家庭に残された最後の任務は……社会の次の時代を担当する第二の国民を養うというたいせつな任務」で、「現在の国家にとって、家庭に対する最も大きな関心事は、家庭をしてこの最後の社会的任務をはたすことのできるような力をもたせることでなければならない」という。

家庭生活を営んでゆく上で政治や政策、自発的互助システムの役割の重要性を指摘したものである。現在の家庭科になじんでいると、およそ想像もできない内容であろう。家庭科のあり方としても、また家族の領域にとっても忘却の彼方におしやるには、あまりにも重要で、しかも現代の家庭生活に必要な視野ではないだろうか。

さて、内容のほかにもう一つ指摘したいのが、家庭をみる見方に新しい視点が登場したことである。「家庭は労働による疲れを回復させる場である」「はたらくことのよろこびは、休息と慰労のよろこびに結びつく。たのしい家庭には、いつも活動と、くつろぎと、笑いとがなくてはならないと思う」

にみられるように、職業とかかわらせると、休息、慰安、くつろぎなどが強調されるようになった。

家庭生活中心の職業・家庭科教科書では、家族の民主化が楽しい家族、団欒する家族、話し合う家族という形で依然としてとりあげられている一方で、都市生活中心や農村生活中心などの教科書では、職業が入りこむことによって、先にみたような休息へと視点が移ったり、民主化と休息と複数になったりするようになったのである。たしかに休息の機能は家庭の重要な機能の一つにはちがいない。

しかし、家族の領域では家族関係を扱いたいという立場からみると、これは家族関係への関心の後退だと思われる。従来家族員間の関係への関心は強かったとはいえず、むしろ集団的なまとまりとしての家族が重視されたという特徴があったことを指摘したが、ここでさらに集団としての家族からも離れ、場としての家庭、零細気としての家庭（厳密には家族ではなくなるが、家族と家庭との区別はそもそもあいまいであった）へと視点が動いている。家庭科における家族の領域の位置づけは一層弱くならざるをえない。今後この傾向は継承されるのだろうか、一つの課題として追ってみたい。

（注）引用教科書は教育文化研究会『のびゆく家庭』第一学年用（教図）など52年〜56年に刊行された六冊である。

なぜ、そんなに
値ぶみされたいの？



(カット 井田裕子)

大学生たちと歩く 小沢牧子

「大学での成績評価、単位認定についてどう考えるか。詳細される側の立場から論じなさい」。こういった小レポートを学生たちに出題することが、数年に一度はある。評価論は、私にとっていつも大きなテーマだ。

十数年、大学で「教育心理学」の授業を受け持ってきた。この領域は大まかにいうと、四つの柱から成っている。発達、学習、人格、評価。この最後の評価の部分には、例の絶対評価・相対評価の問題や、教育評価の意味と方法、学力テストや心理テストをめぐる論議などが含まれる。

どのような学問でもそうだが、自分自身を棚上げにした議

論があってはならない。自分は相対評価で序列化されるのはいやだが、子どもたちには必要だとか、自分は心理テストを受けるのはご免蒙りたいが、やはり否定できないとか、ここどとつぜん飛躍するけれど、原発は反対だが今の便利な生活は享受したいとか。こういう話が肯定されてよいはずはない。それは弱い側・「される」側をふみつけにする、虫のいい論理だ。

そう思うと、評価論をとりあげるときにはまず、評価権や単位認定権を与えられた教師である私と、それを受ける側である学生たちとのこの場の関係をたしかめることから出発しなくてはならない。冒頭の小レポートタイトルは、ここにかかわっている。この足場から、学校における評価一般へと話を広げていくのである。

文系の講義では、語学の勉強をのぞいて、成績評価をすることが問題である場合が多いと思う。ひとつには、講義に教員の思想、立場性がかかっているもので、学生は自分自身の考えをのべる際に、評価を意識して、教員の考えにおもねることが多くなるからだ。ある学生は、「教員という人たちは、ナルシニストが多いので、その考えを持ち上げておけば、優がもらえ、批判的な書き方をすれば不利になるだろうと、容易に推察できる。だから教員に歓迎される書き方をしてあげば、卒業するための単位をかせぐことなど朝飯前ということ

になる……」と書いてある。これでは、成績評価や単位認定を循に、思想を強制する図式を作るだけだ。

学校とは、学生たちが教員の話を一方的に聞かされるのではなく、自分の感性や体験でそれをとらえ直し、ときには共感し、ときには批判しつつ、他の人びとと論じあって、それぞれの学びを積み上げていくところであるはずだ。出席や評価で学びを強制される場所であっていいはずはない。

私自身は、だから、原則的に成績評価はつけない。四月の開講時に「出席は取らず、評価はつけない」立場について話す。単位認定という仕事だけは、大学という場のしくみの上で逃れられないので、止むを得ずしている。ここは私も苦しい。評価をつけなくてすんでいるのは、W大学の場合、成績表に「成績評価欄」と、「単位認定欄」の二本立てが用意されているからだ。前者は「優、良、可、不可」の四段階、後者は「合、不合」の択一である。教員はどちらか一方の様式を選ぶ。私の場合、講義に参加した表示としての年二本の大レポート提出によって、原則的に「合、不合」欄を使ってきたということである。

原則的に、というのは、——ここが悩むところなのだが——「いいね！」と思わず頷くような見事なレポートに出会うと、これまた思わず「優」にすることがあるからだ。「拍手！ というメッセージで優にすることもあるんですけど」

と、これも開講のときに話しておく。すっきりしていないなあ、と我ながら思うが、そもそも矛盾をたっぷりはらんだ評価にかかわる行為のなかで、すっきりしていない部分もそれなりの自然さなのかな、と苦勞しながら自己弁護している。

評価をめぐっての議論では、最近、学生の発言にがっかりすることが多くなった。ここ五、六年という感じだが、評価をしないという私の意図が、実に伝わりにくくなってきたのだ。「やっぱり評価はしてほしいです」「合、否ではものたりない」という意見が出てくる。かつてのように、「大学での評価など野暮です。せいぜい合否が当たり前」という声は明らかに薄れている。果ては「成績評価しないなんて、教員がサボっているという感じがする」という発言まであって、なぜそんなに外側から評価されたいのですか、と強く問いかけてしまう。大学へくるまでの道のりを、点数・成績でしめつけられ、自分のモノ化が身体にしみついてしまったといえ、そこから脱けだし自分をとりもどしてゆくのは、自分自身でしかない。しっかりしてもらいたい、とつくづく思う。

昨年、臨床心理学のゼミでは、私とゼミ員全員の話し合いで、評価を合議で決めた。一年間、皆で面白く活発にできたのだから、年間を通してゼミにかかわった人は全員「優」と。評価をする側される側が、それをさらりと風化する過程を共有できるのも、またたのしからずや、という体験である。

暗い悩み 相談室

諸橋 泰樹

男性雑誌というジャンルが、『週刊朝日』などの一般週刊誌や『中央公論』といった総合雑誌とはまた別に、存在する。一般雑誌は女性の読者も多く、内容的に男女の別なく読める記事から成立しているが、男性雑誌は、男性読者のみに向けられた、女性の読者を排除した作り・内容になっている。女性を排除した内容とはいえ、そこに女性が登場しないわけではない。男性雑誌の中では、多くの若い女性が、画面中でこちらを凝視し、唇を薄く開け、水着や下着姿で、時には全裸で、様々なポーズを取って誘っている。女性雑誌は女性が登場することで成立しているが、男性雑誌もまた女性が登場しないとハナシにならない。ポスター写真は「壁のない娼婦宿」であるとマクルーハンはいみじくも言ったが、この

「男の発想」そのものが、雑誌のグラビアページをなりたたせ、「男性文化」を形成してきたのであり、男性の「女性へのまなざし」「女性に対する意識」を如実に示していると思えてならない。(ぼくたち)男性にとって、これら有名無名の女性モデルたちは、「二次元」(平面)の、思い通りになる、一種の「娼婦」であり、初めての性の導き手であったのである。こういった女性観を醸成し反映する男性雑誌の一ジャンルである『BIG tomorrow』『Do Live』などの若いサラリーマン向けの雑誌を見てみると、実に涙ぐましくもいじましい男たちの「欲望」がたちのぼってき、思わずむせてしまうのだが、「ねたみ・そねみ」の感情、「コンプレックス」や「人のこと」が気になる心性、あるいは他者からの承認欲求の存在や「不運への不安」を自らの中に見出すとき、こういった雑誌を一笑に付せないことにも気づかざるを得ない。これらの雑誌はほぼ確実に次のような情報群からなりたっている。まず一つは「能力」に関して。たとえば『7分間で頭脳に信じられない働きが起こる 四脳分割トレーニング』《このひとひねりが同僚に差をつける 水喜式直感発想術》といった記事や、『マシーンで文字がウマくなる』《ナマケ者の暗記法?! 暗記塾》などの広告。二つ目はこれに関連して「仕事」についての内容で、『人を愉快にする「接待会話」の極意』《今までの坊の時間で仕事が片づく》という記事や

《サブプリミナルテープ 女性も出世も思い通りに》などの広告が、女性の獲得と同等に扱われる現代版立身出世・成功術を約束している。そして「仕事」で「能力」を発揮して、三番目に、《学歴、人脈なくとも大金持ちに》《こうすればキミも儲かります》と「カネ」を得、広告も《聴くだけで「お金持ち」に変身》《ほのぼのレイク》とサポートする。

四番目に、ヤング・サラリーマンの「男」としてのアイデンティティには、「女」が必要不可欠である。妄想の中で相手を自由にできる《袋とじ 淫らな日曜日(ヌード)》・テクニクの《出会って30分後には必ずベッドイン》《徳川性典大鑑の凄い技巧》。しかし、「対」を形成しないと不安なのだろう、《結婚への道》も忘れない。広告は《AVギャルと電話でゲームノ》の一方で《出会いと結婚情報のパイオニアアルトマン》で女性に声もかけられない男性のため恋愛をシステム化するとともに、《セックスなくして男は話れない》ので《*形成外科(泌尿器科)》や《包茎手術のクレジット》、それが厭なら手術不要の《ビガーパンツ》を装着して「男性性」に磨きをかけ、《不二ラテックス》の消費をうながしている。そして五番目はまさに「生き方」の問題で、《面白く生きられる》《悪運を避け災厄を断つ鏡式アストログラム、秘密のやり方》《努力が足りないでも、この裏ワザを使えば願望がかなう》などの記事や《あなたが変わるヒランヤの奇

蹟》《男性のための性格教育法》《男のカラダをデザインする!!》といった広告がある。

ぼくは、このような、マニユアル的で、女性差別的でペニス至上主義で、ラクをして仕事をし金を儲け、他者から認められたいという、噴飯ものでありつつもうら悲しい記事や広告をみるたびに、村上春樹『一九七三年のピンボール』の主人公の奇妙な翻訳事務所での実に雑多な翻訳依頼の仕事と、姿・形の見えない依頼主に対する想像シーンを想い出す。おそらく、こういった雑誌を毎月心待ちにし、(その通りにはないにしても)実践する男性読者も、彼女をオルガスムスに至らせられずにベッドで萎縮しているのかもしれないし、見積り書を間違えて上司に「物憶えの悪い奴め!」と怒鳴られたり、借りてきたアダルト・ビデオを見終わったあとの空しい時間に、明日の職場の人間関係がうまく行くかバイオリズムを見て占い、明るくふるまうスキル(術)を頭に叩き込んでいるのかもしれないし、包茎手術を受けないと一生結婚できないのではないかと深刻に悩んでいるのかもしれない。

そう思うとぼくは、女性にのみならず男性にも求められている、演じるための外観をとりつくるマニユアル文化に、大きな敵愾心を持たずにいられない。ぼくは長く女性雑誌をツールとして分析してきたが、男性雑誌もまた、男性学のための恰好のテキストとなるのである。

私の朝鮮史

岡 百合子



北京のアジア大会で、北の共和国、南の韓国双方の応援団が熱い交歓をしたとき、人びとは涙を流しながら「アリラン」の歌をうたったという。アリランは、朝鮮の代表的民謡である。

アリラン アリラン アラリヨー アリラン峠を越えて行く 私を捨てて行く君は 十里も行かずに足が痛むという歌詞ではじまるアリランが有名だが、実はこれ京畿道(ソウルを中心とする地方)のアリランで、他にも「江原道アリラン」「密陽アリラン」「珍道アリラン」等、ちがう旋律や歌詞をもつアリランがある。

アリラン

草野妙子氏のすぐれた著作「アリランの歌」(白水社)によれば、それらはそれぞれの土地固有の節廻しで確固たる「民謡文化圏」をつくっていて、とても一つのアリランで朝鮮の民謡を代表させることなどできないという。

アリランという言葉の由来にも諸説あって、最も古いのは、古代新羅の始祖、朴赫居世の妃、閼英の徳を

讃えてうたったという説。近代では、李朝末、大院君が王権強化のため王宮再建の大工事を起したとき、苦役を強いられた農民たちが、「我難離」^{アナルリ}、我らの難儀を解き放してほしい、とうたったのだ——等々。勿論単なるはやし言葉だという人もいる。

草野氏によればこれは労働歌で、前半の「アリラン アリラン アラリヨー」の部分は、大ぜいが力を合わせるためのかけ声としてうたい、後半は一人ずつが即興の歌唱で独唱、その間人びとは手を休める。日本の「木やり」などと同じ、仕事の効率をあげ、苦しさをやわらげる役割をもったという。後半の歌詞は即興だから、その時どきの心情でどのようにもうたわれた。日本の植民地時代、アリランは民衆の抵抗のシンボルにもなったのである。

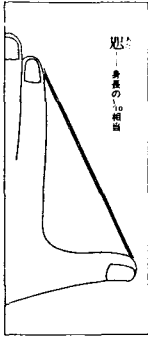
かって私が胸ふるわせて読んだ朝鮮人革命家の伝記(ニム・ウエイルズ著、みず書房)の題名も「アリランの歌」であった。その中で革命家金山^{キムサン}は言う。「我々の間には、この古いアリランの歌に新しい一節を加えたがっている人がいる。でもその最後の一節はまだでき上っていない——」と。南北の間に立ちはだかる「アリラン峠」を越え、この、朝鮮人本来の、明かるさと哀しさが一体となったメロディを、「新しい一節」でうたえる日。その歌声がいま、未来から響いてくるのが聞える。

食器と食具

料理は器によってもそのよしあしが左右される。私は古い食器や食具が好きで、古道具屋で手ごろなものをみつけてはいそいそと買い込んでくる。古い伊万里の重量感、輪島の塗りのつややかさなど、いつまで見てもあきないのは、長い間、使い込まれ、いとおしまれてきたからであろうか。

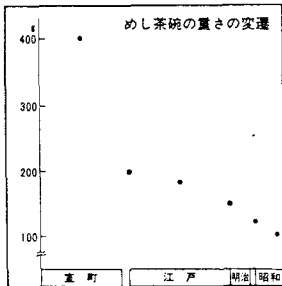
私が好きな本のひとつに秋岡芳夫氏の「食器の買い方、選び方」(新潮社)がある。これは、実用書の域をはるかに超えて、食器とは何か、また、人と食器とのかかわりを、美しい写真とわかりやすい解説で教えてくれる。今回の食べもの文化史は、この本の内容を紹介しながら、食器と食具について考えてみたい。

氏は冒頭に次のように述べておられる。「単に食べやすいだけでは、いい器とはいえない。食器は、それで食事をする人だけでな



く、運ぶ人、洗う人、片付ける人、みんなにとって使いやすいのがいい器なのだ。使いやすさを決めるのは、体と器の関係寸法。器同士の関係寸法、動作と器の関わり方、その他いろいろ」と。

わんの決まり寸法、口径四寸(12センチ)、高さ二寸(6センチ)は、片手にすっぽりはいって食べやすく、洗いやすく、つくりやすいのだそうだ。「箸一咫半」ということわざがある。これは、手の指が尺度となっているわけで、めいめいの個人差を認める考え方がおもしろい。つまり、人間のからだを基準とした身度尺にあわせて、食器や食具の大きさ、形、長さ、高さなどは決ってきている。重さについてはどうだろうか。時代とともに軽くなる傾向がみられ、現在好まれる飯わんの重さは一〇〇グラムだという。食卓の変遷をみれば、箱膳、ちゃぶ台、テーブルへの移行(下表)は家族のあり方をうつしだす鏡と考えることもできるであろう。



メディアの中の性差別を考える会

〈斉藤正美〉

昨年十一月、地元紙に性差別意識の強い記事や性別分業意識を押しつける記事が目立つことに憤りを感じ、富山県内で女性問題に関心を持つ人々に呼びかけ、会を結成した。大学・専門学校の教師、女性史研究者、編集者、コンサルタント、自営業、翻訳者、ジャーナリストなどさまざまな分野の女性と男性が富山という一地方におけるマスメディアの現状を性差別社会を批判する視点から検証し、報告書の出版を予定。

報告書では、地元新聞の連載記事やコラムから性差別の地域性を洗い出したり、記事を女性蔑視、性役割分業、性の商品化のテーマ別に調査分析し、また全国紙と地方紙の読者欄や論説コラム、特定記事を通じての比較、それに自治体広報紙の「誕生、結婚、死亡」欄が個としての女性を尊重していないことなどを指摘したいと考え、現在執筆中。

また、地元テレビで若い女性の裸が溢れるCMの放映に抗議したり、地元新聞（世帯普及率60%以上）の一面トップで掲載中の特集企画「平成流バランス感覚」が、企業社会の論理を尊重し、女性にはよき職業人かつよき家庭人という二重負担を押しつける論調を展開していたので、担当者と話し合える機会を持つなどの活動を展開している。

連絡先 〒833 富山県高岡市鐘紡町1-9 斉藤方

☎0766-23-3929

自己紹介のうぶくぐりイキイ

FCT 市民のテレビの会

〈新開清子〉

一九七七年に発足して十年間は、「子どものテレビの会」として活動してきました。十周年からは、FCTのCを子どもと同じに市民（Citizen）と読みわけ、「市民のテレビの会」と併称することにしました。子どもの問題だけではなく、国民の電波を使って流される情報に、市民として対応することが必要という認識に至ったからです。テレビのある環境をどう生きていくか、を問い続けるために、年四、五回の公開フォーラム、年四回の情報誌「ガゼット」の発行、そして一、二年に一度のテレビ分析調査の実施を主な活動としています。

会員は全国にはぼ一五〇名。大学の先生、研究員、放送関係者、主婦、学生など、女男四割六割位です。事務局スタッフは約十名。今年は「テレビが描く外国」というテーマで現在分析調査をすすめており、来春までには報告書にまとめる予定です。いまテレビについて積極的に考えたり、発言したりする「こだわり派」は減ってきています。幼児期からテレビとともに育ち、テレビに疑問をもつという発想そのものが失われがちの中で、「これでいいのかな」という問題提起を続け、どういう情報を望んでいるのか、視聴者市民としての発言をすることが大切、と考えています。

連絡先 〒240-01 神奈川県葉山町長柄1601-27

代表 鈴木みどり ☎03-721-8694

'82年の教育課程改訂にむけて その4

共学「家庭一般」2単位を入れるのに、先に述べてきたようなやりとりを、何度となく繰り返して、一・二年では、他教科の必修単位が多くてどうしても入らない。三年なら何とかかなりする原案ができるころまで漕ぎつはた。「家庭一般」はできるだけ低学年がよいことはわかっている。特に、共学「家庭一般」の食生活の部分と、三年の選択「食物」をどう調整するかという問題もあった。女子だけで一・二年におくか、冒険ではあるが、共学導入のために、三年でもよしとするかについては、かなり迷った。もう一人の年輩の家庭科の先生は、三年に入れることに難色を示した。文部省が共学の家庭科を決意するとは、夢にも考えなかつた時点で、少々不満足なことや、問題があつても、この学校に共学を導入するのは、今より他にあるまいと私は判断をした。

これだけ学校の中で揉むと、教文会

議を中心に、私共の主張していることを理解してくれる職員もかなりいる反面、頑固に反対をし通す人たちもいた。校内の婦人部の人たちには、それとなく根回しをすることもあつた。

'81年の二学期も押しつまって、県へ教育課程表を提出するギリギリの日程になってからは、月水金と、週に三回も職員会をすることがあつた。大勢で大切なことを決めるときには極力論議をし、大方の人の意見がほぼまとまるのを待って、決定するのがよいとはわかつていたが、時間のなさと、意見調整が難しいこととで、最終的には投票で決めることになつた。

司会者が、一票でも多ければ、多い方へ決定する旨を伝えて投票に入つた。その結果は何と一票差。こうして共学「家庭一般」三年への導入が決まつた。多数決の原理は、一票差であつても多い方に従うものだが、このあと、反対派がいつまでもくすぶつて、職員間がぎくしゃくした時期があつた。当の私は、これだけ議論をつくして駄目なら、次の機会を考えられないと思つていたので、この決定が反対になつたとしても、それほど落ち込むこともなかつたろうと思ふのだが、日本人の民主主義の底の浅さは、職員会の余波を、日常生活にまで引きずり込むという、苦い経験も同時に味わうことになつた。

19歳の日記

金森土岐

「給料日」

給料日。私は気が大きくなる。ラッシュの電車にもまれて駅に降り立つと、何を買おうか考える。家の中の雑貨を頭に思い浮かべながらデパートへ向かい、あれやこれやと手にしてみる。そして、そろそろ持ち切れなくなつた頃、レジへと足を向けかけ、ふと立ち止まる。「ちょっと待て」心の中でストップがかかる。手の中にあるものをひとつひとつ見詰め直し、ひとつ、またひとつつねへ戻していく。本当に必要なものかどうか考え直しては商品を返していくと、残る数はほんの二、三個。私が初め買おうとした数の半分にも満たない。「あれば便利」というものは極力買わない様になっているのだが、

それでもデパートには誘惑が多すぎる。眺めていれば欲しくなるものばかりがこちらを見つめている。

最終的に残つたものを買って外へ出ると、「誘惑に勝つたぞ」という気持ちで何だか嬉しくなってしまう。昔からお金はあればあるだけ使つてしまいがちな性分だったが、自分で稼ぎ、自分で生活するようになり、自分の自由になるお金を手にするようになった途端、お金を持つこと、買い物をするのが怖くなり、慎重になつていった。さっきまであつた一万円札が気が付くと五千円札に変わり、千円札になつている。財布はみるみるうちに空っぽになつていく。一日三食の食費と雑費。毎日使わなければならぬお金はそれまで考えもしなかつたほどだ。とにかく、お金は持ち歩かない。少しずつ銀行からおろし、「これであと何日銀行へは行かない」ことを心に決める。

たまに遊びに行く時は別として、そつとやつて大雑把にでも使う額を決めてやつてみると意外とお金が残つていくことに気が付いた。家賃や光熱費は仕方ないにしろ、普段の生活はいくらでも切り詰めることができるんだなあと思う。

服や靴や化粧品や、同じ年頃の女の子が欲しいがるようなものは、やっぱり私も欲しいと思う。かつかつの生活をしている私にそんな余裕がないのが現実だが、少しずつ貯めていったお金で何かを買つた時の喜びは人一倍大きいだらう。いい品物や高いものは買えないにしろ、私は質素でも豊かな生活を送りたいと考えている。自分の生活を豊かにしていくのは、たくさんのお金でも物でもなく、自分の毎日を過ごす姿勢と僅かでも一生命働いて手に入れたお金だと改めて感じる事ができたように思う。

反天皇制からフェミニズムへ (1)

ぼくが、いわゆる旧来の左翼の、あるいは、運動のもつ硬直性にとってもこだわるのも、実はぼく自身が男の論理に染まっていたというか、男そのものだったからかもしれません。

というのは、たとえば、ぼくが『We兵庫の会』に出入りしたときに、それまであまりにも「反天皇制」ということばが前面に押し出されるような集会などに入りしていたために、ああ、なんて女の人は、ささいな事ばかり言っていて物事を決めるのに時間のかかる存在なんだろうと思ったからです。そして、この人たちは天皇制のことをどう思っているのだろう、天皇制に疑問も持たずによく運動なんてやっているなあ、と今から思えばとても思い上がった感じ方をしたものでした。でも、そのときは気付かなかったけれど、女性たちは、日々「天皇制」とむきあっているんですよ。家庭のなかで、職場のなかで、そして男社会に対して。

ぼくが、大今さんの本を売り込みに行ったりでちよくちよく通いだした大阪YWCAに、「若衆

広がる運動

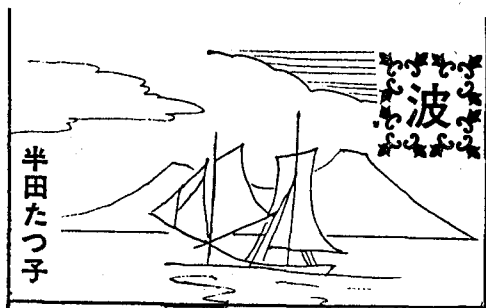
■中村英之 広がる人の輪

連」という、同会の比較的若いスタッフで、反戦とか平和とかを考えて活動しているグループがあります。その中の、Kさんという、在日韓国人でとっても明るい元氣な女性が、ぼくが考えていた「活動家」タイプと全く正反対に、あまりにもいんな運動をあっけらかんとやりまくってしまうので驚いたのです。

どこからそんなエネルギーが湧いてくるのだろう、そしてそれにもまして、運動をこなしているときの彼女の、他者に対する余裕と優しさはいったい何なのだろう。バザーや集会の準備の合間にも、YWCAに来て知る知恵遅れの子どもや、たまたまそこに居合わせただけのぼくとかに声をかける心の余裕は何なのだろう。そして、自分の知らない問題や運動に対する好奇心と柔軟な対応は、天下国家ばかり論じていたように思っていたぼくを圧倒したものでした。

そのKさんが、あるときぼくに、なぜ男なのにいわゆる「女性問題」に興味があるのかを尋ねたのでした。ぼくはそのとき、一番自分がそうだと考えた答をしたのです。「ぼくははなんてん（反天皇制のこと）からフェミニズムにいきました」と。

たさんの「ありがとう」



奥田暁子さん、お手紙ありがとうございます。十一月号「波」を読まれて、私が夫の死を「真正面から受止めて一歩踏み出して」いると思われたのですね。「さすがだと感心」して下さいたのですね。でも、それは違うのです。あの原稿は、夫がまだ生きていた時に書きました。初校が出てきた時には彼はもういませんでした。私は一部に手を入れ、すでに彼が彼岸に行ってしまったことを明らかにしただけです。彼の生前に書いた文章には、当然感傷が乏しく、それを「一歩踏み出している」か

のように読んで下さったのでしょ。

現実の私は、毎朝夕、夫の遺影に向かって「何故こんなに早く死んじゃったの」と語りかけては、大粒の涙をこぼしています。泣けば泣くほど、彼の心に寄り添えるような気がしているのです。たさんの楽しみをリタイア後に回して、本当によく働いてきた彼の無念さを、分かちあえる気がするのです。

そんな時、武末久子さん、あなたの言葉が、どんなに助けになることでしょう。「健気に振舞う必要は何もない。メロメロになればいい」との言葉です。あなたは七月末、危篤に陥った夫を見舞って下さって、「こんな時、誰も知らないうちにすうっと息を引き取られることがあるけれど、万一そんなことがあったとしても、決して御自分を責めないで」ともおっしゃいました。この言葉ほど大きな救いはなかった―夫の最期は、まさにその通りでしたから。

死の数日前、不思議に以前の夫がもどってきました。私は半年振りに二人で声を合わせて笑う時を持ってました。死の前日、娘夫婦が子供を連れて見舞い、一週間後の保育園の運動会に、その子がひよこ組からたった一人、あひる組のお兄ちゃん・お姉ちゃんと一緒に

走ると話すと「うん、聞いた」と微笑んだそうです。「まやは、握手してきたのよ」との電話に「それはよかった。ペバはうれしかったでしょうね」と喜んだのでした。

その夜は、下の娘が私に交替して泊まってくれました。翌朝帰ってきて「ゆうべは割に静かに寝てくれて楽だった、帰る時『マーチヤンは今日来てくれるかな』と言うから『来るでしょ』と返事したよ」「そう？　じゃあ、原稿がんばって仕上げなきゃ」と話し合いました。

日本生活学会から頼まれた原稿は、九月三日が締切りでした。夫の病状を話し、遅れるかもしれないことをお断りはしていましたが、編集の仕事をしながら締切りに遅れたくなかった。でも原稿が書けるのは、娘が泊まってくれる夜だけという日々、原稿は遅遅として進みません。二九日夜に仕上げきれなかった分を、もう少し、もう少し、と手を入れて時間は飛ぶように過ぎました。外は台風もよいの雨風で、出かけるのをちょっとサボリたくもありました。

「もう今から行くのも、ね」など話して、あい変わらず原稿をいじくり回している時、病院から電話があったのです。あんなにいつも

そばにしていたのに、数日來の穏やかな状態に、油断もし、台風をいいわけにサボリもしたので。一番肝腎な時に、私はそばにいてあげられなかったのです。

子供たちが小さかった頃、高い熱を出しているのにその子を置いて職場に出かける、あの胸の痛みは、今思い出してもキリキリと締め付けられます。仕事を大事にした私は、子供の病気に目をつぶり、夫の死に目にも会えなかった——これは言葉で表現不可能な痛恨事でした。武末さんの言葉がなかったら発狂したかもしれないと思うほどに。

小沢牧子さんは二度も病人を見舞って下さり、一度目は、意識のない彼の手を握り、語りかけて下さいました。次の時は、彼が苦しんで大声でうめいていたので会われませんでした。末期の病人の状況をよく知って、何かと私を励まして下さいました。「どうしていらっしやる?」と旁りに満ちた声に、私は息を引き取るその瞬間に立ち会えなかった辛さを訴えました。言葉にすれば涙が溢れるので編集部の人たちにも話せないでいたことです。小沢さんは「おつれあいはい、あなたが大好きだから、あなたにいつまでも御自分のことを思っていてほしいのよ。すべて万全、こ

れ以上のことはできない、って時は、もしかするとすうっと心が離れるのが早いかもしれないじゃない?」と言って下さいました。

また翌日、電話で「死って、呼吸が止まるその瞬間を指すのだろうか? 七月末に一度危篤に陥られた後、二月も生き続けられた。そして二度目にうかがった時の状態はほとんど『死』に瀕しておられたように思う。そこからまた蘇って、笑っておだやかに話し合う数日をもたれたということは、本当によく頑張られたのだし、あなたはたとえ、その瞬間に立ち会えなくても、既に十分その時を共にされたのよ」と言って下さいました。

小沢理論に飛び付いて、自分を許そうとはしていないけれど、こう言って下さる友をもつ幸せは、私の慰めとなりました。ありがとう、小沢さん。

岡百合子さんのお手紙に「最後に命の交歓の時を持たれたことを、美しくも羨ましく思います」とあって、私の背筋は初めてしゃんとしました。岡さんのひとり子、真史君の自死は、私なりにずいぶん考えてきたつもりだったけれど、看病をする時を持たずに最愛の人と別れる、残された人の悲嘆には思い及ばなかったからです。ありがとう、岡さん。

お通夜の儀式の後、娘の夫のクレイが「半年の間お父さんを思う度に、私が思い浮かべてきた詩があります。それを今ここで読み上げていいですか」と断って、低い力強い声でディラン・トマスの詩を朗じてくれました。夫が「気のいいヤツだ」と愛していた彼は、義父からプレゼントされたワイシャツ・ベルト・くつ下まで、すべて身につけて儀式に臨んだのです。ありがとう、クレイ。

お通夜、お葬式をすませ、家に帰ろうとした時、木犀の香りがただよって来ました。毎年、初めてこの香りをかいだ日を覚えているほど私の大好きな香り。木犀まで夫の死を悼み、私を慰めてくれているのでしょうか。ありがとう、木犀。

毎日、福知山から柏崎から藤沢から……美しい花が届きます。花に囲まれた夫は、柔らかな微笑んでいます。彼が丹精してきた庭を、私は半年の間に荒らしてしまいました。夫が咲かせてきた大輪の菊が、今年は見るともなげないけれど、私の友が彼を花で包んでくれます。ありがとう、大勢の友達、そして書ききれなかった沢山の方たち。こらえきれない悲しみは、溢れる感謝と共にあったのです。

◆ 親業訓練をめぐる ◆

親であるということ

早川 裕子

小沢さんと六本さんの間に交わされてきた、親業訓練論議に、私も外野席から参加してみたくなって、ペンを取りました。お二人のキャッチボールを、多くの人による円陣バスの広げていけたらいいな、と思って……。

私がこの親業訓練に興味をもって取材をしたのは、もう十年も前のことになりました。当時、この新しい、親のための教育実践は、アメリカから渡って来たばかりで、日本でも旋風を巻き起こしながら広まり始めていました。「冗談じゃない、それぞれ個性的であっていい親子の間に、こんな画一的会話の押しつけなんて……」と、最初は反発から首を突っこんだのですが、取材を進めるうちに、いろいろんことがわかってきました。

この手法のバックボーンとなっている親子観は、親リブを目指すものでした。「親たるもの、こうあらねば……」などという言葉は一切惑わされる必要はないし、親の権威なんてものはむしろぶちこわさなければいけない。子どもの行動に対しても一貫した態度でのぞめなくていいんだし、両親が常に同じ考えや姿勢で子どもに接する必要もないんだと。

六本さんを含め、育児に悩む若い母親たちが、この言葉を読んで心からほっとする気持ちにはよくわかります。

さらに、親が仮面をぬぎ捨てて一人の生身の人間として子どもに接し、子どもをも、一人の人間としてあるがままを認めて、共に成長していこうとよびかける育児観には、私の

みならず賛意を表する人は多いと思います。が、これだけならば、他の多くの育児書や教育書を読むのと変わらないのですが、親業訓練がこんなに多くの人をひきつけたのは、「じゃあ、どうしたらいいの？」という大方の疑問を一手に引き受けて、具体的な方法のことこまかに示し、しかもそうできるようにするための実地訓練まで実行している点にあるのでは、と私は考えます。

ところがふしぎなことに、こうなってくると、私にはどうしてもついていけないようになってしまふのです。

一番ひっかかることの一つは、例えば、小沢さんも指摘していらっしゃるような、親子の会話のありかたを導こうとしている点です。ゴードン氏は、娘に「小さいとき女の子のどういうところが好きだった？」ときかれて、「男の子に好かれるには、自分に何が必要か考えているみたいだね。違うかい？」と応じ、あとで「もし自分が、小さい頃にどういう女の子が好きだったか話してやりたい誘惑に負けていたら、私は娘の助けとなる機会を失っていたと思う」と言っています。

でも、娘のこの質問に対してこんな答え方をしている父親なんて、私はマッピラです。たと

えどんな気持ちから出た質問であろうと、娘のきいたことにはちゃんと答えてくれた方が、ずっと好感がもてます。

それにもし、本当にこの質問通りのことがききたい場合だったら、とんだお笑い草。「ナニこの親、ちょっと勘ぐりすぎじゃない？」でなことになる。まあ、でもそのときの娘のようすや表情で、その辺のことはわかるでしょうから、もし私だったら、その質問には答えた上で、何かくたくくありげだったら、「どうしてそんなこときくの？」とたずねるだろうと思います。

いずれにしても、こんな父親のどこに、ゴードン氏の提唱する「生身の人間の姿」などがあるのでしょうか？ 百歩ゆずって、本当にこの場合彼の応答のしかたが娘の助けになったのだとしても、異性に好かれることを目的に、行動のしかたを変えるなんていうことが、果たして本当に娘にとって望ましい生き方なのでしょうか？

六本さんが体験された、子どもとぼろしの例もよくあることで、私と娘の間にも、ずっと昔あったような気がします。そのとき娘のいやがる理由は、「帽子をかぶるとよけい暑

い」というもので、暑苦しい時に身につけるものが一つ増えるのですから、それもわかります。じゃあ、かぶらないで行けばどのくらい暑いか、かぶった方が果たして暑いのかどうか、実際に体験させたような記憶があります。

子どものことで悩んだとき、小沢さんがおっしゃるように、まわりの人たちと話し合っ

て救われてきた部分もあるけれど、やはり最終的には、自分自身、それこそ生身の人間

と想いますが、「能動的なきき方」なんて、ほとんどしていません。子どもの言うことを誤解しては正され、時にはけんかしながらも、生きた人間同士たる親子の会話に、親業マニュアルなどは介入させずにきました。親であることを職業とわりきるなんて、やっぱり私にはできなかったと、二人の娘が成人したいま、思います。

体験の場が少なく、情報ばかりがやたらとびかっている現在の育児環境の中で、育児に迷う親たちが、親業にすがりついていく気持はわからないではありません。が、この際親業からも解き放たれて、もっと自分自身に自信を持って、と、ただ今育児中の皆さんに叫びたいのです。

「親業」とつきあってきて

六本美代子

小沢さんとの「親業」論議が、キャッチボールにすらなりかねている気がしてきて、あきらめかけていた私でしたが、新たに円陣バ

スに広げていけたらいいなと仲間入りしてくださった早川さんの登場に元気づけられ、今一度書かせていただきたくペンをとりまし

た。

前回の子供と帽子の話、早川さんも言及しておられるので、またそのことにふれて書いて見たいと思います。自分の例なので「私の気持ち」については一番よく分かっているのですが、たまたまお二人の方が夫々に「親」の私の気持ちを斟酌して、色々言ってくださったことに對し、いずれも「違いなあ、私の言いたいことがちっとも伝わってないなあ」という印象を、正直のところもちました。當時の育児にくたびれはてていた私だったら、そうした先輩方の御意見の前にうなだれ、とはいえちよつとしたことでもたいいらししてしまう自分をどうすることもできないまま黙るしかなかったと思います。そしてこれは、実際私が講座の中で出会う平均的な親の姿と重なります。

私は確かに悩める親、育児を楽しめない親でした。悪いことに、自分の子供の頃を思い浮かべ、ああそうだった自分の親のやり方をまねることすらできないのです。何故なら小さい頃からどれだけ親に反感を感じたか知れず、ついには心のうちはあまり親に見せまいと思うに至った、親から見たら手の焼ける娘でした。生意気にも、あんな親にはなるまい

と思っていたのに、さあわが子が何かにつけ「いや」と反発するに及んで、どうしたらいいのか途方にくれてしまったのでした。娘の「いや」に困り果てる私を弁解するつもりはないのですが、娘が何でも思い通りになればいい、と思つて悩んでいたのではないのです。その反対に、自分の考えをもち、自分でどうするか決められる、自立した子に育つてほしいと真剣に願つているつもりで親でした。ただ気がつくと、娘の「いや」を前にしてにっちょもさっちょも行かなくなる私がいたのです。

ここで問題なのは、もはや帽子をかぶるかぶらないではなくなつていくということをかかつていただけででしょうか。今までは何でもこちらの言う通りについてきてくれて、ここにこしていられた幸せな親子だったのが、まるで勝つか負けるかの戦いの様相を呈してきたみたいなのです。おもちゃの片付け、テレビの見方、寝る時間、お風呂に入るか入らないか等々、「だめっ」「……しなさい」と少し強く言さえすればよかつた間は難なく過ぎていたのに、それでは取まりがつかなくなつてきた、一体なぜこんな厄介なことになつてしまつたのか、情けない思いで一杯になり

ます。

わが家ではそれを見たおばあちゃんがまずこう言いました。「あなたの小さい時は、もっと素直だったからちっとも困ることなんてなかつたのに、この子ときたら全く大変ねえ」と。「今びしつとしておかないと、これから先が大変」といつてくる隣人もいます。小さいうちはお尻をぶつことも必要だとか、やさしいお母さんは結局子供をだめにするとか、どちらかといえは親の私の気持ちを楽にさせてくれる情報は少なく、不安を増すことばかりなのです。勢い子育ては閉じこもりがちになつてしまふのでした。

そんな時たまたま書店で見付けたのがトマス・ゴードン博士の本でした。見慣れない「親業」の文字の上に赤字で小さく「親に自信を与える」とあつたのが目を引いたのかもしれません。ゴードン博士の育児観については早川さんが書かれてある通りです。一読して、私はどんなにほつとしたことでしょうか。「能動的聞き方」を勇気をだしてやってみることで、娘の「いや」の前に途方にくれることはずいぶん少なくなりました。そして彼女には彼女の思いがあることを納得しました。ちよつと一呼吸して命令するのをやめ、

「わたしメッセージ」で娘の行為がどんな影響を私に与え、私が困ってしまったているかを伝えられた時、娘が思いがけない理解を示して態度を変えろといったうれしい経験もしました。親の私が自分に正直に、相手に正直でいようと努力したり、そして何よりも子供が私と同じ人間であることを忘れないことが大切だなんて、そんなこと頭ではとくに分かっていたはずでした。でも実際には絶間なく指図したり批判したりすることで、子供を動かそうとしていたということがよく分かりました。

従来のやり方をやめ、それに変わる新しい表現をしようとするのは、例えばそれが自身に素直な正直なものであっても、そう簡単なことではありません。何しろ今までのやり方は考えなくてもできるごく自然なことであるのに対して、例えば、口から飛び出そうとする説教の言葉を飲み込み、相手の気持ちと吸んで能動的に聞き、相手が自分で考える手助けをするなど、子供にはやったことのない不自然なことだからです。考えてみれば、親しい友人や目上の人に対してなら、まず意見をいわずに聞くほうにまわるのもごく自然なことだと気づくのですが。

以来「親業」とつきあって十年、インストラクターになって五年になります。その間、対等な人と人とのコミュニケーションについて学ぶ機会があったとき、基本的には「親業」が特殊なことを言っているのではなく、民主的なコミュニケーションを親子の関係に適用し、具体的に伝えようとしていると分かりました。

子供の意見表明権―自己決定権を法律的に認めていこうとする「子供の権利条約」が国連で批准されるまでになった今日、親子関係は必然的に従来の支配―被支配の関係から、平らな関係へと変わることが求められているのだと思いますし、私もそれを心から願っている者ですが、まずそのためには具体的な言葉、態度―すなわちコミュニケーションのあり方の転換が必要なのは明らかではないでしょうか。たまたま日常の関係に深く悩むことや、あるいは知的な関心をきっかけとしてであれ「親業」に出会う親たちが、親も子どもとして相手を認めあって生きる関係を具体的に考えるきっかけを得ることは、小沢さんの言われる現実の暮らしの中で「煩雑さに耐えて関係をつくり出す力量」を増すことでこそあれ、決して親と子のスムーズな関係のみ

を目指す閉ざされた暮らしを求めることではないというふうに私は考えるのです。

残念ながらこの社会においては、例えば学校社会が顕著な例ですが、人と人との対等な関係の実現は、まだまだ夢のようで不自然です。つまりは差別のない社会を目指す動きはいつどこで始められてもよいし、特にそれが家庭の中で始められるなら最も望ましいと言えはしないでしょいか。ただし「親への固執」をよしとする習性はなかなかたがたく、「能動的聞き方」のかけに親の意図をすべりこませ、子供にはねつけられてはじめて気づくといったことも、訓練において珍しいことではありません。だからこそ訓練をと思うのです。

最後に早川さんにひとこと。「親であることを職業とわり切るなんて、やっぱり私にはできなかった」と言われていますが、「親業」という名前から連想された思いかとは思いますが、ゴードン博士もそんなこともとて言はずもないことを、誤解される方がいらっしやると残念なので、つけ加えさせていただきます。

Weに言おう
なんでも聞こう
なんでもなん



◆湾岸危機をめぐる自民党の対応、海部政権の日和見の姿勢に、危機を感じる毎日です。平和憲法が曲がり角にきています。将来一九九〇年が日本の転換の年だったということになるかもしれません。Weでも、憲法、平和、自衛隊派兵問題などを、ぜひ取り上げ、反対の声をまき起こしてほしいと思います。戦争になれば、女性と子どもが、最も生を脅やかされるのですから。(千葉・奥田暁子)

◆「自衛隊の海外派兵反対」のバッジを胸につけてませんか。あなたの「ノー」を表明するために。

「それがね、お前。何となく知らないうちに なっちまったんだ。あれよ、あれよといって いるうち、いつのまにか取り返しのつかぬ状況 になっていて……」

日中戦争・太平洋戦争を体験した人の言い

分だそうです。あれよ、あれよ、……戦争の 始まりは、きつとそんなものだと思います。 「邦人保護」から始まり、「日の丸」はいつ 行くのか。40億ドル援助、日の丸医療団、そ して武装自衛隊の海外派兵と、事態は戦争状 況へどんどん進みつつあります。

私たちは、また再び、あの悲惨な殺し合い を望むのでしょうか。否！ 否！ です。

私たちは、戦争の被害者でもあったし、加 害者でもあったことを痛切に反省し、再び銃 後の女となることを拒否します。その意思を 表すために、胸に「戦争放棄」と描いたバッ ジをつけることにしました。

かつては反対する自由がありませんでした。今はまだ、それくらい自由は残ってい ます。子や孫に「どうしてあの時、お父さんや お母さんは反対しなかったの？」と問いつめ られた時に、親として大人としてきちんと答 えられるだけのことはしておきたいのです。 それが、私たちの義務ではないでしょうか。

ぜひ、あなたの胸にもバッジを!!

(バッジは二百円 連絡、問い合わせ先は、 横浜市緑区奈良町二九六四一六 新美みつ子 ☎045・962・8474へ)

◆We100号記念号いただきました。おめでとう

ございます。学生時代、キリスト教に接した

故に、自分の一番不得手だった家庭科教師に なった悩みを取り上げて下さった半田先生。

女子大で学生たちにそれをぶつける機会を与 えて下さった先生。アメリカでウイ書房発足の ニュースを聞き、帰国後様々なWeのお導き

を手助けに、ささやかな男女共学の家庭科を 授業だけの気楽な非常勤講師を続けながら、

楽しんで生徒にぶつけてぶつけて今に至って います。本当にありがとうございます。

ご活躍の背後にあって、最大の御理解を示 された御主人様(この言葉はたいへん不適切

と存じながら)の御召天に、心からの御同情 を申し上げます。天において、霊安かれとお

祈り申し上げます。栃木の片田舎でささやか

ながら初志を継続している者がございますこと をお憶え下さい。感謝をこめて、一筆させて

いただきました。(栃木・若井克子)

◆We100号記念にふさわしい、年輪を重ねた人 々のテーマ、カバーも十月の冷気を感じさせ

る白で、素敵な一冊をおつくり下さいました こと、感謝いたします。中東問題で、急にい

つか来た道への後もどりのスピードが増しそ うなので、ご一緒に声をあげて、がんばりま しょう。(和光・加藤真代)

▶ 編集室からあなたに ◀

“'90年We秋のつどい”に
どうぞ参加下さい

◆10年目のWeに向けて始動！

1. テーマ決まりましたよ

4月号 教師という仮面を脱ぐ

5月号 少年少女の現在

6月号 心からからだへ

7月号 生と死を授業で

8・9月号 ひとと生殖

夏増刊号 高齢化社会, そのデザイン

10月号 売買春の構図

11月号 アジアの中の私たち

12月号 地球再生へ向けて

1月号 揺らぐ家庭

冬増刊号 夏季フォーラムの全記録

2・3月号 男女共生の道を拓く

2. 誌代改訂について

消費税導入以来ハンパな定額で、何かと面倒でした。91年4月号から下記のように改めますので、よろしく願います

・例月号 580円(本体563円)

・増刊号 700円(本体680円)

・年間購読料 7200円

(例月号のみ 5800円)

但し、年内振込みの場合は旧定価で可

3. 内容について

・家庭科の実践は、Vol.9と同様に、なるべくテーマに即して執筆者を募ります。

どうぞふるってお申し出下さい。

・発言欄は、当初投稿で構成するつもりでしたが、あまりに乏しいので編集部からお願いする形になりました。初心にもどりリレーエッセイ欄を新設します。例えば自衛隊派兵、天皇即位、法相発言をめぐって等など、最も今日的な問題について、シャープな意見、ユニークな発想の文章を待っています。発言やこだま欄は従来通りで活性化します。

・Weへのご意見は電話でもどうぞ、誌上掲載の可否をお尋ねしますので、ぜひOKして下さい。

シンポジウム「男を変える、女が変わる～男女で学ぶ家庭科新時代に～」

国連婦人の10年以後、女たちは蛹から蝶へ美しく変身しました。誘われるように、男たちもまた、男の解放、男の自立に目覚めつつあります。

折しも、日本の歴史始まって以来はじめて、男の子が家庭科を必修で学びます。そうです。3年後から中学で、4年後から高等学校で、男女が共に家庭科を学ぶのです。

家庭科の男女共学をテコに、日本の男を変えることができるでしょうか？女が変わることによって、男が変わる。男が変わればまた、女も変わります。

21世紀が、男にとって、女にとって、幸せな世紀となるかどうか。

それは、私次第、あなた次第、晩秋の午後、じっくりと話し合ひましょう！

〈シンポジスト〉

佐藤洋子 男の子には、こんな家庭科を朝日新聞記者

原 健 私の中に生きている家庭科
長野・梓川高で男女共学家庭一般を学んだ一期生

福留美奈子 男女に教えて私は変わった都立田園調布高校教員

諸橋泰樹 男は、どう変わりたいのか

Weに「男性学への契機」連載中
<司会> 半田たつ子

と き…11月25日(日)午後1時半～5時
ところ…新宿区婦人情報センター

新宿区荒木町116(☎03・341・0801)

都営新宿線(地下鉄)曙町下車5分

出口 A4 標識あり

参加費 1000円(含資料代)

問合せ先 ウィ書房(☎03・326・1380)

わたくしから

あなたに



んでまたまた感激し、気に入ってしまったのでした。一年生の授業で住環境の研究をしながら「みんなのまち」をテーマに、パッチワークもすることにしました。文化祭にまにあうよう、二クラスで約100枚のキルトをつなげて、たて・よこ二メートルのタペストリーを作ります。完成したら、写真にとってお送りしますので、ぜひ見て下さい。

◆We 100号を記念するフレンドシップキルトが集まってきています。私はフワフワ封筒が届くのを楽しみに毎日を過ごしています。それぞれ個性にあふれていて、少なくともこのキルトを縫っている間、Weのことをいろいろ思いながら、小さな布きれに自分の思いを表現しているんだな、と思うと、一枚一枚がいておしくて、ぎゅっと抱きしめたくになります。

一枚仕上げるためには、けっこう時間がかかっていますし、そんなみんなの思いを縫い合わせて、ひとつの作品ができ上がったら、きつとすてきだと思おうのです。

実は、私自身パッチワークははじめてなのです。たまたま『パッチワーク通信』という雑誌の中にフレンドシップキルトをみつけ、また水野スウさんの『まわれ、かざるま』(若草書房)が紹介されていて、その本を読

Weのキルトも、いつ完成するかわかりませんが、届いた分からはちぼちつないでいます。ある程度の大きさになったら、これも写真を送らせていただきます。

延藤安弘さんの『まちづくり読本』は、本屋さんに出た時、私もすぐ買って読みました。『こんな家に住みたいナ』を読んだ時から、お気に入りでしたので。『プラムおじさんの楽園』あの絵本も手に入れて、何年か前に、住居の授業で使わせていただきました。豊中のデネブや洛西ニュータウンのニューコート、宇治のあじろぎ横丁にも、去年行きました。デネブに住んでいる人には、話をきかせてもらったのですが、他は外観を見ただけなので、次の機会にはそこに住んでいる人とお話したいナ、と思っています。

「地域をよみがえらせる」、家庭科の授業で

何かもつともつとできそう、と思いはふくらんできます。『キッズ・ブレース』にもヒントがありそうです。家庭科って、なんて可能性あふれる教科なのでしょう。まだまだいろんなことがやれそうで、ワクワクします。生徒と共に、これからの私たちの暮らしについて語りあい、つくっていきけるなんて、とっても素敵だと思います。そんな実践を、これからいっぱい積み重ねていかなばならないのです。授業をどうつくるか考えるのは楽しいのですが、実際やってみると、うまくいかないことも多いのですけれど。また、次の機会には、授業の報告などさせていたいただきたいと思っています。

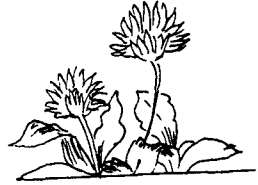
(大阪・浅井由利子)

◆八月に長野であった「女のからだから合宿」とてもよかったです。大げさかもしれませんが「命の洗たく」という感じでした。

十月五日には金井淑子さんの講演会が、札幌であり、一月号インタビュ어의加藤春恵子さんの紹介がありました。金井さんの本は、むずかしそーで、あんまり読み進んでいなかったのですが、話はとてもよくわかりました。「自立」を「権利」におきかえて、考えてみたいと思っています。

(札幌・高橋芳恵)

Weの 読者会だより



〈大阪の会・兵庫の会〉

◆九月九日の会のこととは、すでに西本さんが11月号で報告しているのですが、私も感想を。テーマは「地球はここまで汚れている―清掃工場から出ているダイオキシソウ」。私はコーヒー係として脇から参加者の顔ぶれを見ていて、こんなにいろんな人たちが集まるWeって、やっぱりいいな、と思いました。

そして休憩時間ともなれば、更に盛り上がる。無農薬抹茶を凍らせたのやら、和菓子、せんべいなど、それぞれ持参したものをにぎやかに味わいます。一段落すると、チャ―リ―たちの歌が流れます。六甲のさわやかな風と一緒に流れて、二歳のトモちゃんたちが、会場を楽しそうに走り回ります。忙しい、忙しいと毎日口ぐせのように言い、いつも会場には時計を見ながら走り込む私。でも、Weに

行くといつもホッとします。Weには、誰をも受け入れる優しさがあるからです。

(北川好美)

◆東京の中学校で先頭をきって、技術・家庭科の男女共学を实践された榎田真澄さんが、岡山大学の先生になったのを知り、地方紙の記者としてインタビューしました。それを「岡山の識者にうかがう『出生率低下―私はこう考える―』という記事にしたのですが、とても共感できるお話でした。We 岡山の会旗上げ期に参加された水島さん、榎田さん、ノートルダム清心女子大の虫明さん、高校教員の正保さんなどとともに、We 岡山の会も再出発できそうです。

(岡山・丹原恒則)

「男から男へ―We 夏季フォーラム・

〈女の解放・男の解放〉分科会の記録」

ができました！

◆50名の参加をえて行われた第五分科会の全記録です。討論は入口のところで終わった感がありますが、後に寄せられた11名の参加者の感想が十分にそれを補い、次への展開の芽は準備されました。小冊子をお読みいた

き、討論の輪に加わって下さい。

●内容(B5・60ページ)

パート1 分科会の記録

●問題提起

重川治樹「父子家庭の視座から」

津田正夫「男は高速道路から降りられるか」

諸橋泰樹「日本における男性学の可能性について」

●討論

パート2 参加者の感想

島田一生 田中一生 内山裕子 田上正子

梶原公子 林健彦 北川好美 江藤文紀

飯田淳 平井雷太 中野敬子

●申込み先

山本栄子 〒281 千葉市畑町662-35

7 ☎ 0472-72 7600

武田秀夫 〒198 青梅市野上665-18

☎ 0428-31-6947

ウイ書房

●頒価400円+送料250円(切手可)

(東京・武田秀夫)

We 100号記念の楽しい索引ができました!

We 関西の会の方たちが、「We 創刊100号記念索引編集委員会」を作り、情熱を傾けられた

「新しい家庭科—We、索引(創刊号から100号まで)」ができました。十倉ゆかりさんの表紙は「Iの拠点としてのWe」「WeのなかのI」をイメージしたものと、新鮮なデザインです。

内容は・創刊号から100号までの特集テーマ一覧・索引の利用のしかた・テーマ別索引・100号によせて・各地のWeの会とイキイキぐるうぶ紹介・執筆者名索引・編集後記。目次を紹介しただけで、充実ぶりがおわかりでしょう。

テーマ別索引は、教育、家庭科教育、子ども、家庭・家族、女と男、働くこと、政治と社会、自分らしく生きる、くらし(人と人のかかわり)、環境、の10に分けられ、別に、連載タイトル一覧と、新しい家庭科を創るために、「波」100号タイトル一覧がまとめてあります。

九百人を越す執筆者について、お一人お一人の名前の読み方まで克明に調べた努力に脱帽。なんと大勢の方がWeに書いて下さったの

でしょう! はじめの言葉に「Weによってたくし達は豊かな出会いをもちました。このことは、かけがえのない共通の財産です」とありますが、この索引をつくり上げて下さった方々がいらっしゃるといふ事実もまた、Weの財産です。

「We 100号によせて」では、五〇名近い方たちが、それぞれ個性的な「ひとこと」を述べておられます。橋本幸子さんが「Weにつどう人々は、不思議な能力の持ち主です。We 100号記念の『索引』作りに協力しあう仲間の姿を見て、その中の一人になって、その誠実さに感じ入りました」と書いていらっしやいます。

何が幸せと云って、魅力的な人と接する楽しさを出るものはないでしょう。川名はつ子さんが言われるように「Weを丸かじり」して、吉田清彦さんが言われるように「みんなと一緒にウルウルしましょう」。

なお、特集テーマ一覧に、「82年・83年は残なし」としてありますが、実は下の各号が、僅少ながら在庫あります。100号ピシッと揃えるために、欠けている号を補いたい方、はが

きでお申し込み下さい。

'82・創 いでたちぬいま

6 共に生きる

7 新しい家庭科とは

8・9 反戦とは、平和とは

10 人間の自立とは

11 家事労働を問う

12 家庭・家族

'83・1 男と女の新しいかかわりを

2・3 くらしをいとおしむ

4 教師は、今こそ声を

6 はたらくことをめぐって

7 コミュニケーション

10 今、教科書問題を問う

11 食べるということ

12 着るということ

2冊しかない号もありますのでお早めに。

100号そろっているのが1セット、増刊号を

省いたのが6セット、実費、送料当方負担で

お頒ちできます。ウイ書房にお申し出を。

索引は、A5・64頁、五百円、送料一七五円

申し込み先は、相川美和子(657神戸市灘区

鶴甲4・6鶴甲コーポ23-402)、西本和代

(655神戸市垂水区狩口台狩口台4-24-301

☎078・781・9427)まで。

泉

★★★★★★

この頁はあなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください。

◆かながわ女性アカデミー

- 。産む自由・産まない自由 〓生涯出生率の低下を考える〓
- 。日時・テーマ(すべてp.m.1・30〓3・30)
- ・11月16日(金) 「家」から「家族」・「シングル」の時代へ 〓社会にとつての子供の意味〓 講師 牧野カツコ
- ・11月22日(木) 子供は生みたい でも〓女性の就労と子育て〓 講師 久場鳩子
- ・11月30日(金) ゆとりある超高齢化社会へ向けて 講師 新田俊三
- ・12月7日(金) 子育て―男・女・社会の責任― 〓ペネル・デイスカッション〓
- 講師 岸本重陳/牧野カツコ/金森トシエ
- 。場所 神奈川県立婦人総合センター
- 。定員 百名
- 。受講料 無料(託児あり)
- 。問合せ 神奈川県立婦人総合センター・生涯学習部 ☎0466-27-2111 (内)561-562

◆夫婦別紙の法制化を実現する会より

- 。実現する会リーフレット紹介
- 。A4版三つ折り(イラスト担当・矢口由美子)がもうすぐ完成。会の資料として配りたい方は、同会へ問い合わせを。
- 。実現する会・秋のイベント(予定)
- 。内容 実現する会が作成した民法七百五十条等の改正案の発表及び討論(含資料代)
- 。日時 11月24日(土)午後一時半より
- 。場所 渋谷勤労福祉会館
- 。問合せ 同会〒101 千代田区神田錦町一ノ六 神田錦町ビル三階 大手町共同法律事務所内 福島瑞穂 ☎03-291-0809
- ◆家庭教育国際セミナーのご案内
- 。テーマ こどもの社会化と「ペアレンティング」―母性・父性を超えて―
- 。議題Ⅰ 子どもの社会化と育児の現状
- Ⅱ 育児ネットワークと育児援助
- Ⅲ ペアレンティングの今日的課題
- Ⅳ まとめ
- 。期日 '91年3月13日(水)〓15日(金)
- 。傍聴者 家庭教育関係者五十名程度(全日程参加できる人)
- 。経費 宿泊費 一人一泊八百二十円(前・後泊は千三百円)

◆教養講座「幻想の(子ども時代)〓子どもの権利条約にみる世界」

- 。食費 一日三食二千五百〓三千円程度(カフェテリア方式)ただし、第一日夜は懇親会費三千九十円(消費税を含む)
- 。主催・会場・問合せ 国立婦人教育会館 埼玉県比企郡嵐山町菅谷七二八
- ☎0493-62-6711 '91年一月三十一日(木)まで
- 「世界の全ての子どもに最善のものを与える」という国連の理念を、日本はどのように受けとめ、果たしていくのか。現代社会を見据え、新たな視点で「子どもの権利条約」を考えてみたい。
- 。テーマ 第三世界の子どもはなぜ飢えるのか/近代社会の成立と子ども期/民俗学からみた子ども/子どもにとって小学校とは何か/子どもは小市民か? など
- 。講師 楠原彰 野本三吉 篠崎睦治
- 。日程 11月28日、12月4日、12日、19日
- 。時間 午後6時30分から8時30分
- 。会場 豊島区民センター
- 。定員 50名(無料)
- 。申し込み 豊島区社会教育課社会教育係 ☎03-981-1111内線3455、3456

十字路

〈北海道〉先祖の地・国後
望み供養祭(朝日9/26)

北方領土・国後島を望む
根室半島ノックマップで二
十四日午前零時、二百一年
前に同所で処刑された三十
七人のアイヌ民族の苦しみ
を訴える「ケウタンケの儀
式」が行なわれ、民族衣装
を着けた人たちが先住の地
に向け思いを募らせた。

議長・委員長が辞任(豊富町)(朝日9/26)

留萌支庁幌延町に建設を計画している動力
炉・核燃料開発事業団(動燃)の高レベル放
射性廃棄物研究・貯蔵施設をめぐる、宗谷支
庁豊富町議会が「促進決議」をした問題で、
「町民の会」から同町議長と放射性廃棄物問
題調査特別委員長の二人の解職請求(リコー
ル)が起こされているが、二十五日開かれた
町議会で、打田豊造議長と佐々木一郎・特別
委員長がそれぞれの役職の辞任を申し出て承
認された。山本行雄副議長も辞任した。三人
とも議員活動は、これまで通り続けるとい
う。

(高橋芳恵)

〈千葉〉水源保護条例求め陳情書を提出へ

小櫃川の水を守る会(朝日9/30)

産業廃棄物処分場問題に取り組んでいる住
民運動団体「小櫃川の水を守る会」の総会が
二十九日、木更津市で開かれた。今後の運動
方針として、川の上流部に当たる君津市川谷
区の産業廃棄物処分場について、危険性など
を明らかにして営業の中止を求めていくこと
などを確認した。一方、会の木更津支部によ
ると、木更津市議会の十二月定例会に向けて
「水道水源保護条例」(仮称)の早期制定を求
める陳情書を提出する方針で、近く市内で署
名運動を始める。

(木田直子)

〈東京〉都立高中退、最悪に(朝日10/16)

都立高校全日制普通科の中退者が、昨年度
一年間に五千五百十人余を教え、過去最悪だ
ったことが十五日、都教育庁のまとめで分か
った。一校当たり二十四・四人が中退した計
算で、中には、一校で百五十九人が中退した
高校もあり、教育庁は衝撃を受けている。半
面、都内の私立高校の中退者は約四千六百人
で、過去最低。受験生の「都立離れ」が言わ
れる中、明暗はつきり分かれる結果となっ
た。

(編集部)

〈埼玉〉視察報告書はJTB製(毎日9/22)

川越市で、83年から89年まで、欧州旅行に

参加した議員の議会事務局に提出していた視

察報告書が旅行代理店、JTB(日本交通公
社)の作成した資料そのままだったことが二
十一日、同市民から出された監査請求で明ら
かになった。昨年、欧州へ行った行田市の報
告書も川越市とそっくり同じ。JTBは全国
の自治体からこうした旅行を募っており、各
地で同じ報告書が出されている可能性もあり
議員のモラルが問われそうだ。(協美智子)

〈愛知〉市の助成もらえず十年一名古屋の学
童保育所「ひまわりクラブ」(朝日9/16)

名古屋市は、地域の育成会に助成金を出す
民間運営方式を、全国に先駆けて実施してき
た。が、中村区稲上町にある学童保育所「ひ
まわり学童クラブ」は、地域役員の同意がな
いという理由で、十年間も市の助成が受けら
れない活動を続けているのに、十年たっても
助成がないなんて、異常です」と、親たちが
地域全戸に実情を訴えるチラシを配布するな
ど、怒りの行動を昨年暮れから続けている。
空のアルミ缶・牛乳パック回収作戦、好調
なスタート(朝日9/19)

名古屋市が、ごみの減量と資源の有効利用

の一環として、七月十六日から始めた「空き

アルミ缶と空き牛乳パックの引き取り」状況がまとまった。一カ月半の間に市民が持ち込んだ量は、市の当初目標を、アルミ缶で二三%増、牛乳パックは二倍以上も上回った。売却金も約九十一万円が、市福祉基金に積み立てられた。

（山本直子）
〈富山〉全国に先駆け学級定員減を検討（北日本9/18）

生徒急減期に対応し、県教委が来年度から全国に先駆け、県立高校の一学級の定員数見直しを含む改善に乗り出すことが十七日の県議会で明らかになった。県内の来春の中学卒業予定者は、本年度より一千人近く少ないと見込まれており、学級定員が現在のままでと十七学級の減少になる。県教委は今後、長期的な生徒減少に対応するため、学級定員の減少や定員据え置きによる教師の多忙化解消など県独自の対策を検討し、十一月に発表する県立高校の来年度学級編成に盛り込む方針だ。

（河原敏美）
〈京都〉ボランティアで老若交流を―「もぐら商会」大好評（毎日9/16）

「異才、凡才大集合」と、京都市内の主婦らで発行するミニコミ紙が、世代間の交流を旨し、ボランティア登録サークルを作った。

今年四月から業務を始め、「もんべの作り方ぐらいしか知らない」と登録した老婦人が、若い女性を実技指導したり、老人家庭の引越に「力仕事なら……」という若者が駆け付けたりとの交流。「お金にならないから、目の見えないだろう」と、付けた名前は「もぐら商会」だが、老若双方から「どんな小さな能力でも社会参加のきっかけになるのがうれしい」と大好評。クチコミで登録の輪が広がっている。

（塚崎美和子）
〈大阪〉雑木林よみがえらせよう―堺の市民グループが「柴刈り十字軍」（朝日10/3）

身近なみどりを守る条例の制定を目指している堺市の市民グループ「みどりの市民委員会」が里山の雑木林をよみがえらせる「里山フレッシュアップ体験」の参加者を募っている。

同委員会が自然観察会などを実施してきた堺市の美木多上地区を対象地に、事前の観察会や公開講座の後、十一月二十三日（雨天の場合は十二月二日）に作業してもらう。参加資格は小学校高学年以上。体験費は資料代など五百円。申し込みはがきに住所、氏名、年齢、電話番号を書き〒558堺市西野155、福島古さんへ。

（大江美香子）

〈岡山〉「放射能ゴミはいらぬ」条例求める会、県へ本請求（山陽10/13）

高レベル放射性廃棄物の県内持ち込みを拒否する県条例の直接請求運動と取り組んでいる「放射能のゴミはいらない」県条例を求める会」は十二日、有権者署名簿の審査をしていた各市町村選管からの返付をすべて終え、全有効署名数を集計した。この結果、有効署名数は、直接請求に必要な県内有権者の五十分の一（約二万八千五百人）を大きく上回る二十八万九千九百九十八人に上った。同会は十八日、県知事に対し、条例制定の本請求を行う。

（丹原恒則）
〈福岡〉生徒への郵便、学校が開封（朝日10/9）

飯塚市の小学校教員二人が、近隣の六十四の中学校の生徒会長あてに『生徒人権手帳』（三二書房）という本を郵送したところ、少なくとも十校の教員が無断で開封したうえ、「内容に問題がある」などと言って送り返したことが八日、わかった。送り主の教諭らは、「管理権や教育的配慮の名の下に、人権侵害が行なわれていることを示す「事例」として、近く日本弁護士連合会に人権救済の申し立てを行うことを決めた。

（安部宣人）

ア・ン・テ・ナ

★新生ドイツ、スタート

ドイツは戦後45年の分断を経て、3日午前零時(日本時間同8時)、統一を実現した。西独のもとに編入された東独は、国家として消滅。欧州の中央部に、戦後処理を終え主権を完全に回復した人口約8千万人の大国が誕生した。西独の正式名称「ドイツ連邦共和国」がそのまま新生ドイツの国名となり、国旗、国歌とも西独のそれが引き続き使われる。その瞬間、首都として復活したベルリンでは、旧帝国議会前での記念式典会場で国旗が掲揚され、周辺に集まった約100万人が見守る中で祝いの花火が打ち上げられた。ワイゼッカー初代大統領は、「ドイツ国民は、統合された欧州の中で世界の平和に貢献したい」と宣言した。(10.3日付 朝日)

★「平和協力」と自衛隊派遣

政府・自民党は中東貢献策の柱として臨時国会に提出する「国連平和協力法案」(仮称)の中核となる国連平和協力隊に参加する自衛官の扱いについて、海部首相と小沢幹事長ら自民党4役は9日夜最終調整を行った。同法案の自衛隊の扱いは、平和協力隊への参加から、いったん、輸送業務については自衛隊に委託する方式になり、最終調整では、平和協力隊に参加する自衛隊員はすべて協力隊員と自衛隊員の身分を併せ持つ「併任」の形で、決着となった。また本部を総理府でなく内閣に設置し、本部長(首相)の下に防衛庁長官や外相らも副本部長として加わることになり、これによって協力隊のほかにも、一定業務に限って、事実上、自衛隊の直接派遣を認めるという二本立てでは回避したが、反面、協力隊を極力、文民組織としたいとした当初方針が崩れ、自衛隊色の強いものになった。実質的には海外紛争地域への部隊としての自衛隊派遣へ道を開いたことになり、二転、三転した政府方針とともに、臨時国会では憲法解釈論争と国際貢献策のあり方を巡って論議が繰り広げられることになる。(10.10日付 読売)

★水俣病訴訟、初の和解勧告を国が拒否

首都圏や鹿児島県出水市周辺の水俣病認定申請者ら400人が、国、熊本県、チッソ(本社・東京)とその子会社3社を相手取り、水俣病被害による損害賠償を求めた「水俣病東京訴訟」の第36回口頭弁論が28日、東京地裁民事16部で開かれ、荒井真治裁判長は「歴史上類例のない規模の公害事件が、公式発見後34年以上が経過して、なお未解決であることは悲しきべきことであり、早期解決のためには、訴訟関係者がいる時点で何らかの決断をする他はない」と初の和解勧告を行った。(9.29日付 読売)

この和解勧告を受け、その対応策を検討してきた環境庁は、10月1日「現時点では和解には応じられない」との結論をまとめ、法務省も同日、国の見解として同地裁に伝えた。この訴訟では、被告の国として環境庁、通産省、農水省、厚生省の4省庁の責任が問われていたが、他の3省も「問われるべき責任がないので、和解には応じられない」との結論を下した。

被告3者のうち熊本県とチッソは、この勧告を受け入れているが、国の「拒否」で、同地裁は少なくとも、被告・国については判決を下すこととなるが、判決内容がどちらにころんでも、高裁への控訴、最高裁への上告手続きが取られるのは必至で、最終決着にはなお数年を要することは間違いない。(10.2日付 読売)

★「戦後45年の損失」にも償い

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)を訪問中の自民、社会両党代表団と朝鮮労働党による「日朝関係に関する共同宣言」が、28日、平壤市内の万寿台議事堂で調印された。共同宣言は、最大の焦点だった「謝罪と償い」問題について、戦前、戦中36年間の日本の植民地支配だけでなく、戦後45年間も含めて北朝鮮に損失を与えたとし、「十分に公式的に謝罪を行い、償うべきだ」と言明、日朝の国交関係樹立時に「償い」を実施すべきだとしている。

また、日朝間の早期の国交関係樹立で合

意。11月中に政府間交渉に入るよう政府に働きかけることを明記した。共同宣言は、1910年の「日韓併合」以来の日朝間の「不幸な過去」に終止符を打ち、新たな関係を築こうというもので、今後具体的な関係改善にむけ、政府間折衝が本格化することになるが、戦後45年も「償い」の対象にしたことに対し、政府・自民党内に早くも問題視する声が出ているのをはじめ、韓国側が反応するのは必至とみられ、国内外で大きな論議を呼ぶのは確実とみられる。(9.29日付 読売)

★学校はパソコン巨大市場

新学習指導要領により、コンピュータを学習に利用するため、文部省は、今年度から5カ年計画で全国すべての公立小・中・高を対象に最終的には1900億円を投じ、計40万台のパソコン導入をする。このため教育現場が新たなパソコン市場として、業者間の激しい販売競争の舞台となっているが、大津市が中学校3校に購入した教育用パソコンの落札価格が、標準価格の8割引きという常識はずれの低価格だった問題も出て、教育現場が今後も各地で業者の超安値攻勢にさらされるのは避けられそうもない。(9.23日付 読売)

★外国勢に参った——国勢調査

総務庁は今回の国勢調査から英語だけでなく、フランス語やドイツ語など10カ国語を追加した11カ国語の調査票対訳集を作り、在日外国人の回収率アップを目指したが、それ以外の外国人が相次ぎ、東京都新宿区や川崎市内などで回収できない事態が起きている。

約1万7千人の外国人が登録し、東京都内有数の盛り場、歌舞伎町を持つ新宿区は、対訳集のうち、中国語と韓国・朝鮮語を増刷したが、外国人登録では4番目に多いフィリピン人のタガログ語の対訳集がなかったり、調査員が訪ねるとマンションの一室に40～50人が住むケースがあり、しかも帰宅は午前2時、3時。同区国勢調査実施本

部は「接触できないのも大きな悩み」という。(10.6日付 朝日)

★「世界子供サミット」開幕

'90年代を「子供最優先」の時代にしようとして、海部首相ら世界各国の首脳約70人が一堂に会する「世界子供サミット」は29日夜(日本時間30日朝)、ニューヨークの国連本部で幕を開けた。本会議では子供の生存、保護、発育などについて話し合い、飢えと栄養失調の根絶戦争の惨禍からの子供の保護などを目標にした宣言と行動計画を採択する予定。(10.1日付 朝日)

★子育てへの不安が増加

総理府が21日付で発表した「家庭教育に関する世論調査」(15歳以上の男女5000人対象、回収率74.8%)によると、「家庭教育はうまく行っていると思うか」と聞いたところ、90.1%が「うまくいっている」と答えたが、「子どものしつけや人間関係、性格や将来のことで悩んだり、不安を感じたことがあるか」の問いには、54.6%が「ある」、45.4%が「ない」と答えた。10年前の同調査に比べると、その比が逆転し、「ある」が10.7ポイントも増えた。なかでも、女性の58.2%が、「ある」と答え、家庭教育における悩みや不安を抱える女性が、男性の「ある」49.1%に比べて多いことがわかった。(10.12日付 朝日)

★増える女性聖職者

キリスト教の世界で、女性の聖職者を巡って新しい動きが出始めてきた。日本福音ルーテル教会がこのほど東京都で開いた定期総会で、夫婦の牧師が同じ地域、教会で働けるよう、規則を改正した。日本聖公会もこの春、女性聖職の実現を検討する委員会を設けた。1933年、女性初の正教師(牧師)高野久野さんが誕生した日本基督教団も近年、女性の正教師が増え、「世界でもこれだけ多いところはない」といわれ、女性の社会進出と歩調をあわせているようだ。(9.26日付 朝日)

編集後記

◆週末ともなると、集会やイベントのお知らせが目白押し。社会問題に即、否！ を突きつけて結集するエネルギーには圧倒されます。

◆Weでも十一月二十五日(日)午後(詳細79頁)、秋のつどい「男を変える、女が変わる」男女で学ぶ家庭科新時代に」を開きます。男の子も学ぶ家庭科に焦点をあててのシンポジウム。秋の一日、共に話し合いました。(青木)

◆この号を担当し編集する中から、家庭科で「メディア教育」をとりあげることの重要性―それによって、かなり過激に、教える側の思考の枠組を広げざるをえないことをも含め―を一層強く感じるようになってきました。

◆その時々ホットな情報を

できるだけ誌面に反映させていきたいと思っています。発言、様々な集会の報告・感想等ぜひお寄せ下さい。(稲邑)

♣夫はテレビのドラマを創っている。以前は私や友人たちの評価を一番気にしていた彼も、最近「君がいいと言うものは視聴率がとれない」と言い、いくらいドラマを創っても視聴率が悪ければ次の仕事がないとぼやく。テレビ界は今や視聴率という一神教に席卷されてしまった。スポンサーにとつて神は絶対であり、この神に対抗しえたのは天皇だけであった(河村)

♥Weにかかわってから、早くも半年たちました。いつもスタートの遅い私は、やっと、本が発行されるまでのシステ

ムがわかったこのごろです。♥小学校でパソコンを使ったり、家において買いた物ができ、知りたい情報がすぐにわかる、便利な世の中ですが、ふと、利用しているつもりでも、利用されているのではと考えてしまいました。そうならないように用心。用心。(渡辺)

★超多忙の中、わざわざ夫の弔問に来て下さった依萌子さん。夫の臨終に立ち合えなかった悔いを話すと「彼はあなたに別れを告げなくなかったのよ。彼はちゃんとするのよ。あなたがどこへ行こうと、おんぶおばけのように身体にしがみついているのよ」と言い切りました。久しぶりに声を合わせて笑いながら、夜が明けたように心が晴れ、さすがだなあ、と思うのでした。

★次号は「性役割の固定化は揺らいだか」です。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおさえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- | | |
|---------------------------|------------------------------|
| 90/4 '90年代、学校を変えよう(¥567) | 86/1 ぐらしの文化を探る(¥530) |
| 90/5 生、そして死に迫る教育(¥567) | 87/1 ぐらしの論理を創る(¥530) |
| 90/6 「家庭生活」をどう語る(¥567) | 88/8.9 コンピューター、何をどう変える(¥550) |
| 90/7 「環境・資源」を見つめる(¥567) | 88/12 マスコミと文化の変容(¥550) |
| 90/夏増刊号 家庭科が変わる | 88/8.9 地球市民として生きる(¥567) |
| 情報化のうねりの中で(¥721) | 89/10 食べものから地球を見る(¥567) |
| 90/8.9 消費者教育は、何を指す?(¥567) | 89/11 からだーその不思議(¥567) |
| 90/10 地域をよみがえらせる(¥567) | 89/12 コミュニケーション-私をひらく(¥567) |

新しい家庭科

Vol.9 No.9 1990年11月20日発行
定価567円(本体550円+税17円)送料共
年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!

共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編
男女共修の家庭科の授業で、
生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編
2060円 千310円



●男女で学ぶ新しい家庭科
—京都における歩みと実践—

森 幸枝
1339円 千260円

●消費者教育の創造

宮坂広作
2060円 千260円

●教室のミニ舞台から 児玉澄子
—こぼれ話20—

1350円 千260円

●若いいのちの像 児玉澄子
—私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

●子どもって不思議 長谷川孝
—学ぶことは生きること—

1339円 千260円

●人間って不思議 半田たつ子
—一つの視角—

1545円 千310円

もしかしたらちいきなじゅくはユートピア
●私塾霞国語教室風景

武田秀夫
1751円 千260円

●子ども発、大人へ
—いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」& 小沢牧子
1339円 千260円

●らくだが翔んだ 平井雷太
—教育の常識の非常識—

1236円 千260円

<羽生槇子詩集>

●木、鳥、娘たちとわたし
1030円 千260円

●絵 III
1030円 千260円

●夢運び屋
1545円 千260円

最新刊

●花・野菜詩集
1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 326-1380 振替 東京 6-59867